

---

# ある魔術師の話

白夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある魔術師の話

### 【Nコード】

N9274P

### 【作者名】

白夜

### 【あらすじ】

生まれる前に異世界に奪われた弟の代わりとして召喚された少年。弟の協力で自由と力を得るものの、異なる世界で彼はどう生きるのか。最強でチートな力を持ちながら、のほほんと生きる異世界漫遊記です。

## プロローグ

気付いたら、宇宙にいた。

上下左右、すべて漆黒の闇。

遠くに見える星の輝き。

昨夜も普通にベッドに入って寝てたはずなのに。

つまり、夢か。

いつも見る夢とは違ったために混乱してしまった。

夢らしく、自由に動けるようなので気の向くままさま迷ってみることにした。

なんとなく、あっちに行ってみたいんだよな。

理由もなく惹かれる方向へ移動してみる。

長年自由に動けない夢ばかり見てきたので、宇宙遊泳っぽい状況が楽しい。

景色に変化がないのは原点だが、満天の星空の中は綺麗だ。

やがて、ひとつの星に近づく。

月くらいの大きさに見えるほど近寄ったその星は緑と青の綺麗な星だった。

模様が違うので地球ではないだろうが、似た印象で。

このまま大気圏突入とかして宇宙人がいるか、確かめたくなる。

夢だから大丈夫だよな？

生身で大気圏突入とか普通は絶対無理だろうが、夢なら何でもありだろうし。

それに、どうしようもなくこの星に惹かれる。

まるで、誰かに呼ばれているように。

気軽に深く考えずにその星に近寄っていると。  
突然脳裏に声が響いた。

（来るなっ！！）

聞き覚えのある声に怒鳴られ。  
俺は弾かれたように飛び起きていた。

目を覚ましたのは当然自室のベッドの上だ。

窓の外はぼんやりと薄明るく。

時計は起床時間の30分ほど前を指している。

ちなみに朝練があるので5時起き。その30分前。

貴重な睡眠時間が……。

二度寝するにも時間が少なすぎるので渋々起き出す。

楽しい夢を邪魔した声に若干の恨みを抱えつつ。

それでも着替えが終わる頃には、そんなことはすでに忘れ去っていた。

基本的に俺は夢をあまり忘れない。

夢であるはずなのに、曖昧さや矛盾の少ない連続した夢を見続けているからだ。

いや、見ていたというべきか。

物心ついたときからずっと同じ少年の夢を見ている。

自分の意志で動くことは出来なかったがその少年と同化したように、彼の中で本を共に読み。

様々なことを学んだ。

王都と呼ばれる中世のような都市を歩き。

身の回りの些細なことから家族やメイドのこと。

庭師の名前に至るまで見聞きしていた。

もちろんリアルタイムにすべて知ってるわけではないが、かなりの部分を把握していると思う。

魔法が使える世界で貴族の少年の夢だ。最初の頃は自分の想像力に呆れていたがあまりに詳細な設定ですべて自分の妄想とは思えなくなってきた。

が、そんなことを人に言えば可哀想な子を見るような目で見られそうなので連続ドラマでも見るような気分で見ることになっていた。

波瀾万丈というわけではなく、むしろかなり病弱らしい少年の日常はかなり退屈だったが。

だがその夢は少年が高熱で苦しんでいるところで終わっている。

……彼は自分がこのまま死んでしまうのだからと思うっていた。

そして、3日と開けずほとんど毎日のように見ていた夢はもう一週間も見えていない。

彼は死んでしまったのだろうか。

ずっと見てきた、自分の一部のような存在が失われたかも知れない寂寥感は確かにあったがそれをどうにかする術はなく。

俺は俺の日常を生きていた。

その日まで。

この日、もうじき試合のある部活のために疲れ切って寝た俺は昨日と同じ夢を見ることになる。

正しく、続きなのだろう。

目の前にはどうしようもなく惹かれる星。  
昨日の夢を思い出したが、止める声は今度は聞こえず。  
心の赴くままに、星へ突入していた。

降り立ったそこは緑の森だった。

良く分らない種類の巨大な樹木。見慣れない生き物。

生き物がやたらと獰猛そうだったのが怖い。なんでウサギに立派な爪があるのか。

鹿っぽい生物の角はやたらと鋭そうでなぜか赤黒く濡れていた。：

…草食じゃないのかもしれない。

他にもイノシシを魔改造した雰囲気の生き物や爬虫類が謎の進化を遂げたのかと思うような生き物を見ながら森を突き進む。

行かなければならない場所があるような気がするんだ。

実体がないのだから一直線に行けばいいのかも知れないが、木に体当たりするには常識が邪魔をするので素直に歩き続ける。  
空を飛べないのが残念だ。

疲れはないが、いつになっただり着くのだろう。

このままたどり着くまで歩き続ける夢を見ることになるのだろうか。  
すでに飽き飽きしながらそれでも歩き続けること数時間。

そろそろ起床時間かなーと思い始めた頃、小さな泉に出た。

喉も渴いてないが、森の中でさ迷ったまま明日の夢に繋がったら堂々巡りのようで気力が失せそうなのでここで目が覚めるまで待機してみようか。

明日ここから始まれば延々と森をさ迷つてるといふ焦燥はなくなり

そうだ。

ごく自然にこの夢が続くと思ってしまうのは、長年継続した夢を見続けたせいだろうか。

まあ、二度と続きが見られなくても夢は夢。たいしたことはない。

水辺に横になって空を見上げる。

夢の中で寝ようとするのも変だが、くつろぐには横になるのが一番いい。

見上げた空は青く澄んでいた。

森の樹木に囲まれ、遮られた空は狭かったが、それでも綺麗な色で。現代日本はとうてい見られないような、澄んだ空だった。

この夢もいいものだな。歩いた甲斐はあったかも。

大きく伸びをしたとき、俺は俺に出会った。

うん、なんのことが解らない。

目の前に自分がいたのだ。

毎日鏡に映る自分と寸分違わない姿。いや、やや痩せて顔色が悪いか？

「うわっっ？」

そのまま飛び起きたらのぞき込んでる彼に体当たりしそうだったが、とっさの反射で横に転がったためにそれは避けられた。

かなり情けないと思うが、半分腰を抜かして身構える。

「ひどいな、ずっと呼んでたのに」

少年が俺と同じ声で言うが、呼ばれた覚えなどない。

そして声まで俺とそっくりで正直気持ち悪い。

ドッペルゲンガーか？ そっくりさんに出会って死ぬって話があったよな。

夢だから大丈夫だろうか。

「混乱してるのかな？ 初めまして、兄さん」  
そういつて笑う顔も嫌になるくらい自分と同じもので。

「いや、あり得ないだろ。似すぎ」  
世の中に自分の知らない兄弟がいる可能性はそれなりにあるかも知れないが。

年もほとんど同じくらいだし、親父が浮気したとしても母親が違うなんてあり得ないくらい似すぎている。

兄弟だというなら、双子しかあり得ないだろ、ってくらいだ。

「似てて当然。双子だからね」

あ、ちよつと納得。双子ならこのそっくり加減もありだろう。

だが……。

「あり得ないだろ。俺の兄弟は生まれる前に死んでる」

生まれる前に死んだ、というよりは消えてしまったのだというが。

実はよくあるらしい。

存在する前に消えてしまった存在を嘆いてた母を覚えているので軽く調べたんだ。

バニシング・ツイン。

死産や流産よりはマシなのかも知れないが、気付かないことも多いという現象に母は気付いてしまった。

失った存在を嘆き続けて、死んでしまった。

生まれてきた俺を置いて。

「おまえが俺の双子の兄弟だっていうなら、母さんは死ななかつただろうよ」

冗談や嘘として言われるのは、かなり不快だ。

その気持ちや伝わったのか、少年は申し訳なさそうな顔になる。

「僕だって、ちゃんと生まれたかつただけどね……。とりあえず話を聞いてくれないかな、兄さん？」

しつこく兄弟認定されたままだ。

だが、あれだけ申し訳なさそうな顔をしておいて嘘を突き通すはず



もない。

あり得ないと断言した双子説を押し通すつもりらしいし、説明くらは聞くべきだろう。

夢もまだ覚めないことだしな。

座り直して話を聞く体勢をとる俺に安心したように笑う少年。

「じゃ、まずは名前からかな。僕はレンフォード・グルテルグ。レンって呼ばれることが多いよ」

その名には聞き覚えがあった。

いつも夢で俺が同化してた少年の名前。

彼は親しい人間にはいつもレンと呼ばれていた。メイドや庭師はレンフォード様と呼んでいたからそっちが正式名称だろう。

名字までは知らなかったが。

「兄さんはハヤトだよな？ ええっと、フジサキ・ハヤト」

こっちは名字まで知られてたらしい。もしかして俺だけではなく彼も夢の中で俺に同化してたのか？

「もしかして、夢か？」

半ば確信しながら問いかければ肯定が返ってくる。

見られて困るような生活は送ってないが、私生活が筒抜けだと思つと气まずい。

見られてるだけでなく見てるしな。

見てまずそうな光景は多分ないと思うが。

「最初に。僕らは一緒に生まれてくるはずだったんだ。だけど、それをこっちで僕の母親と言うことになってる女が奪った」

その女は跡継ぎを埋めないことが判明したら離縁されかねなかった自分を守るために普通なら成功しないはずの召喚魔法を改造し、成功させたいらしい。

そもそもの召喚魔法はこの世界の存在を一時的に呼び出すことしかできない。

それぞれの存在には自分の居場所がある。それを魔術で切り離すの

は難しいらしい。

切り離せても、この世界に存在し続ければ正しい場所に帰ろうとする力が働く。世界から完全に切り離してしまえば、存在自体が消え失せる。

だから異なる世界から連れ込むことにしたらしい。

だが、そんなことをしてもこの世界の存在でない以上いずれ世界に拒まれ消える。

そこを、異世界の胎児を自分の胎に宿し血肉を備えて生むことで肉体という器を世界に認められる存在として定着させたと言うことだ。…… 実際にはもっとややこしい話らしいが俺の理解力ではこの辺が限界だった。

本来双子として生まれてくるはずだった俺たちには何らかの絆が残ったのだろう。

それで互いの夢を見続けたのかも知れない。

血肉がこの世界のものだとしても、俺とのつながりが残ったせいか本質が異なる少年…レンは世界に拒まれ続けた。

世界に拒まれるというのがどんな感覚かは俺には分らないが、かなり辛い思いをしたのだろう。

そのせいで母親の所業を知ったらしいが。

「一応肉体を作った存在だけだね、母親だなんて言ったら怒るよ？」  
内心で思ったただけなのに突っ込まれた。

これが双子の以心伝心ってやつなのか？ 余計なことを考えると怖いな。

とにかく、そうやって母親だと思ってた女の所業を知ったが自分自身の件にはすでに打つ手はなく。

彼女がやるうとしていいることを調べるのが精一杯だったらしい。

俺は夢で彼を見続けていたが何も気付かなかった。

彼が苦しみ、傷ついていたことも、調べていたことにさえ。

ただのんきに食事を楽しみにしたり、魔法にわくわくしてただけだった。

気付いたからといってどうにかなるものではないだろうが心苦しいことに変わりはない。

「……ごめん」

謝って済むことではないだろうけど。

母親に置いて逝かれたことで生まれてこなかった兄弟を羨み、恨んだことさえあった。

それを、レンが知っているかは解らないけれど。

「謝ることなんてない。悪いのはあの女だしね。……それに、僕も母さんのことは知らなかった。僕を失って悲しんでくれたって聞いて、嬉しかったしね……」

互いに顔を見合わせ、苦笑う。

どちらとも、本当に誰にも知られたくないような部分は伝わってなかったらしい。

いいのか悪いのか。

そして現在の話に戻るが。

その女……よほど嫌いなのか名前さえ教えてくれないんだが。そのレンを苦しめた女は。

レンが身体が弱く、跡継ぎにふさわしくないと言われたことで焦り、レンが死んだのを機に、その肉体を利用し再度召喚を行ったのだという。

そして呼ばれたのが、俺。

肉体自体には繋がりが無いとはいえ、ずっと入ってた魂への関わりから召ばれることになってしまったらしい。

どうしようもなくこの星に惹かれ、今でも呼ばれている気がしてならないのはそのせいだ。

双子の繋がりが元の世界に繋がってない以上、レンよりはマシだろうが、それでも俺も世界に拒まれそうなんだが……。

そもそも意識が違う。俺自身がこの世界を異世界と認識する以上、馴染むのは難しいような気がする。

……空を飛ぶ魔改造イノシシとかを見ると切実にそう思う。物理的に無理な体型と翼に見えるぞ、あれ。

「呼ばれてる気分を無視し続けて夢が覚めるのを待つしかないのか？」

この感じだと、行かなければこのまま過ごせそうな気がする。

むずむずして嫌な気分だが、のこのこ行ってレンの身体を奪うのは嫌だし、利用されるのも嫌だ。

「だから来るなっっていったのに、来ちゃうから……もう手遅れだよ、切り離された。帰り道がない」

マジ？

ああ、昨日最後に怒鳴られたな。聞き覚えがあったはずだ、自分の声にそっくりってことか。

昨日の声を覚えてて、忠告に従えばよかったのか。

「……ごめん」

また謝るしかない俺。

情けないがどうしようもない。夢だと思っただとか、今日は制止されなかったとか言い訳はいろいろ思いつくが助けようとかんばってくれたレンに言えるはずがない。

「このままここで幽霊やってれば利用はされないか？」

正直このままというのは死んでるようなものだからな。いい気はないが、利用されて遣い捨てられるよりはマシと思うしかない。

レンを利用し、苦しめたやつの利になるようなことをするくらいなら死んだ方がマシだしな。

「ここまで来ちゃった以上、このままじゃ死んでるようなものだし。僕の身体があるんだから、それを使って生きて欲しいんだけど」  
あっさり言われてしまった。

レンの身体を乗っ取るのは嫌だし、利用されるのも嫌だと言っても聞かない。

身体があるんだから自分が戻れと言っても死んだ人間が生き返れるはずがないと反論される。

「なんで俺が入ったら死体が動くんだよ」

意味が分らない。死体は死体だろうに。魂が入ればいいと言っなら、レンでもいいはず。

「魂が死んでるんだよ、僕は」

良く分らないルールがあるらしい。

さんざん言い争ったが、結局身体は俺が使っことになった。

死というのは覆せない以上仕方がない。

このまま二人で死んでもただの心中だ。

だが、利用されるのだけは回避したいので、その辺の計画を練ることになった。

## ブログ（後書き）

週一くらいでの更新を心がけたいと思っています。  
よろしくお願いします。

（精霊と彼女の5倍の時間がかかってますorz）

## 別離

基本的な常識の確認と将来設計を簡単に作っていく。

だが、公には出来ないだろうとはいえ貴族だというグルテルグ家から搜索されるだろうと言うことで、最低限この国から出る必要がある。

国と言っても王都から出てしまえばまず見つからないだろうということだが。

……… どんだけ危険なんだ、この世界。

さつきから時々見かける魔改造動物はモンスターらしい。

そんなものが徘徊する世界だから城壁を出ればそこは草原。

さすがに商隊が移動する道くらいはあるが、たった一人を捜し出すのは容易ではない。

それを押し探すほどの権限はないというのがレンの意見だ。

常識の方は長年の夢が幸いし、何とかなりそうだ。

習うより慣れろともいうしな。

田舎から出てきたのでちょっと疎いことがあるとでもすれば十分だろう。

王都を出て、北へ向かう。

普通は一人旅なんて危険なこととはしない方がいいのだが、長居出来ない以上は仕方ない。

途中で出会ったモンスターを仕留めてその皮や爪、肉を売れば十分な路銀になるという。

「いや、戦うとか無理だつて」

数日分の保存食や簡単な旅装を整える程度はあらかじめレンが隠しておいた金に加えているものを古着屋で売れば、仮にも貴族。何

とかなるだろうという判断だったが。

王都から出てモンスターとがバトルというのはかなり無理がある。こっちは平和な日本でごく普通の高校生やってたわけだし。

一応陸上部、体力だけはそれなりだと思うが。……それも過酷な世界だと、一般人以下かも知れない。みんな鍛えてそうだからなあ…。

「大丈夫だよ、魔法があるし。兄さんの魔力は軽く限界突破レベルの予定だし」

「はあ？」

予定？ 生まれつき持つてるものなら、予定、って言い方はおかしい。召喚につきものの勇者補正、とかはなさそうだしな。

「そういえば、そもそも俺はこの世界に拒絶されないのか？」  
流されてしまったが重要なことだ。確認しとかないと。

この世界に生まれ育ったレンでさえ俺との繋がりがあるといっただけで世界に拒まれ、病弱になってたのだ。

異なる世界に生まれ育ち、世界に違和感を感じる俺とかなり拒まれまくりそうだな。

その場合虚弱体質どころか即死しかねない。

「知らないの？ 人は死んだら世界に還るんだよ？ だから、兄さんは世界との繋がりが出来る。結構優遇されると思うよ？」

親が子供を大事にするように。他人より孫が可愛いように。繋がりの強さが優遇に繋がるといっう。

世界に繋がる以上、世界の力である魔法はかなり使いやすくなるらしい。

一般人なら明確なイメージを作るために長い呪文（自己暗示なのか？）精神統一、触媒を必要とするらしいのだが……。

魔法使いと呼ばれるものなら短い単語で発動させることも出来るというのだから何とも融通の利くものらしい。

死亡フラグ乱立よりは遥かに助かるが、レンの犠牲の上というのが何とも居たたまれない。

本来生まれるはずだった場所から奪われ、両親の愛を受けられず。



世界から拒絶され死んでしまった。

かなり、理不尽で救いがない。

そんなことが許されていいはずがないだろう。

「死が覆せないというのならせめてこのまま、一緒にいられないのか？」

それで俺が世界に拒絶されるのだとしても。

レンを一人死なせてその犠牲の上に安楽に生きたくない。

病に苦しむとしても、レンと一緒に生きたい。

16年間、存在さえ知らなかったとはいえ兄弟なのだから。

「……僕だって死にたいわけじゃない。だけど、他にどうしようもないならせめてやっと会えた家族には幸せになって欲しい。それだけだよ」

結局、俺たちは同じように互いに互いに幸せになって欲しいと願ってるだけなんだ。

叶わない願いだとしても。

これ以上言いつのつてもレンを余計に苦しませるだけになる。

それが解ってしまったので話を元に戻す。

モンスターとのバトルは善処するとして、簡単な地理や物価等々。

基本的に箱入り状態だったレンが知っていることはとても少なかったが。

可能な限りの情報を聞き。

そして、とうとうレンとの別れが訪れた。

生まれる前に奪われ、会うことが出来たのは一日にも満たない。

しかも生きて会うことが出来なかった。

何一つ助けられず、与えられるばかりで。

今から死者の理に従って消える弟に何一つ出来ないまま。

もう二度と会えない。

かける言葉さえ見つからない。

それなのに、そんな俺に笑いかけるレン。

「行ってらっしゃい、元気でね」

……そうだな。この世界で俺が死ねば、俺もこの世界に還るのだから。

異世界に引き離されても切れないくらい丈夫な縁があったんだ。

また、今度は普通に双子で生まれることが出来るよな。

「ああ。……………行ってくる」

実体もないのに、涙だけ流れるとか。

そういう無駄に忠実な再現はやめて欲しいよな。

笑顔で別れたいじゃないか。

いつか還る日まで、ほんの少し別れるだけなんだから。

## 別離（後書き）

短いですが区切りがよかったのでここまでで。

ここまでをプロローグにするべきだったかも知れないと思いましたが  
今更でした。

## 王都

歩き続けて、十数日。

森を出てひたすら草原を進み、いい加減魔改造生物……モンスターか。モンスターも見慣れた頃。

ようやく遙か遠くに人工建築物が見えてきた。

王都は堅牢な城壁で囲まれてるはずなので、それだろうな。

このまま惹かれる方向に歩いていけばいいはずだが、先に王都を出てから向かう先を確認する方がいいかもしれない。

うっかり何もない方向に行ったら今回のように人里に巡り会えないとか、素でありそうだな。

無駄に広い上に未開拓地域が多すぎる。しかも未開の地はイコール、モンスター天国。

現在の半幽霊状態なら襲われませんが、肉体があれば彼らのご飯になつてしまいそうだな。

一応街道を進めば迷いはしないだろうが、情報を集める時間もなく逃げることになるだろうから次の町までの距離を確認しておかないと行き倒れとかも普通にあり得そうだな。

なによりあと何日かかるかわからない中、歩き続けるのは精神的にかなりキツイ。実は挫けそうだった……。

行けども行けども森の中。森から出たときは歓喜のあまり叫んだよ！

そしてその分その後の草原続きが堪えた。

やっと森を出たら今度は草原。見渡す限りの原っぱ。動くものは凶暴そうなモンスターばかり。

一回開放されたと思っただけに、これはきつかった。

恥も外聞もなくひたすら知ってる曲を歌ったりして自分を励ましてた。

途中なんで歩いてるんだらうとか考えはじめたあたり、かなりイッ

てたと思う。

だが、そんな日々も終わりだ！

……あと何日歩けばいいのかな、がんばろう……。

厩気楼とかじゃないよな……。

思考も沈みがちになる。俺は案外孤独に弱かったのか？

こんなのでこれからやっていけるのだろうか。

やつと、やつと。

たどり着いた王都の城壁はかなり高く、立派なものだった。

しかも王都のなので広い。

堀で囲むというのから何となく東京ドームくらいのサイズを想像してしまっていたが、街が入っているんだ。

そんなちやちなものではなかった。

元々あった丘か何かを利用しているのだとは思うが、かなり広い。

外周を回ったら何日かかるのだろう。

城門は東西南北で4つあるというが、どこから出ても農村へは繋がるらしい。

いくつもの村を経由して、そこからさらに街道がいくつか出て広がっていく。そしてそれらが交わるところに比較的大きな街がある。

国と街の成り立ちからすれば分かりやすいが、道を間違つと延々農村を彷徨いかねない。

それはそれでありかもしれないが。

王都で地図だけは入手したい。

道に迷うのは嫌だ。

あの焦燥感と孤独は半端じゃない。

城壁が見えて道に迷う心配がなくなつたときからはかなり気分的に楽になつたからなあ……。

半幽霊状態では魔法が使えないのでどんなことが出来るかが分らな

いのが辛い。

速度を上げて走り抜けるとか空を飛ぶとか出来れば旅が楽になるだろう。

あるいは髪や目の色を変えられれば、王都で旅の支度がやりやすくなる。

保存食と地図、簡単な旅装も整えたい。

だがレンが夢の中でやってた魔法は火を灯すとか明かりをつけるとかくらいだったからなあ。

むしろそれくらいが一般的らしいが。

俺はレンのおかげでいろいろ出来る可能性はあるのだが、可能性だけでは心許ない。

行き当たりばつたりにもほどがある。

それしかないのも確かなのだが。

いっそのことしばらくレンの実家に居座り魔法で何が出来るかを見極めてから逃げ出すというのも手ではあるのだが……。

レンを苦しめた女の顔見たら殴りたくなるだろうしな。

それは我慢するとしても、長い間居座ってしがらみが出るのも遠慮したい。

あの女以外は、メイドさんとか家庭教師の人とかいい人ばかりだしな。レンの夢の中では、だが。

監視なんかは召喚直後（と向こうが判断する時）が一番緩いだろうしな。

居座ったときのメリットは魔法の確認が出来る。逃走準備が整えられる。くらいか？

デメリットは俺の心境以外には周囲の人間に俺という存在の情報が渡る。魔法の練習を見られた場合はその情報も渡るか。利用するために女を宛がうとか、逃走しないように毒を盛るとか普通にやりそな女だし。

デメリットを考え出すときりがない。被害妄想かもしれないが、疑心暗鬼になつてろくでもない失敗をしそうだ。さっさと逃げ出して自由を謳歌しよう。

最低限飢えないように食べ物だけは確保して、いざとなつたら美味だというモンスター肉でも食べる覚悟を持つとう。

一番かさばる水は魔法で作れるのでその分食料に回せばいいだろう。

北の城門まで回って街道を進む。街道とはいうが、整備してあるわけではなく踏みならされ土が露出しただけのものだ。

それでも草原の只中よりはモンスターが寄りつきにくいのか、安全らしい。

襲われるときは襲われるが、モンスターも返り討ちになることがあるのを学んでいるせいで、よほど飢えていなければ襲つてこないらしい。

次の村までは3日程度らしい。

情報の提供者は見知らぬ行商人のおっさん。息子っぽい少年にいろい話して聞かせてたので便乗して聞かせてもらった。いい人に巡り会えた。

今は何もお礼出来ないが、いつかもし会うことがあつたら勝手に何かお礼をしよう。

名前はおっさんがヤージュ、少年がジャックか。

レンもそうだったが、西洋風の名前だなあ。

もしかして俺の名前は目立つか？

最初は偽名を名乗って、逃げたあとは普通に本名を名乗るつもりだったのだが……どうするべきか。

最初に偽名を名乗るのは当然として、その後も別の偽名で過ごすべきか？

まあ、最初に普通っぽい名前を名乗っておけば変な名前の人間を気にする理由はないか。

あの女に名乗る偽名は……トーマスとかでいつか。ありがちだよな。よし、決まれば、そろそろ行くとするか。空腹は感じないが、気持ち的に何か食べたい。ジャックが肉を挟んだパンを食べてたんだが、うまそうだなー。

行商人親子と離れ、来た道を戻り城門を越える。城門は筋骨隆々とした大男達が守っていた。

さすが異世界というべきか、この世界にはいろいろな種族があるらしい。

大男は力人と呼ばれる力に特化した種族で魔力がほとんどない。火を灯すとかも無理だ。その代わりに恵まれた身体能力をもち、なんと四肢を失っても再生するという。時間はかかるらしいが。

あとは魔人と呼ばれる魔力特化型とか寒い地方に行くと毛皮装備の獣人、山岳部の翼人、水辺の魚人などなど。

この世界の人間は環境に適応する能力が著しいらしいな。住むところによって違う進化を遂げたらしい。

だが、混血はどの種族間でも可能で生まれる子供が親と違う種族というのもよくある話らしい。

さすがに翼人夫妻の間に魚人の子供とか、生活区域があまりに違う種族は生まれにくいらしいが。

それでも近くに水源はあるわけだから、生まれないわけではないらしい。

どの種族にも一長一短があり、人間は平均的だが特出した能力がないということ釣りがとれている。

その上どんな種族でもどこにでも生まれる可能性があるとなると人種差別的なものはほとんどない。



そりゃそうか、獣人を迫害してたら自分の子供が獣人でしたとか。笑えないことになるからな。

誰だって自分の子供、親類縁者は可愛いというわけだ。

世界からして縁者を優遇するんだ、本能なのかも知れない。

王都から出るときのために道をしっかり覚え、雑貨屋や古着屋。武器屋や防具屋まで必要そうな店を覚えていく。

雑貨屋で食料と地図を売ったので逃走準備は素早く整えられそう  
だ。

そろそろ敵の元へ行かなければならないと思うと気が重いが、さっさと済ませてしまおうか。

## 王都（後書き）

王都到着。

次回でやっと半幽霊状態から脱却です。

## 演技

目の前で泣き崩れる女。

中年というにはやや若いか？

「ずっと、探していたのです……」

優しい声で、そう訴え俺を抱きしめる。

事情を知っている俺でさえ騙されそうな芝居だった。

生まれる前に子供を事故で失い、取り戻すための召喚魔法がやっと成功した、と。

使い続けた魔法に疲弊した様子を隠そうともせず語るその仕草。

長い間、寂しい思いをさせたと詫びられ、これからはこの母の元で幸せになつて欲しいと訴えられる。

何も知らなければ、そこまで必要とされ、愛されて悪い気はしなかつただろう。

実際俺ももし何も知らなければ、生まれ故郷とこれまで共に過ごした家族から引き離された恨みを考えても許してしまつただろう。

それくらい、その女は「最愛の子供」との邂逅を喜ぶ母親を演出していた。

まあ、しばらく観察してたので演技だつて分つてるんだけどね？

あまりに素晴らしい演技に思わず呆然としてしまった。

女は女優だというが、これは名優といつても差し支えないだろう。ちよつと女性不信になりそうだ。

レンの死を隠し召喚する子供を身代わりにするために、レンの側近くに仕えていた人間はことごとく解雇されるか酷い場合は殺されていた。

なかなか訪れない俺に、召喚魔法が失敗しているのではないかと手  
伝う人間に八つ当たりしヒステリーを起こす様も凄まじかったが。  
俺がレンの身体に入り、身じろぎしたとたんの変貌はいつそ二重人  
格を疑ったほどだ。

呆然としている俺にやっと思い付いた、というように優しく微笑む女。  
「取り乱して、ごめんなさいね。私はあなたの母親のコンスタンシ  
ア。あなたの名前を覚えてくれるかしら？ 私がつけた名はレンフ  
オードというのだけど、これまで呼ばれていた名前もあるのでしょ  
う？」

名前を押しついたりする気はないってアピールなのか？  
こちらを尊重するという風に振る舞ってるんだろっな。  
いきなり反感を持たれても困るだろうし。

女の演技の上手さに呆然としてたのがよかったかも。このまま状況  
について行けずに混乱している風を装えば逃げやすそうだ。

「……僕、トーマスといいます。あの、ここはいつたい……？」  
ゆっくり、丁寧な口調を心がける。やっぱ普段と違うように装うの  
が基本だよな。

反感を持つてるようには見せない。少し幼い感じで不安そうな様子  
を出せるようにがんばって見た。

我ながら、似合わなすぎてちよつと鳥肌ものだが。

「ここはグルテルグ子爵家よ。あなたは、この家の跡取りでレンフ  
オード・グルテルグ。こちらのことはゆっくり覚えればいいわ。急  
なことで疲れているのでしょうか？」

ゆっくり休んでちょうだい。それから話しましょう」  
ここで怒濤のごとくたたみ掛けて取り込むつもりかと思っただらさっ  
くり開放された。

こっちの混乱につけ込むだろうと思っただが、逆にあとから混乱  
につけ込んだと思われるのを避けたのか？

どっちにせよ、俺としては助かるが。

お仕着せのメイド服を着た少女が進み出てくる。

「レンフォード様、お部屋にご案内します」

丁寧に一礼される。

あたふたとこちらもつられてお辞儀してしまう。

コンスタンシアは微笑んでいるが、メイドの少女の顔には一瞬軽蔑が浮かんだ。

こっちはどうやらそんなに演技がうまくないらしい。ちょっと安心した。

全員が全員演技がうまいと何も信じられなくなりそうだからな。

コンスタンシアはさすがに貴族の奥方としていろんな輩と渡り合ってきただけのことはある、ということか？

案内された部屋は、レンの部屋だった。

それだけでも微妙なのに、この部屋は「俺」が帰ることを信じてコンスタンシアが年々成長する我が子を思い整えた部屋なのだという演出付きだ。

淡々と語ったあとメイド少女が去ってやっと一息ついた。

いつも夢で見ていた光景と同じ部屋。

逃走経路も夢の記憶を頼りに思いつくのでこの部屋を宛がわれたのは助かる。

だが、レンの存在をなかったことにした上に残されたものまで俺へのポイント稼ぎに使うという態度はむかつく。

逃走ついでに火でもかけていこうかとさえ思ってしまったが、犯罪だし関係ない人にまで被害が出るよなあ。

報復手段がないのが悔しい。

俺が消えて跡継ぎがいなくなることで、庶子を生んだ若いお妾さんの立場が向上し相対的にコンスタンシアの価値が低くなることで溜飲を下げるしかないか。

正直それだけでは物足りないが、俺に出来ることはなさそうだ。

真夜中になるのを待ってレンの服の中から動きやすそうなものを選んで着替える。すぐに売ることになるので出来るだけ目立たないものにする。

装身具から換金しやすそうな地味なものを持ち出すか悩んだが、こういうものは売りにくそうなのでやめておく。

形見に何か持っていようかとも思ったが、この身体自体が形見だ。必要ないだろう。

多少の路銀はレンに教えられた場所にちゃんと隠してあった。

さすが部屋の持ち主だけあって誰にもばれなかったらしい。

……多少と本人はいつていたが銀貨が入ってる時点で庶民には大金だ。

1ルトが大体1000円程度か？ 銀貨は1000ルト、日本円にして約10万にもなる。

それが3枚に小銀貨で100ルトになる建物の絵が彫られたのが5枚、10ルトの銅貨が10枚。

36万くらいか？ これで多少……。

金銭感覚の違いに涙したが、ありがたく使わせてもらおう。

しばらくは飢える心配はなさそうだ。

明け方より、少しだけ早い時間。

外はまだ暗いが一時間もすれば明るくなるだろう。

真夜中に抜け出したら夜明けまで困りそうだったのでこの時間まで待った。

窓から庭に飛び降りる。

こういうとき屋内でも靴を履く文化でよかった。

本来はモンスターの襲撃にあつたりした場合、安全に逃げるためらしいが。

王都でもまれに大発生したモンスターが襲撃してくることがあるらしい。

そのための城壁であり、兵士なのだろう。

ここも貴族の屋敷なのでかなり丈夫な塀で囲まれ、防犯体勢がばっちりだ。

外からの侵入はかなり難しいだろう。

だが、内から出る分には多少の死角が存在している。

住人だからこそ分る部分だ。

つまり。

警備員が屋敷の庭を見回つてるときに、裏口から外に出る。

……鍵もかかつてなかったぞ、大丈夫かこれ。

外からは鍵なしでは開かないから大丈夫なのか？

苦労したいわけではないが……。

ちょっと微妙な気分だ。

じわじわと明るくなる通りをでたらめに曲がったり、立ち止まって様子を見るがついてくる者はいない。無事逃げ出せたらしい。

あとは店が開くのを待つて、買い物をするだけだが。

店が開くまでまだ時間がかかる。

買い物をしている間に追っ手が店に来る可能性も高い。

手ぶらで街を出られるはずがないのだから。

レンが遺してくれた金銭が多かったこともあって、考え直す。

それなりの宿に数日滞在し、追っ手が俺はもうこの街にはいないだろうと思ひ始めた頃に旅支度を調べ、出て行く。

俺に金がないと思つてるだろうから、働く為に滞在していると考える可能性もあるがそのためにレンの装身具をいくつか隠しておいた。

持って歩けば捕まったとき犯罪者扱いされるので持ち出すことはしなかったが。

なんにせよ、これで俺が金を持ってると向こうは判断するだろう。そうなれば、この街に居座ってるとは思うまい。うっかり鉢合わせしないことだけを祈ろう。

数日は宿の中で魔法について検証してみよう。

引きこもると目立つかも知れないので、日中は観光でもするか？



## 演技（後書き）

やっと実体化。そして自由の身に。  
週一の更新予定でしたが、最低で週一と改めます。

## 魔法

夜は完全に明けたが、宿を取るには早すぎる時間。

仕方ないので、のんびりと街を見て歩き露天が並びはじめた広場で食い物を物色する。

夕べは食べ損ねたからな！。

貴族様の食事、つてのにもちよつと興味はあつたんだが。

威勢のいい掛け声で品物を売るおっちゃんやおばちゃん、にこにこ愛想のいい若い女性。

相場は分らないが、この辺は小銅貨数枚程度で売ってるものが多い。銅貨一枚で腹一杯食べそうだ。

「その兄ちゃん！　うちのサンドはうまいぞ！　朝飯にどうだ？」のぞき込んだ店ではパンに野菜や肉を挟んだ物があった。種類があるが、どれがうまいかわかんないんだよな。

「んー。ちよつと腹減ってるしな。1個もらおうか。お勧めはどれ？」

こういうときは聞くに限る。味覚が合うとは限らないが。

「これでいいか？　5ルトだ」

勧められたのは一番具が詰まっててでっかいやつ。

力人みたいな力自慢の見るからに大食いそうな相手用っぽい、サイズだ。いくら空腹でも食いきれるか怪しいが。

でも某ファーストフードなら1000円くらい取りそうなのが半額か、安いな。お勧めだけあつて美味そうだし。

「じゃ、それで」

「まいど！」

ぽいっと手渡されたサンドと引き替えに銅貨を渡し、釣りをもらつ。

はぐはぐと行儀悪くかじりながら飲み物の店を探す。

サンドと違って入れ物を返さなきゃいけないのでそこで飲み食いする方がいい。

すぐ隣にあったあたり互いに協力してるのか？

パンには飲み物があるよな。

周りを見ると、筋骨隆々とした力人らしい男が次から次へと十個近く食っていた。

やっぱり身体が大きいと、それだけ食べないと持たないだろうな。肉体労働者っぽいしなあ。

うっかり凝視してしまったことに相手も気付いたのだろう。目が合う。

「すみません、美味そうだったもんで、つい」

軽く会釈していうと笑ってくれた。いい人でよかった。実はちょっと怖かったんだが。

「ドムの親父のサンドもうまいが、あっちのリジーばあさんのものかなかだぞ」

ふむふむ。

「ありがとうございます」

お礼代わりにあげた茶を飲み終わるまでもいくつか安くて美味しい店を教えてくれた。

品名で中身が予想出来ないのが問題だが。

ガドウさん、ありがとう。

それから着替えを買ったり日用品を扱ってる店で細々としたものを仕入れておく。

もちろん武器屋とか逃走に必要なものを扱ってそんな店は避けた。

おかげで見つかった様子はない。

このまま無事に過ごせればいいんだが。

今朝会ったガドウさんの教えてくれた安宿の一室。

日が落ちかけてる時間なのでかなり薄暗い。

ちなみに明かりは有料だ。たいていの人間はつけられるが、無理なら宿の人に頼むという形式らしい。

ここは明かりの魔法からチャレンジしてみよう。

これで使えないとかなったら笑えないのだが……。

以前見た夢の中のように、右手に意識を集中させる。

「……………光」

呪文なんて思いつかなかったので、端的な言葉を呟いてイメージする。

それだけであっさり光が灯った。

が、一瞬で消えてしまう。

うーん、イメージの仕方の問題か？

「ライト」

今度はもっと具体的に効果を希望しつつ、がんばって見る。

蛍光灯みたいで、熱なくて白い光。

そう念じるとあっさり出来た。

イメージが大事というのは確からしい。

蛍光灯なので、消そうと思えば消えるのもポイントか？

紐をつけるのはどうかと持ったので、手を一回叩くと消えるようにしてみた。

夢の中では感じていた、魔法を使ったとき特有の疲れも全くといっていいほど無い。

この分なら魔力量はかなりありそうだ。

早速買ってきた瓶を取り出す。

中に水を入れ、魔法を使う。

髪の色を変えたいんだが、自分の髪の色が変わってるというイメージは難しい。

そこで瓶の中の水をカラーリング剤とイメージして染める気分でや

つてみようかと。

色は思いつかなかったの、よく見る茶色にしておく。

染め粉など売ってなかったの、それで十分ごまかせるだろう。

「ムラ無く綺麗に染まる、異世界印の特別製カラーリング剤。色落ちもありません」

瓶を持ってぶつぶつ言ってる姿はかなり怪しいな。

やってる本人も結構恥ずかしい。コマーシャルっぽく言うあまりなぜか敬語になってたし。誰もいなくてよかった。

これで染まらなかつたら笑えないが、うまくいったようだ。

茶色く染まった仮定：カラーリング剤を髪につけてみる。

そして気づく。浴室もないの、どうやって洗い落とすんだ？

今更洗い流さなくて良いカラーリング剤に変更は出来ないし……。

しばらく固まってしまたが結局空中に水球を固定してその中に頭を突っ込むという訳の分らない洗髪方法になってしまった。

傍で見るとかなりシユールだよな！。

ここまでやってからカツラを作れば良かったことに気づいたし。ちよっと切なくなってしまった。

でもこの調子でいくとゲームとかで良くある魔法の回復薬、ポーションとか作れそうだよな。

瓶にもう一度水を入れて……傷が治って体力回復すると言つと何色だろう？

緑：何となく薬草っぽいかな？でも毒っぽい気もするので毒消しを緑にしよう。

白：悪くないけど傷には効かない気がする。牛乳っぽいし、病気用かな。

赤：なんか活性化されそうな気がする。カプサイシンの。傷用は赤でいいか。

色を決めて、早速作成開始。

「赤いポーションは体力回復、傷も綺麗に治ります」  
あ、コマースヤル風（今度は歌バージョン）が癖になったか？  
カレーでも作るように歌ってしまってた。

でもこれが一番自己暗示というかイメージしやすいんだよな。  
宣伝してる効能と品物ってセットで思い込むからな。カレーとして宣伝してた物がイチゴ味なんて誰も思わない、そういうものだ。ちよっと違うか。まあ、風邪薬として宣伝してたら風邪が治る物だと思っし、風邪薬を飲んで怪我が治るとは思わないよな。  
少なくとも俺は思わない。この場合、それで十分だ。  
じわじわと赤く染まり、全体が赤くなつたところで完成。瓶は1個しかなかったので他のは今度試そう。

このポーションの効果を確認したいが、あいにくというか幸いにも怪我はしていない。

わざと怪我をするのは嫌だがいざというときに使えないのでは困る。覚悟を決めるしかないか？

まあ、魔法で傷を治せばいいので今試すのが一番安全だが。

……魔法があるのに薬を作る必要がどこにあったのか。

……もう寝よう。

一晩寝て、気を取り直した。

魔法を使い果たしたときに満身創痍だった場合とかに使えるよな！  
使い果たすのか、とか。その状態でポーション飲む元気があるのか  
とか思ってたがその辺は忘れよう！

無理矢理テンションを上げていく。

せつかく作ったのが無駄になるのが嫌だったとか、一人コマーションとか恥ずかしいことをやったのが無駄になるのが嫌だったとかいうわけでは決してない。

上がったテンションに任せて、ごくごく軽い傷を左腕につける。

ざっくりやらないと効能がはっきり分らないような気がしたが、徐々に確かめていけばいいか。

もちろん痛覚は消しておくし止血もしておくが。

そしてポーシオンを飲んだ俺は。そのまま一目散にトイレに駆け込み吐きだしていた。

ま、まずい。そして、辛い。

あれか、赤いからうつかり唐辛子を連想したとかその辺が味に出てるのか？

泣けるほど辛い。こみ上げてくる刺激に涙が止まらない。

かなりの時間トイレを占領しげばやっていると心配した店のおばちゃんがやってきて水をくれた。

優しい人でよかった……。迷惑だっというわれるのかと思ったよ。

胃に優しいようなパン粥っぽい何かを部屋まで運んでくれたのでありがたく食べる。

優しい甘みが荒んだ胃を慰めてくれる。喉も生き返るようだ。

腕の傷はいつの間にか綺麗に消えていたが唐辛子一気飲み衝撃の方が激しすぎていつ治ったのかも良く分らない。

ポーシオンはほとんど吐きだしたけど、飲み込んだ少しの量で治ったのだろうか。

そうだとすると結構な重傷でも治せるだけの効果はあると思うが、まずは飲めるレベルにするのが先だよな。

今回は不意打ちですごい味だったから飲めなかったが、今のままでも覚悟を決めれば飲めないってことはないだろう。

けれど美味しくできるならその方がいいに決まっている。

怪我で瀕死の状態だと味のダメージで死ぬそうだし。

「赤いポーションは体力回復、どんな傷もあつという間に治ります  
リンゴの風味で美味しく完成！」

呪文（？）に変更を加えて今度こそ完成。恥ずかしい呪文だが、もう気にしない。

俺が分かりやすく失敗しないというのが一番大事なんだ、うん。

……慣れたらもっと短くしよう。

いろんな失敗の末に美味しく効果抜群のポーションが出来た。

効果の高さは色の濃さに出るようにしているので売る場合もばっちりだ。

途中で挫折しかけたポーションを作り続けたのは売り物になるかな？つてのが大きい。

何せ治癒魔法つてのは平均的な魔力量ではかすり傷程度しか治せないらしい。

もちろんポーションなんて存在してなかった。

宿のおばちゃん曰く。

「魔力がそこそこ高いからって無茶するね。発想は面白いけど傷を治す薬なんて作れたら一生遊んで暮らせるよ！」

らしい。

ポーション作成で失敗したといったらポーションとはなにか、から説明することになって、夢物語を語る変人を見るような目で見られた。

慌てて普通の薬の効果を魔法で上げようとしてるのだと説明したので笑われるだけですんだが。

そこでいくつか試行錯誤し、普通の薬の効能を引き上げたものを使いそこから効果だけ抽出された液体を作成。それを瓶に詰めてポーション作成をやってみたところ水から作るより魔力を使わないで作



れるようになった。正直水から作っても俺は魔力を消費した気はしないんだが、これなら魔力量の高い人なら作成可能だろう。魔人とかの魔力特化の種族もいることだし。俺にしか作れないとかなると目立つが、これなら売っても大丈夫だろう。作成方法も売るのが前提だが。

他にもいろいろ作ってみたい物はあるんだが、やっぱり他の街に行つてからだろう。

ポーションもこの街では売れないしなあ。

そろそろ出発の準備をしようか。

## 魔法（後書き）

やっとチートらしきものが出てきました。

## 出発

甘かった。

本格的に旅支度をはじめて悟った。

俺は一人旅を甘く見すぎていたのだ。

水がいらないので予備を含めて10日分の食料を用意したらそれなりの重量になった。

この時点で嫌な予感はしたのだが。

着替えに毛布。これだけでいっぱいっばい。

この時代の旅人がマントを着けている理由が良く分った。毛布を2枚持つのは辛い、コート代わりにマントを着けていれば防寒・日差し対策になり寝るときも毛布をひいてマントをかぶれば暖かい。

毛布1枚では辛いからマントはかなり重要だ。

そして武器を持ってしまえば、限界ぎりぎりといった積載量になる。うん、これで旅は出来る。出来るんだが、途中でモンスターをかればその分荷物が増える。

うち捨てて行くには素材や肉は貴重品。生活していく上で欠かせない収入源になるのに捨てていけるはずがない。

行商人のように荷馬車を連れて行くのも考えたが、一人ではいかにも難しい。

モンスターに襲われたときに守りようがないし、臆病な馬が逃げ出す可能性が高い。

その上夜行性のモンスターに狙われる可能性を考えれば、安眠も出来そうにない。

結界を作ればいけるか？ が、結界とかイメージが曖昧すぎて難しい。

実際そんな魔法もないようだ。

そもそも持続させる魔法にはその分魔力を込めて発動時間を長くし

なければならぬので普及しないらしい。  
困ったなあ……。

まずは荷物の解決からはじめるか。  
袋をとりだし、魔法をかけてみる。

「異空間に直結した無限の収納力を誇るバックです」  
人前で使う魔法は、本当に呪文を考え直そう。夜中の通信販売のよ  
うになってきてる。

やりやすいんだよなあ……。

お、うまくいったっばい。

かさばる食料品を詰め込んでも、重さも見た目も変わらない。  
のぞき込んだらそんなに大きな袋ではないのに明かりさえ差し込ま  
ない闇の空間になっていた。

……………。

手を入れて探るが、何も捕まらない。

食料はどこへ行った？

空間が広すぎて手の届かない位置へ転がっていったのか……。

失敗、だな。

しかも食料がなくなった。

はあああああ。

気を取り直して作り直す。袋自体は同じ物を再利用出来た。魔法効  
果は上書きになるようだ。

今度は取り出したい物を思いながら手を入れれば取り出せるように  
したので、大丈夫だろう。

食料はなくなつたので毛布で試したが、ばっちりだ。

そう思ってたなら、朝になつたらただの袋に戻ってた。  
サイズの無理だったのだろう。毛布が袋を突き破ってはみ出して  
いる。

皮の丈夫な鞆だったのに無残な姿に…。

持続時間的な問題だろうか。

こうなると、収納袋は無理か？

でも、ポーションの方は効果が持続している。

魔法を使った品でも一回完全に变化した物はそのまま使えるという  
ことかな？

袋は収納バックにならなかったが……。

色が変わって完全な別物だと思えるポーションと、袋という素材が  
自己主張してそうなバックとの違いかも知れない。

いろいろ試してみるか。

早く王都を出たいのに……。

いろいろ考えた結果、こちらの文字ではなく漢字で欲しい効果を袋  
に書くことにした。もちろん魔力で効果をイメージしながら。

こちらの文字だと、読まれたとき恥ずかしいし怪しまれそうだが漢  
字なら模様と思えないことはないだろう。

一応、裏側に書いてあるし。

刺繍する技能も根気もなかったので、絵の具をかってきて書き込ん  
だんだが。

この方法のいいところは、いろいろ機能追加しても上書きで消えて  
いかない点だな。

あと、どんな効果をつけたかあとで確認しやすい。

今あるのは無限の収納力に取り出し機能がついた物だけが冷凍用  
とか時間停止バージョンとかも作れそうだな。

ああ。モンスターの肉とか腐ったら困るな、時間停止も作ってみよ  
う。

そうすれば保存食じゃなくて普通の食材が食べれるしな！

物を作るのが楽しいものなんだな！。

ここに来て新たな趣味に目覚めたようだ。

日本にあつた品を魔法で再現してるだけだが、試行錯誤して思い通りの物が出来ると気分がいい。

落ち着いたらもっといろいろ試してみたいな。

今は先立つものがかなり心細いが……。

宿屋暮らしは結構出費がかさむ。

それ以外にも一回10日分物食料を失つた上に重量制限が無くなったので一ヶ月は食べられそうなくらい買い込んだのが悪いのだが。

もう500ルトを切ってしまった。かなりやばい。趣味に走るのは稼いでからにしないと。

食い物は安いのに服とが高いんだよな！。

古着の中でも最低ラインに近い物しか買ってないはずなのに小銀貨が飛んでいく。

丈夫そうなのとかになると数倍の値段に跳ね上がるから手が出せなかった。

正直今の旅支度は最低限ぎりぎりではない。

次に旅に出るときは、全部一新しなきゃまずいかも知れないレベルだ。

生活のためにも今度こそ出発だ！

次に大きな街に着いたらポーションを売ってみよう。

そして金に余裕が出来たら毒消しポーションとか構想だけのも作ってみよう。

この街から出ればいろんなことが試せる。楽しみだ！

王都から出るのに通行税が必要だったのがショックだった。

別の街に入るときにも必要になるのだろう。

村でモンスターの素材が売れなかつたら街に入れないことになる。

大丈夫だろうか。

いきなり前途が暗くなってしまった……。

## 出発（後書き）

物価と所持品は一応計算してあります。

残額は126ルトです。

通行税は300ルトだったので、現状では王都に戻れません。



## 世界

出来れば平穩無事に村まで行きたくったのだが。

収入になりそうなものが今のところモンスターしかないので獲物の姿を求めて街道を離れた。

生き物を殺すのは微妙に抵抗があるのだが。

だが、この世界でモンスターと呼ばれる存在は雑食で当然人を襲う。農作物が狙われることも多く、その上繁殖しすぎればあつという間に飢えて群れを成して襲ってくるので可能な限り数を減らしておきたい存在らしい。

そしてその肉は食べられるし、皮や牙などは資源として有効活用される。

自分が生きるために、狩る。もし力及ばなければ彼らが生きるために狩られる。

そう考えて、俺は生きたいから狩ることを選んだ。

でもいくら魔法が使えるとはいえ、武器は大きめのナイフがひとつ。かなり怖いが……この世界で生きるためにがんばるしかないか。

つい一週間前まで、おかしな夢を見るだけの普通の高校生だったのが嘘のようだ。

今は、こうしてワゴン車より大きなミニ恐竜みたいな存在と向き合っているのだから。

はじめてみるタイプだよな？ サイズ的に今で見かけなかったのが

不思議なくらいでかい。

覚悟は決めてたはずなのだが、走って逃げたい。

そっいえば来週発売予定だった新作のスニーカー、買えなかったな。

そのためバイト代貯めてたんだが。部活で使おうと思ってたんだよな！。走りやすそうで、期待してたのに。

あまりのサイズにうっかり現実逃避してしまった。

その間にももちろん近づいてるわけで。あと50mか？俺でも7秒かからない距離だ。

やばっ。

「止まれ、止まれっ。えーっと、そうだ！落とし穴っ」

ぎりぎりで魔法を使って10mほど前に落とし穴を作るのに成功した。見事に落ちたが、墜落死する深さじゃなかったので元気に暴れている。

地震のように地面が揺れていて結構怖い。

力尽きるのを待ってたら数日くらいかかりそうだな。とどめを刺すべきか。

「氷の槍」

氷の槍が降ってくるのを想像する。落とし穴めがけてゲームとかであるような装飾過多の槍が数十本降り注いでいった。

やばい、攻撃魔法が使いやすすぎる。

結構ゲームとか好きだったんだよな！。漫画とかも読むが。

魔法攻撃のシーンを思い浮かべればいいだけなので簡単に使えてしまっ。

ゲームの呪文でも発動しそうだが……誰も分らないだろうが、真顔でゲームの呪文を唱えるのはちょっと恥ずかしいか。

詠唱の長いやつも多かったし、効果を一言で言っ想像するってのが一番楽か？

うん、それで行こう。

すっかり静まりかえった落とし穴をそろそろと覗いてみる。

……。  
穴だらけの肉塊があった。  
……なんか、いろいろとごめんなさい。

アルゴルウグの皮は高く売れるが、この惨状では無理だろう。他の部位だと角と牙。あと肉が売れるから解体しないといけない。ナイフひとつで解体出来るかどうか。本当にいろいろ甘く見てたなあ……。

魔法と浮かばせて落とし穴から地面にとりだし解体をはじめ。関節の継ぎ目にナイフを押し込み、てこの原理で外す。

そうやっていくつかのブロックに分けたあと、皮を剥いで。そうやって肉屋で売ってそうな肉にしていく。もちろん血抜きも行いつつ。

肉の値段だけで言えば草原に住む中ではオルグが一番なんだが、アルゴルウグもそれなりだ。

一キロで500ルトにはなる。きつとさぞかし美味しいのだろう。

今夜はステーキだな！

ちなみに解体に使ったナイフはかなり痛んでしまった。血と脂で切れなくなるって本当なんだな。骨に当たって欠けたりもしたし。

研ぎ石なんて持ってないしダメ元で魔法を使ってみる。何とかならないかな？

錬金術っぽく元の状態に復元するのをイメージしたら案外簡単に直った。

さすが魔法。何でもありだ。

試しに剣サイズまで大きくしてみたがどう見ても足りない素材分は魔力で補うことになるようだ。

結構疲れた。そして金属だけに重かったので結局ナイフサイズに戻すことになった。  
無駄なことをやってしまった……。  
でも今まで剣なんて使ったことがないのにいきなり使えるはずがないし、ただ重いだけの荷物を持って歩くのは馬鹿らしいなあ。  
これからの予定に護身程度にでも剣を習うのを入れておいた方がいいかもしれない。

のんきに過ごしてたのもつかの間。  
夜になって食事の用意をしてて気がついた。

アルゴルウグの肉は煮込むと美味しいのを思い出したのでしっかり用意してた鍋で煮込んでいたのだが。

……なぜ、そんなことを知っていたのだろうか？  
レンの夢ではこんな野趣溢れる生活はなかった。

だが、肉の解体方法から換金出来る部位まで、意識しなくても知っていた。

煮込むのに使える野草まで。

俺は、それをなぜ知っている？

オルグなんて見たことも聞いたこともないはずなのに、姿を思い浮かべることが出来る。

なぜ？

いくら考えても分らない。

他に知らないはずのことを知っていないか、それさえ分らない。  
気持ち悪い。

自分がるまるで自分でなくなったようだ。

小さく、小さく。うずくまり、丸くなる。

身を守るように。自分を抱きしめるように。

夢を、見た。

青と緑の美しい星。

世界は人を愛し、人も世界を愛している。

愛する世界が愛する、他の人も。

大切な人の、これまた大切な人だから。

死してのち、人は世界と同化して安らぎ眠る。

それは世界中の人々に同等に与えられる愛情。

人は、世界になる。

弟<sup>レン</sup>も。

世界と、弟<sup>レン</sup>。

俺との繋がりは世界と融け合い。

俺は、世界を知る。

目が覚めて、最初にレンが幸せそうであった、と。

眠る前までの混乱と恐慌はすっかり収まったのんきにそんなことを思った。

そして次に。

せっかくの鍋が焦げてたのがショックだった。

昨日あんなにがんばったのに！

一口も食べてなくて腹ぺこなのに。

美味いと評判の肉煮込みは焦げ焦げに……。

火事になる前に薪が燃え尽きたのはよかったのかも知れないが、保存食はまずいんだ。ぱっさぱっさで煙の味しかない。

塩漬けとか高いんだよ。俺の握り拳くらいの岩塩が500ルトっておかしいだろ。

500ルト。日本円にしてなんと5万円。どんな高級塩だ。

それで最低ランクとかね、嘘だろ？ 香辛料は意外と充実してるのに塩の精製が難しくって岩塩はとれる地域が少ないせいで高いらしい。

うん、「らしい」だ。

謎の知識は世界の情報だったが、一介の人間が世界の情報全部享受とかは無理だ。パンクしてしまう。

一部分や必要な部分を薄く広く貰えるのでかなり便利だが、同時に世界の願いも知ってしまった。

無視しようと思えば出来るが……。

自分や弟を愛し、慈しんでくれる存在の願い事を無視し続けることが出来るような人間にはなりたくない。

出来ることなら叶えたいと思うのが普通だろう。

今すぐには無理だろうが、将来の目標に据えていこう。

そのためにも知識があるに越したことはないし。よかった……はず。何となく、魔力と知識の他に寿命とかも共有された気がしなくもな

いんだが……気のせいだよな？

## 世界（後書き）

魔力チートと知識チート。ついでに不老不死フラグです。

最強チートという言葉に恥じないよういろいろ詰め込んでいます。でも対人関係が可哀想な子ですね。

今回はモンスターの部位換金表を作っていました。使ってませんが、使う日が来るのかも謎です。

## 決意

焦げた元・煮込み肉は諦めて焼いただけのアルゴルウグの肉で朝ご飯だ。

今日も一日歩くんだし、しっかり食わないと。

それにしても昨日は危なかった。

いくら混乱してたとはいえ、なんの備えもなく寝てたんだ。

夜行性のモンスターの晩ご飯になってもおかしくなかったな。

これからは気をつけないと。

そういえば、モンスターも「世界」の可愛い子供なんじゃないかと地味に気になったのだが。

知らないものは知らないわけだし、どこで調べられるのかも分からないので悩んでたらなぜか分ってしまった。

理解しきれなかった情報も一応頭の中にはあるようだ。

必要として理解しようとする努力すれば見つけさせる。探索機能っぽいな。

頭の中に図書館でも入ってるようで地味に便利だ。

これがあれば受験であんなに苦労しなくてもすんだのに……。

陸上部の設備が整ってるところに行こうと思ったらなぜか名門校だったんだよな！。

やっと入学したのに今はなぜか見渡す限りの草原の中で朝ご飯だ。人生って分らない。

で、えーっと。

この世界はかなり豊かだ。



生命力に溢れてるとでも言うのか？

飢饉とか、滅多なことでは起こらない。干ばつとか冷害という意味では、だが。

モンスターに畑を蹂躪されて食べ物がなくなるとかはある。

……切ないな。

この生命力を生まれたときどれくらい持つてるかで寿命なんかは決まるらしい。

だが、生命力だけでは「生きている」だけ。

人が人として生きるには知性と言うか、理性なんかが必要となる。

対人関係を理解するとか感情とかそういう諸々も。

それが魂と呼ばれるものらしい。

動物なんかも怯えたり、親子愛を持ってたりするように魂がある。

「世界」が愛してるのは正確にはその魂だという。

対して、モンスターと飛ばれるのは魂を持たない、ただ生きてるだけの生き物だという。

生命力が形になった存在で、繁殖もしない。ただ突然そこに成体として存在する。

理性も何もないが生存本能だけはあるという厄介さ。

「世界」としてもモンスターは困った存在というわけだ。

モンスターを排除するために生命力を減らせば、そのまま人間や動物が飢えるし、新しい命が生まれてこない。

強い生命力を与えて対抗出来る力を、と思ってもモンスターも強化される。

いちごっこだ。

根本的解決は一回世界をリセットするくらいの覚悟がいるのでそれもやりたくないらしい。

これから生まれてくる命か、今ある命か。ジレンマだよなー。

どっちも愛しすぎて選べない。

愛し子に幸せになって欲しいだけなのに。

それが、「世界」の願い。

叶えたいよな。

こんなに愛されて、さらに願うのは人の幸せ。

それを無碍になんて出来るはずがない。

俺に出来ることなんてたが知れてるけど、それでも出来る限りのことはしたい。

それをこの世界で俺が生きる理由にしようと決めた。

大それた願いだ、それも分ってる。

でもこの力と知識があれば目の前の人くらいは救えると信じたい。そのため努力しよう。

与えられた愛に報いるために。

3日歩いて、ようやく草原に変化が見られた。

木の柵で囲まれた広い広い農地。小麦の青々とした穂が一面に広がる様はとても美しい。

これが金色になった風景は収穫の喜びも合わせてもつと美しく見えるんだろうな。

人の生活圏はこうやって生命力を消費しているので比較的モンスターは沸きにくい。

離れたところで沸いたのがやってくることもあるが、数は多くない。人里から比較的近くに沸くのは弱いものだから木の柵程度でもそれなりに安全は確保出来るようだ。

離れるにしたがって強いものが増えていくわけだが、その辺は周囲のモンスターを食うので遠征してくることはほとんどない。

王都とかのように賑わい、人や食料が多いのに消費される生命力が少ない場所というのが一番危ないが、その分守りも堅くなることでバランスがとれているのだろう。

どちらも、些細な拍子に崩れる安全ではあるが。

たどり着いた村は畑を囲っていた柵よりももう少し立派な柵で覆われ、出入り口には簡易な見張り台と門まで備えていた。

門番はまだ若い青年とやや年配の男が。

これが一般的な村の様子のはずだし、特に警戒されている様子もない。

武器らしい武器がナイフひとつだからな……。

その上重い荷物を担ぐのは嫌なので大半が収納袋の中だ。

あまりに荷物が無いと怪しまれるのでかさばって見えるように毛布とか鍋を入れた鞆を背負っているが。

それに比べて二人は槍を持っている。その状態なら俺を恐れるはずもない。むしろあまりに軽装なのであきれ顔だ。

「見かけないやつだな、行商人でもないようだし。タルカ村に何の用だ？」

青年が問いかけてくる。

こう危険の多い世界では用もないのに旅をする人間は少ないだろうな。

モンスターを狩るなら探求者ギルドに入るのが普通だが俺はまだ入っていない。大きな街にいたら入ろう。

「一旗揚げようって王都に行っただけだなー。通行税が払えなかったんでレイシャードまで行く途中なんだよ。今夜の宿と、食料が欲しい。あと出来たら肉とか買い取って貰えないかと思って」

これで説明がつくはずっ。

ちよつと呆れられたが、納得はして貰えたらしい。

苦笑がちだったが入れて貰えた。普通はそんなに警戒しないんだろ  
うが武器も持たない謎の旅人ってことで怪しまれたらしい。

自然の脅威があるから山賊とか強盗団とかはほとんどいないはずな  
んだが。

食い詰めた難民には見えないうし……。見えないよな？

「宿は一件しかないぞー。そこで肉なんかも買い取ってくれるだろうが、相場より安くなるのは覚悟しろよ？」

「買い取って貰えるだけありがたいよ」

マジで。レイシャードの通行税っていくらだろう。

「運がよかったようだが、まだ旅を続けるんなら武器ももうちつといいのにせんとな」

男性も心配してくれたらしい。

駆け出しにしても残念装備すぎるか。ちょっとへこむ。

「食ってくのが先立ったもんで……」

納得されるのも微妙に悲しいものがあるな、これ。

「何ならここで働くか？ 人生堅実が一番だぞ？ まじめに働けば可愛い嫁さんもらって食ってく位出来るだろう、若いんだ」

まじめに心配されている。善意が胸を抉るってこのことか。

その日暮らしのフリーターを心配する親戚のおじさんってこんな感じか？

人生の酸いも甘いも噛み分けてそんな人に言われると心が抉られる……。

「若いうちの苦労は実になると思うし、がんばって見るよ。ダメだったらまた来るからそのときは雇ってくれ」

「おう！ がんばれや！」

がはは、と笑うおっさん（もうおっさんでいいや）に背を向け、教えてもらった宿へ向かう。

肉は山ほどあるが、相場より安くなるなら全部は売らない方がいいかな？

宿はすぐに分った。

雑貨屋と食堂と酒場と、ついでに部屋も借りれますよ的な宿だ。兼業でないとやっていけないんだろうな。

恰幅のいいおばちゃんに前金で宿代を払って借りた部屋の中で肉を取り出す。

2キロ分くらいでいいか？ これくらいなら荷物の中に入れてもおかしくないサイズだし。

収納袋は便利だがこういうときは不便だな。使わないって選択はあり得ないが。

「おばちゃん、途中で狩ってきた肉があるんだけど、買い取ってくれない？」

どきっと生肉をカウンターにおいたらびびられた。紙かなんかで包んでおくべきだったか？

「アルゴルウグの肉じゃないか！ すごいね、あんた」

どっちかというと、一目で肉の素を見抜くおばちゃんの方がすごいのか？

俺は正直牛肉と豚肉、鶏肉くらいしか判別する自信ないぞ。ラムとかウサギになったらお手上げだ。

鴨と七面鳥と見分ける自信もないね！ これっぽっちも威張れないが。

「運がよかつたんだよ」

ろくな武器もないのでそうとしか言えない。俺はそれなりにガタイがいいから魔人には見えないだろうし。

「怪我がなくて何よりだよ。そうだねえ、700ルトでどうだい？」相場で1000ってとこなんだが……小さい村だし仕方ないか？

「うーん。正直ちょっと安すぎないか？ 700なら今日、明日の飯くらいおまけしてくれよ」

食事代くらいだとせいぜい20ルトくらいだが、ないよりマシだろう。

せいぜい食いまくろう。

「ああ。今夜はアルゴルウグの煮込みにするからね！　たくさん食べな」

おっ、美味いって評判の煮込みが食べられるのはありがたい。焦げ肉にして結局食べてないんだよ。楽しみだ。

さて、これで通行税の心配もなくなったことだしレイシャードまでどんどん進もう。

……王都より通行税が高いなんてないよな？

## 決意（後書き）

モンスターの名前はフィーリングです。  
もし偶然の一致とかがありましたら変更します。

## ギルド

数匹のモンスターを倒しながら道を進み、結局10日ほどかけてたどり着いた街はやっぱり立派な城壁で囲われていた。

大きな湖が近いたためか、立派な掘りまである。

おっ、魚も泳いでるな。

釣りをしている人は見かけないので禁止されてるのかも知れないが。

レイシャードの都はこのあたりでは王都よりも栄えてると言われている。

理由は簡単で、領主さんが立派な人だから。

何代か前の王様の妹が侯爵家に嫁いだ時に王領の一部を持参金代わりに与えられたのを、そのまま立派に経営して繁栄させてるようだ。水源が近いというのも大きいのだろうが、税金が安く治安もいいので商売も盛んになるし人々も安心して暮らせるというわけだ。

ほかにも公共事業として病院を作ったり作物の改良なんかも研究してそっちもそれなりの成果が出てるらしい。

人が集まれば塙で囲まれた都市だ。人口が増えすぎてやばいんじゃないかとも思ったが未開拓地域も多いから都での暮らしに馴染めなかったり食い詰めたりした人間はそっちでがんばったり、故郷へ帰ることになるらしい。

裏通りで細々暮らす人間はどうしても出てくるが、治安がいいのでスラムとまではなっていないようだ。

しばらくここを拠点に暮らそうと決めたのは正解だったな！

ここの門番もやっぱり二人。あとは詰め所らしいところに数名。



これまでと比べたら格段に人が来るとはいえ、一日中ひっきりなしというわけではないから妥当な線だろう。

装備も皮っぱい軽装の割に丈夫そうで立派な装いだ。武器は槍。

「通行証は？」

持ってないよ……。要るって聞かなかったのになあ。

久しぶりに屋根のあるところで休めるかと思っただのにこのまま草原に逆戻りは辛いな。

どこかの農村で働くしかないのか？

「ないです」

「心配しなくてもなくても入れるぞ？　持ってないやつの方が多いくらいだ。ただ探求者ギルドの人間やらだと通行税が無料になったり安くなるだけだ。で、500ルト払えるか？」

よっぽど俺の落胆っぷりが哀れだったのか説明してくれた。

通行証なしで500……王都より高いな。それだけ賑わってるのか？

「ありがとうございます。払えます」

安くとはいえ肉を売っておいてよかった。残金が300ルトを切ったが何とか入れそうだ。

都に入ったらまっすぐ探求者ギルドを目指そう。

今夜の宿くらいなら何とかなるだろうが、かなり心細い。

「そうか。よし、入っていいぞ」

やっと逃げ隠れせずに暮らせる場所にたどり着いた。

長かった……。

感慨に耽っていると後ろから声がかかる。門番さんだ。

「行くところがないなら役場に行くといい。西の方で城壁を拡張してるから働き手を集めてるぞ」

親切なんだろうが、そんなに貧しそうに見えるのか。見えるんだろうな……。

「ありがとう。でも探求者になろうと思ってるんだ」

探求者つてのは獣の素材を探したり薬草とか野草とかいろいろ探してくるところからつけられた名称らしい。

冒険者でよくないか？と思ったのだが、冒険なんてろくでもない。

あくまで生きるための仕事であって危険を冒すべきではないって意味合いで探求者と呼ばれてるらしい。でも今では護衛とかモンスタ―退治とかもやってるので俺のイメージ的には冒険者っぽいんだがまあ、俺のイメージはともかく。狩ってきた肉とか牙とかを売るのはそこが一番いいだろう。ポーションとかも売れそうだし。

「探求者！？　いくら若いとはいえ……人生堅実に生きるのが一番だぞ？　悪いことは言わない、命が惜しいならやめとけ」

装備とか見ていつてるのだろうか。それともそんなに軟弱そうに見えるのか？

会う人会う人にこんな反応されると自分の選択にだんだん自信がなくなってくるな。

「無理そうならやめときますが、一応狩っていた肉とかあるので」

「そうか、それなら自分の選んだ道だ、がんばれよ！」

哀れむような視線が痛い。

詰め所の中の門番さんは力人っぽい筋骨隆々とした人が多かったからな……。

いかにもか弱そうに見えるのかもしいない。

金が貯まったら装備を調べよう。そうすれば多少は見れるようになるはず。

通りがかりの人に聞いた看板を頼りに探求者ギルドにたどり着いた。とはいっても門から続く大通りをまっすぐ歩いて街の中央の露天が並ぶ広場の一角にあるのでよほどのことがない限り迷う人はいないだろう。

石造りの重厚な意匠の建物だ。石の家は木製に比べて圧迫感があるよな。

この街は煉瓦作りの家が多いので余計に目立っている。  
ちなみに看板は簡略化されたモンスターの意匠。武器屋は剣、防具  
屋が鎧の絵だった。分かりやすい。

ギルドの中は、まるで役所のようだった。

広い店内には椅子が並び、カウンターがいくつもある。左から買い  
取りに受付、売店か。

壁には紙が貼られておりその前で話し合うグループもいくつもある。  
受付で登録するのだろう。早速向かう。

間違いなものを見るようにじろじろ見られてて居心地が悪い。

俺より華奢な人が数名いるが魔人だろう。

筋骨隆々とした人や毛皮のある人、鱗のある人や翼のある人もいる。  
人間とあまり姿が違わないのは筋骨隆々とした人か華奢な人しかい  
ない。力が魔などなにかに特化した方が中庸より強いということだ  
ろうか。

魔人って鍛えても筋肉つかないのかな？

悪目立ちしないように、一人で旅するうちに筋肉のついた魔人、つ  
てことにしたいんだけどな！。

筋肉がついた、といっても肉体労働の多いこの世界では俺程度なら  
華奢な方に入ってしまう。

魔人に比べればマシだが、人間一般の中でさえもつと鍛えろって部  
類に入る。

まあ、レンの身体が弱かったせいもあるのだろうが。

「すみません、ギルドに登録できますか？」

受付のお姉さんは結構美人だった。

二十代前半かな？ 藍色の髪に茶色っぽい目をしている。

俺は髪をずっと染め続けるのも何なので数日前から黒に戻してある。

この世界は髪とか目が色とりどりで面白い。

茶色が一番多いが黒や金、果ては青とか緑。ピンクと何でもありだった。

覚えやすくいいと思ったのは秘密だ。

外国人の顔って覚えにくいんだよ……。映画とか見ても主人公レベルしか覚えられなくていきなり活躍して死ぬ脇役とかに混乱したことがある人は多いはずっ。

おまえさつき死んでなかったか？とかね。犯人がいきなり仲間になったように錯覚したときは映画はレンタルして家でみることに決めたくらいだ。

そんな俺でも藍色の受付さんなら覚えられそうな気がする、髪色のレア的に。

「……はい。登録料に500ルト頂きますがよろしいですか？登録されますとギルド員の印に腕輪が配布されます。身分証明と通行証になりますのでなくさないように気をつけてください。再配布にも500ルトかかります。こちらは一年ごとに変更されます。次の変更は半年後で変更月より一月で現在のものは使えなくなりますので、その前に交換をお願いします。手数料は300ルトになります」  
一気に説明してくれたが、金が足りない。現在の所持金は276ルト。これだけあれば数日は暮らせると思ったのに。

「すみません、先に肉とか牙を換金出来ますか？」

荷物は城門が見える前に出しておいたので怪しまれないだろう。

重い思いをしたが、正解だった。

「はい。換金でしたら買い取り窓口にごうぞ」

にこりともしない受付のお姉さん。愛想はないが、呆れた顔もしないのでいいでしょう。

「じゃあ、先に換金してきます」

買い取り窓口に並ぶ。最初からこっちに並ぶべきだったんだな。余計な恥をかいてしまった。

「兄ちゃん、人間か？」

前に並んでた人が振り返る。俺より頭2つはでかい。力人だろうか？  
「ああ」

魔人に筋肉がつくかがまだ分かってないので素直に頷いてしまう。これで誤魔化せなくなってしまうが……諦めるか。

嘘で塗り固めてもばれたときのリスクが怖い。

「珍しいな。人間なんて腕の一本でもなくしたら取り返しがつかないだろうに」

「いや、再生するのは力人くらいだろ？」

魔人とか翼人も再生能力はない、はず。あつたらさすがに人間不利すぎだろう。

「そうだな！」

笑われてしまった。

「だが空も飛べない、身体は弱いし魔法もろくに使えない。それで探求者になるうなつて物好きは滅多にいねえよ」  
なるほど。それもそうか？

「魔人ほどじゃないけど、俺は魔法も得意なんだよ」

魔人にも勝てると思うが謙遜しておこう。嘘じゃないぞ、ただの謙遜だ。謙遜は日本人の美德なんだ。

「へえ。魔人もあんまり探求者にはならないからなあ。なんかあつたら頼むぜ」

あの華奢な人間に長旅は酷だろうな。

「おう。俺は隼人。あんたは？」

名字は貴族くらいしか持ってないので名前だけ名乗る。やっと本名が名乗れてちよつと嬉しい。

「俺はゲイル。よろしくな」

ゲイルの番が来て彼の売り物が見えたが、肉とか牙で俺と似たような感じだった。

実力は分らないがまだ駆け出しっばいし仲良くできるといいな。

「アルゴルウグの肉が4キロ、牙が2組、角が2本ですね。ジグルは肉が3キロ、皮が3枚、爪が6本。合計で9100ルトになります」

おい、なかなかの大金だ。アルゴルウグは強い分高く売れるな。

ジグルつてのは大型犬並みのサイズですばしっこかったが魔法で頭を狙えば、サイズがサイズなので倒しやすかった。

アルゴルウグは頭を狙っても魔法の火力次第では怪我ですんでしまっ分、手強い。火力を上げすぎると全身潰れるし。あれはなかなかスプラッタな光景だった。

皮が一番高く売れるのに一回もまとまな状態で倒せなかったのだからなかった。ジグルも角がとれなかったんだけど。

火力の調節も身につけないと。うっかりこんがり焼いた肉が大量にしまつてある。煮込みよりは落ちるがそれなりに美味しいので道中の食料として重宝したが。

登録の続きは簡単で、あとは死んだり怪我をしても自己責任。一応提携病院は多少安くしてもらえらることや依頼を受けるときは依頼主のところに壁の張り紙を剥がして持っていき、交渉するよういわれた。大体保証金を払って依頼を受けるようになるが失敗したら保証金は返つてこない。騙されても自己責任。そんな話を聞いた。自己責任ばかりだな。ギルドの役割つてのは売買の中継と依頼の提示が主らしい。売買の手数料、あとは武器防具店と病院とかのマジンで儲けてるようだ。

無事に登録が済んだので紹介された宿屋に向かう。こっちも提携店なのだろう。

ちよつとサービスして貰えるらしい。食事が美味しいといいんだが。それにしても、ポーションなんかはどこで売るべきだ？

ギルドが思った以上にただの中継点っぽかったので困ってしまっ  
一応売り場もあったが食料や消耗品以外は普通の店で買う方が安く  
て確実とかで閑古鳥が鳴いてたもんなあ。  
自作の見慣れない薬なんかは買い取ってくれそうには見えなかった。  
ここは冒険者が集まりそうな宿で怪我人に直接売るべきか？  
で、効果が実証されてほしがる人が増えたらギルドにまとめて売る。  
需要があれば売れるだろうし、なければ他のものを作ればいい。  
幸い懐に余裕も出来たしいろいろ作ってみよう。

## ギルド（後書き）

ちょっと間が開いてしまいました。



宿屋は酒場と食堂が一緒になつてようだった。

このあたりに多い煉瓦作りの建物で、なかなか趣のある風情だ。異人館とかいいよな。見る分には、だが。うちが純和風だったんで憧れがある。くつろぐには畳が一番なんだけどな。

看板はジョッキと酒瓶が描いてあるのとベッドの絵か。兼業なので2枚出してあるようだ。名前は「黒の風見鶏亭」だ。名前の通り、看板の上には風見鶏がある。

割とこのあたりでも大きめの店だから怪我人の一人や二人いるのを期待しよう。

いい匂いもしているし、食事も期待出来そうだ。

宿は昼のこの時間だからか、食堂がメインのようだ。ギルドで見たような連中が多く、賑わっている。

ウェイトレスに促されるまま席に座るが、ちょうど4人掛けのテーブルを3人で使ってるグループがいたので相席になってしまった。大柄な人が多いせいかわテーブルは結構広いのでちょっと狭くはなるが、そんなに邪魔しないですむだろう。

まあ、テーブルが大きいせいで置ける数に制限がでてこれだけ混んでるのかも知れないが。

先客に軽く会釈すると相手も軽く黙礼してくれた。威つい風貌だがいい人っぽい。

「適当に定食お願い」

ウェイトレスに頼むと威勢のいい返事が来た。実はメニューは読めるが中身が想像出来ないんだよな。

その分定食なら外れが少ないので重宝してる。

ガルガル鳥のブラヒュー煮込みとか言われても困る。食べられないものではないだろうが頼む勇気がでない。黙って出てくれば食べ物の形はしてるので食べれないことはないんだけど。

それにしてもギルド推薦の宿だけあつて探求者なんてやってる人が多いのだろう。女性率が著しく低くて潤いがない。いても男勝りって言葉がぴったりだし。

ウエイトレスも恰幅のいいおばちゃんだった。料理の大皿を3枚くらい一度に運んでる姿がたくましい。別の意味で惚れそうだ。

このテーブルの人たちも腕輪をしているので探求者っぽい。傷を補修したらしい跡が残る鎧や、側に置いてある使い込んでるっぽい武器なんかを見ても歴戦の勇者っぽい貫禄がある。

怪我はしてないっぽい。いいことなんだが。いきなり計画の初期段階から躓いてしまった。病院まで行って売り込むべきか？

「なんだ？」

そんなことを考えながら見てると、視線に気付かれましたのだろう。

嫌そうにされてしまった。

「すみません」

知らない人間にじつと見られたら不快だよな、ごめんなさい。

つと、あれ？ 気付かなかったが、この人左手首から先がない。

力人っぽいし再生するんだろうが、さすがにちよつと不便そうだ。あんまり見るとまた嫌がられそうなのでやつと来た食事に視線を集中させながら考える。

赤ポーシヨンって傷は治るけど、再生はどうだろう？ 欠損も怪

我と言えば怪我だから治るような気はするんだが。

あたりまえだが人間には再生能力がないので再生能力付きのポーシヨンはあると便利だよな。

モンスターに襲われて命は助かったけど手足を失う人もいる。そういう人がもう一度自由に動けるってのは大きな魅力だ。

赤ポーシオンが無理だったら作ってみよう。

とりあえず赤ポーシオンで再生するかどうかが試すのが先か。

「あー」

ちようどいいところに怪我人がいることだし、頼んでみよう。

「なんだ？」

あ、さっきより嫌そうだ。よく考えたらかなりの不審者だよな、俺。

でもうまくいけばその手が再生するし、許してくれ。いくらほついても再生するとはいえ、早いほうがいいだろうし。

「薬の研究をしてるんだがよかつたら試してくれないか？ もちろん無料だ」

欠落している手を示して頼んでみる。侮られないように普通に話しかけたが馴れ馴れしかったかも知れない。

案の定ものすごく怪しまれてる。

他の連れの人も一樣にあきれ顔だ。

「そんな怪しい薬なんか試して毒でもあつたらどうするんです」  
連れの魔人っぽい華奢な人に全否定された。いや、俺がこの人に毒を盛る必要性なんか皆無だろう。

怪しいのは否定しないけどさ。

「じゃあ、俺も半分飲むから。で、効果がなかったらここは俺がおごる。どう？」

この人たち3人組なんだが、結構食ってるんだよな。いくらくらいかは分らないがおごりとなれば薬飲むだけだし受けてくれないかな？

俺が半分飲むって言う以上害がないのは分ってくれるだろう。もちろんリンゴ味のだから意外と美味しいぞ。前のは味だけで毒認定されかねないが。

再生能力があるかは謎の赤ポーシオンだから半ばおごり確定っぽ

いが、ここで知り合いになってたら新しいポーション作ったときにも頼みやすい。

さすがに自分の腕切り落とすのは治せると分つてもかなり嫌だし、ちようどよく怪我した人に巡り会えるか分らないしな。

ちようどいい人が見つかったんだ。ここは知り合いになっておきたい。

「ガルド、飲んでもいいんじゃないか？ 害はないだろ」

今まで黙ってたもう一人の力人さんっぽい人が追加注文したあとに口を出してくる。

めいっばい食うつもりだな、これは。

4人分でも払えないことはないだろうからいいけどさ。

ガルドと呼ばれた怪我人も人の金で飲み食い出来るのは魅力的なんだろう。頷いてくれた。

連れの華奢な人はまだ何か言いたそうだが、反対はしないようだ。決まったようなので早速鞆の中をこそこそ漁る振りをして中の収納袋から赤ポーションを2つ出す。

俺が半分飲むと量が減ってしまうが2本を混ぜて1本分ずつ飲めば大丈夫だろう。

コップに入れて大体半分つてとこまで飲んで残りを渡す。

わくわくしながらじーっと見る。

ガルドさんは戸惑ってるようだ。

「飲み薬なんかで怪我が治るのか？」

「気持ちは分るが即効性なので安心して欲しい。」

「大丈夫大丈夫。俺も飲んだじゃないか」

とりあえず害がないのだけは信じてぐっといってくれ。

連れの人たちは追加注文してるし。

かなり大きなため息をつかれたが飲んでくれた。ありがとう！

問題はなくなってる手首の方だが……。

「おー、再生した。欠損も怪我のうちか、よかったよかった」

再生過程もじっくり見ちゃったんでちよつとグロイがモンスターの解体とかでだいぶスプラッタには慣れたよ。  
慣れたくはなかったんだけど。

3人組の人は呆然としてる。

気持ちは分るけど反応がないと寂しい。

「えーっと。効果があったからおごらないよ？」

とりあえず約束の確認を。実験に協力してもらったんだから奢つてもいいかもしれないけどいろいろ物いりだから節約できるところは節約しないと。

この言葉で我に返ったのか、ガルドさんが真っ先に正気に返った。  
「おまえっ、なんだこれはっ」

胸ぐらを掴んでかくかく揺さぶられる。ちよ、苦しいって！  
「薬つて、落ち、着けっ、は、な、せっ」

もかくが逃げられない。すごい力だ。さすが力人だけあるな。  
だんだん酸欠で目の前が暗くなって……。

落ちる前に華奢な人が取り押さえてくれた。

「ありがとー」

ぐつてりと机に突っ伏しながら取りあえずお礼を言っておく。  
食べたものが喉元まで来てるよ。吐きそう。

「すまない。それにしてもすごい薬だな。見たことも聞いたこともないぞ」

それはそうだろう。自作だし。

「長年の研究のおかげさ。何度失敗したことが……」  
唐辛子味はきつかった。

遠い目をして語る俺を見て勝手にいろんな苦勞を思い浮かべてくれたのだろう。

彼らの視線に尊敬が混ざった気がする。

連れの力人さんはレバタ、魔人さんはルイ。自己紹介してもらったので名乗り返す。

地味に周囲の注目も集めてるようだが寄ってくる人はいない。聞き耳は立てられてるっぽい。

「今ので2本使ったんで在庫はないけど、かなり便利だと思うよ？ それなりの重傷でも治るはず」

実験台が自分だけだったのであんまりひどい傷は試せてないけど。あつたら是非売って欲しかったんだが……」

残念そう。ひとつあつたら生還率が格段に上がるだろうしな。

せっかく魔人のルイがいることだし作り方を教えてもいいが、生活費稼いでからの方がいいか。普及して欲しいのは山々だが、俺も生活できないと困る。

「明日にはいくつか用意できるからさ、買ってくれる？」

「一日で用意できるのか!？」

また詰め寄られた。

ガルドさん、短気だな。そして問答無用で殴って沈めたレバタさんが怖い。

「……えーっと」

助けを求めてルイさんに視線を向けたら、そつと逸らされた。味方がいない。

「10本くらいなら出来るけど」

それ以上だと、他のものを作る時間がない。やっぱり病気用とか毒消しも作りたいしな」。

野宿用に安心して寝られる結界が作れないかも研究中だし。

かなり控えめな数にしてみたが、彼らにしてみれば十分すぎる本数だったようだ。

「売ってくれ! いくらだ!？」

詰め寄ってくる多数の人。周りにいた人も参加して大混乱になっている。

もっと少なくいべきだったか？

つてか、ここまで需要があるとは。こういう仕事の人には生命に直結するからなあ。

「世界」の大事な子供の為だしさっさと作成方法教えるべきか。俺の生活が落ち着くまでに取り返しのつかないことになる人がいたら申し訳ないもんな。

取りあえずこの場をどうするかが問題だが。

「作ったらギルドに頼んで売ってもらうので、落ち着いてください！ 数日中には手に入りますよ！」

叫んでおく。ギルドにはこれから頼むけど、手数料払えば大丈夫だよな？

確実に売れるだろうし。

周りの人もそれで納得したのか落ち着いてくれた。お店の人、ごめんなさい。

「なんか大騒ぎになってごめん」

半分くらいは騒いだガルドさんの責任のような気もするが。

テーブルの上の食事が無事だったのが奇跡だ。

素材は謎だがかなり美味しいので無事でよかった。水玉模様の魚とかかなり食べにくかったけど。

「いや、こっちこそ。それにしてもすごいな、その若さで手を再生させるような薬を作るとは」

レバタさんが褒めてくれるがふと新しい疑問が出来てしまったのでそれどころではなかった。

「あの、聞きたいんだけど。力人の人には手首がないのもそのうち治る怪我のうちだよな？」

肯定が返ってきたので続けて問う。

「それだと力人以外だと「治らない欠損」ってのは傷がふさがった状態が治ってる状態になるか？」

3人とも一緒に悩んでくれた。いい人達だ。

「多分そうなるんじゃないでしょうか？」

真つ先に答えてくれたのはルイさんだ。さすがに力人じゃないので欠損した部位についての考えは信頼できそうだ。

力人の二人にはわかりにくいようだけど。

「さっきの、怪我を治すだけの薬なんで……」

そういうと3人とも納得してくれた。

「じゃあ、私だと怪我は治っても手足を失った場合はそのままの可能性があるんですね」

「その可能性が高いな」

また確認しないと……。

「あ、力人以外に欠損部位抱えてる怪我人に心当たりとかあったりしない？」

ダメ元で聞いてみる。

「病院に行ってみたらどうだ？」

一番確実な答えが返ってくる。そりゃそうか。

「病院の位置知らないもんで。それに怪我人一人だけ治してあとは放置つてもなかなか気まづくないか？」

何人もいたりすると一番大怪我の人を治すにしても他の人に恨まれそうだ。

「そうですね。ですが、ハヤトの薬を買えば治るのですからそういうえは皆納得するでしょう」

つてことは在庫がそれなりにいるな。やっぱりここで知り合ったのも何かの縁だろう。

「3人にちよつと頼みがあるんだけど。ここじゃなんだし、つきあつて貰えるか？」

3人とはいつてもルイさんがメインだけど。

興味を持ってくれたのか、3人に了承を貰ったので部屋を借りて場所を移す。

ここで話してもいいんだが、周囲がまだ聞き耳たててるので落着かない。

ちよつと迂闊だったか。





**薬（後書き）**

誤字脱字ご容赦ください。

## 覚悟

まだ早い時間だったが、食堂から出てそのまま部屋を借りてそこで話すことにする。

部屋は奮発して広めのを借りた。

いろいろ買い込むことになるし、長居しそうだしな。

おかげで4人入っても何とかなった。大男が2人もいるのでかなり狭いけど。

「で、頼みつてのは？」

レバタさんがリーダー格なのか？ 存在感が薄いか思ってたよ、ごめん。

「さっきの薬なんだけど、完成したばかりで値段決まってないんだよ。で、値段決めるのに助けが欲しい」

言い値で売れるとは思う。金貨5枚とかでもね。

俺や、俺の大事な人がもし腕なんかを失って、でも金を用意すれば治してやるとかいわれたら可能な限り支払う。

たいていの人はそうだろう。

でもそんな高価な薬は困窮する人には買えない。

甘いと思うが、助かる人は多い方がいい。

元々俺の力ではないんだ。せめて「世界」の望みを少しでも叶えたい。

生活に困らない程度の収入があればいい。他にもいろいろ作れそうだし、便利品の方で儲けて老後の蓄えにすればいい話だ。

多分それだけでも十分な収入になるだろう。収納鞆とかかなり便利だし。

うん、人の命に直結しそうな部分は良心価格で売ろう。

「ルイさんに作り方を教えるからさ、一日にどれくらい作れるかで手間賃とか決めたいんだよ。一人じゃ、分らないから」

俺がその気になれば数百本作れてしまう。その前提で値段を決めると他の人が赤ポーシヨン造って生活しようと思っても安すぎて生活出来ないから供給がないってことになりかねない。

逆に手間賃をとりすぎても赤ポーシヨンを造れる人は探求者やめてポーシヨンを造る生活になるということになりかねない。

それはそれでモンスターの脅威が増えそうだ。

「教えてもらえるなら是非」

ルイさんは即断で頷いてくれた。買うよりは造る方が安くつくのは当たり前だもんな、断るわけないか。

ガルドさんはなんか目に見えて困ってる。

正直な人なんだろう。俺が簡単に製造方法を教えるとかいったからなー。

自分達の得と俺の損を考えて言い出せないが、黙ってるのも悪いって感じかな？

レバタさんは良く分らない。無口な人だなあ。

「製造方法は広めるつもりなんで一足早く知れるってのと買わなくてすむってくらいの利点にしかないけどいいか？」

悪いけど、ルイさん達の得にもならない話なんだ。損にはならないと思うけど。

「作り方を黙ってれば莫大な儲けになるってことくらいは解ってるようだな。なのに教えるのか」

「それなりの金額で誰にでも手に入るように出来れば、余計な恨みを買うこともないし。第一、子供の手足を治すために爪に火を灯すような生活をしています、って人が出そうじゃないか。夢見が悪くなる」

本音混じりに出来るだけヘタレっぽく言い訳してみたら予想以上に呆れた表情をされてしまった。

ここで代わりに俺らが儲けてやるよ！って人じゃないとは思っんだが、どうだろう？

「甘いが…損をするのはおまえさんだからな。好きにすればいい。」

ルイには作り方を教えるとして、僕らには何をさせたい？」

ここでレバタさん達はつい事です、とか言ったら怒られそうだな。さらにはあなたも十分甘いと思う、とか思っても言わないでおこう。

「護衛を頼む。ポーシヨンの売り出しが安定するまで金目当てとか現物目当てとかの人で騒がしくなるだろうし」

買い出しにも行かないといけないわけだが、金を持ってると思われたら絡まれそうだな。

「研究馬鹿と思ったらただのお人好しってわけか」

ガルドさんの言い分は正しい。腹は立たないが……。

「歩けない、動けない、そんな不自由を抱えてる人間から搾り取った金で豪遊するくらいならお人好しでいたいね、俺は。金を取る以上全員が救えるわけでもないし、ただの偽善だろうけど、俺の自己満足だとしても、それで薬に手が届く人間が増えるならそれでよくないか？」

熱く語ってもしょうがない。

解ってはいるんだが、スルーできなかつた。邪魔をするようなら他の人を探さないといけないしな。

「そういうことでしたら、私は全力で協力しますよ」

……あれ？

「ああ、甘いのもそれだけ覚悟があるなら立派なもんだ」

ガルドさん、肩を叩いてくれてるんですが、その力だと骨が砕けかねないんですが。

「僕らは元々4人組だったんだが。傷が元で仲間を亡くしてな……。

苦しむ仲間を見るのがどんなに辛いかは良く分る。おまえさんが金儲けのことだけ考えるような輩でなくてよかつたよ」

……その場合どうなったのかは聞かない方が精神衛生上良さそうだな。

と、とりあえず……。

協力者が出来たようでもよかつたと思おう。うん、そうしよう。

護衛の件も快く了承してもらったので、ルイさん相手のポジション作成講座開幕だ。

作れたら魔力の消費量や時間で手数料を考えて、原価と足して値段決定か。ルイさんくらいだと一日どれくらい作れるだろう？

「あ、ガルドさん。傷薬結構使うんで買ってきてくれるか？ あと、瓶と」

せっかく雇ったので使いまくる。いや、雇ったと言っても報酬はルイさんにポジションを教えるのと相殺扱いなんだけどな。

立ってるものは親でも使えって素敵な言葉が日本にはあったことだし。

教えるのはもちろん薬草から作っていく方式だ。

そのほうがただの水から作るのより魔力の消費が少ない。

もしそっちが簡単に出来るようなら水からも出来るって教えればいいし。

何か言われたら俺は魔人じゃないから魔力の消費量が少ない方がやりやすいんだって誤魔化せるしな。

「まずは薬草を水に漬ける。で、薬草の傷を治す力が水に溶け出す！ってイメージで水を攪拌して。どんどんと溶けて凝縮されていくってイメージ」

まずはこの説明が通じるまでが長かった。

解ってはいるんだけどその通りになれば苦労しないって言うのか？傷を治す力ってなんだ？って疑問を抱くとそこで詰まるらしい。

薬草って本来は傷を治すんじゃなくて化膿させないようにしたり自己治癒を高める働きがあるかららしい。

「じゃあ、自己治癒を高める力がどんどん強くなるイメージで」って言ったら「どっちですか！」ってさらに混乱してた。

深く考えちゃダメだよな、魔法なんだし。

疑うと発動しなくなるよー。って言ったら怒られたよ……。

でもこの辺は割とすぐに慣れてくれた。

「あ、ここまでで魔力どれくらい使った？」

メモを用意してつと。紙も実は高いんだよなー。1枚で大学ノートだと2〜3冊買えそうなくらいで驚いた。羊皮紙じゃないだけよかったと思うけど。

こっちの文字も書けるけど日本語で書いておけば解読不能の暗号状態。便利だ。

「そうですね、1/20くらいでしょうか」

切りよく100を基準値にしてつと。5点消費って感じが。

「あ、ルイさんって魔人の中で魔力少ない方？」

「多い方だと思いますよ。平均よりは5割り増しくらいです」

ルイさんって実はすごい人だったのかも。これなら水からでも作れたかもな。

「次は濃縮水にさらに傷が良くなる力を送っていくイメージで。傷が治る力で水が赤く染まっていくつてのをイメージしたら分かりやすいかも。血の補給とか的に。」

あ、味もイメージでつくみたいなのでリンゴ味で飲みやすい、って念じておくとあとで辛いくない」

「どんどん解りにくくなっていけますね」

ダメでしたか。

「この水を飲むと怪我が治る！ 赤いリンゴ味の超回復薬！ って根性を叩き込むとか」

「そっちの方が分かりやすいですね」

一生懸命考えたのより適当に言った方が採用されたらショックだね。今度ルイさんには血の補給をメインにイメージして血の味のするポーションを作ってあげようと決めた。

そうやってわいわいと薬を作り続けること数時間。

深夜そろそろ寝て明日に持ち越すべきかと思い始めたころ、ようやくルイさんの試作一号が完成した。

ほんのりと赤い程度だが軽傷なら十分癒せるレベルだ。

でもルイさんは魔力を使い果たしかけてぐったりしてる。

「これにさらに魔力注げば十分な効果のになるし、慣れれば大丈夫だつて」

この分だと当分2日で1本つてところかな？

こつちの作り方でもかなり魔力が必要らしい。

人前では作れないな、これは。

魔人でもないのに怪しすぎる。

「ハヤトはこれを1日で10本作れるって言っていましたよね」

……言いましたね。もっと考えてしゃべるべきだった……。誤魔化しも思いつかない。

「ちょっと特異体質なだけだよ。あ、もうこんな時間だな。しっかり寝て休んで、続きは明日に！」

思いつきり怪しまれたが、全力でスルーだ！

「いいでしょう。この時間ですしね、また明日にします」  
逃げ切れないらしい。

どうしよう……。。



## 覚悟（後書き）

4人もいると誰の台詞だか解りにくいですね。  
やっと友人らしき人の出来た主人公です。

## 販売

魔人の中でも魔力の多いというルイさんが2日かかるものを1日に10本作れるとばれてしまった。

ギルドで販売を待つてる人もいるから嘘です、なんて言えないしなあ。

さつきは怪しまれたけど体質の理由なんか知らない、で押し通すしかないか。

人間と魔人なんて体格の違いくらいしかないんだし、ずっと人間だと思ってたけど実は体格のいい魔人なのかもしれない、とかいっておけば大丈夫だろう。

取りあえず明日売り出すためにポーションを作っておこう。

作成の効率的には限界まで魔力を込めた液を水で薄めて使うのがいよいよだ。

その方が薬草の消費量も少ないし、抽出に使う魔力も浮いていい感じだ。限界はあるから薬草消費なしってわけにはいかないのが残念だが。

俺の場合は水から作ればいいだけなんだけどな。

ちなみに効果の強さは透明度で判断。

全体が赤く見えるのが最低ラインで、それだと軽傷までは癒せる。

ほっといても命に別状ない程度の傷までかな。

次のランクは全体が赤く透明感はあるけど反対側は透けて見えない。これでかなりの重傷までいける。力人だと手首の再生まで可能。腕とか足一本になると不明。

一番効果が強いのは塗りつぶしたような赤色。多分死んでなければ大丈夫なんじゃないかってくらいまでいける。これが限界。

反対側が見えるような見えないような微妙なラインとかだとそれな

りの傷まで、って感じに濃さで決まってくるのでこの辺は現物を見て交渉してもらうしかないか？  
見慣れないと思ったより効果が強いとか逆に低いとかありそうだが透明な瓶が普及してて良かった。陶器とかじゃ騙されたとか問題が多発するところだった。

薬草が1回分で120ルト。王都よりちょっと高いが仕方ないか。給仕とか店番の日当の平均が50〜60ルトで探求者の相場が100〜120ルト。

探求者は命の危険があるから高いらしいが、薬作りに命の危険はないし中間の80ルトってところかな。

280ルト…ルイさんの魔力で2日だからもう少し多めに時間を考えないといけないか。

あとかかるのはギルドでの販売の手数料と瓶代くらいだから売値は400ルトでギルドに手数料2割で80ルト、作り手に320ルト。最低ラインのポーションで400ルトか。効果と即効性から考えれば安いと思う。

次のは最低ランクのが5個とれるから5倍で2000ルトか？ 高いな。あ、薬草代も5倍になってるし。でもかかる時間が時間だしなあ。

重傷で入院する期間とかその間の収入を考えたら2000ルトでも大丈夫か。アルゴルウグの肉2キロ分と思うと高く感じないし。

一番強いのは正直強すぎて怪我には意味がないんだよな。2番目ので足りなければ2本飲めばいいんだし。腕とか足の再生用としてくらいか？

値段はそのまま5倍。

こういふものの値段なんて供給が増えれば自然に落ちていくだろうし。高騰しすぎなければいい、くらいの気持ちでいこう。

それにしても名前が全部赤ポーションだと分りにくいな。

効果が謎だし。強・普通・弱だと簡単に覚えやすいけどさすがに微妙か？

スペシャルヒーลーション、ノーマルヒーลーション、マイナーヒーลーション。

ありがちだけどわかりやすい。

分かりやすいのが一番だよな。下手に凝って間違ったりしたら恥ずかしいし。

作製者が間違うのはかなり気まずいと思う。

この調子で決めるなら病気用だとキュアデイズポーションで解毒はキュアポイズンポーション。うん、色で呼ぶのも分かりやすいけど名前で用途が解る方が便利で良さそうだ。

錠剤の方が味にこだわらなくていいから楽そうだと思ったのだが、魔力を込める対象が思いつかなかったのも飲みたくないし。身体にも悪そう

だ。ラムネとかあれば良かったのかも知れないけど。そっから連想して果物でも試してみた。けど、食べやすかったが普通のと区別が付かないし、時間停止袋に入れない限り腐るので諦めた。効果の強さも見た目で解らないから悩むし。売り物にならない。

結局は水最強か。汎用性に溢れてる。安いしどこにでもあるし。

取りあえず今考えなきゃいけないのはこれくらいか？

正直いろいろ考えすぎて疲れた。とっとと寝てしまおう。

あ、一応部屋に警報装置はつけておこう。

「俺以外がドアや窓を開けるとベルでお知らせ」  
イメージは警備会社のアレ。

便利系の呪文は人には聞かせられないものばっかだなー。ルイさんに聞かれないよう気をつけよう。笑われそうだ。

警報が鳴ることもなく無事に朝になった。

ギルドにヒールポーションの販売を頼みに行かなきゃな。

ルイさんは昨日に引き続きポーションに魔力を込めて精製中。今日中にノーマルレベルにはなるだろう、たぶんきつと。

俺が本当に10本用意してたのでかなり問い詰められたが、魔力を込める時間は慣れたら早くなるしなんでそんなに魔力があるかって言われても、生まれつきなんで解らないって押し通しておいた。

かなり不思議そうだが実際魔力は生まれつきのものだから納得するしかないようだった。

常識外れの量だそうだけど、10本くらいなら作っても疲れる気がないんだよな。さすが世界と繋がってるだけある。

ギルドは建物の外にまで人が溢れる、大盛況だった。

昨日も人は少なくはなかったけど、今日はすごいな。なんかのイベントか、それとも昨日たまたまが少ない日だったのだろうか。

「すごい人だなあ。いつもこんななのか？」

一緒に来てくれたレバタさんに聞いてみる。ガルドさんはルイさんの護衛に残ってもらった。ヒールポーションの作り方をギルドに流すまでは用心するに越したことはない。作り方を独り占めしたい！  
つて奴に襲われる可能性があるからな。念のためだ。

「いいや。おそらく、ヒールポーションの販売を待ってるんじゃないか？」

「それはないだろ。昨日の食堂の10倍は人がいるし」

そもそも10本って言ったんだ。集まっても買えない。先に並んでる10人を除いて帰るのが普通だろう。

だが、いきなり周りを囲まれてしまう。

俺たちの話が聞こえたのか、それとも昨日の食堂にいたのか？

「頼む！ 娘が大怪我で寝込んでるんだ、このままじゃ死ぬかも知れない。助けてくれ！ 金貨5枚出す！ 俺に売ってくれ！」  
「いいや、俺に売ってくれ！ キュルボ退治なんだ。その薬があれば死なずにすむかも知れない！」

「俺の息子は歩けないんだ！ もう一度歩かしてやりたい。金なら出す！」

口々に訴えられる。

10本くらいじゃあ、全然足りないんだな……。だが今から大量生産するのはどうしようもなく目立つ。

取りあえず混乱を鎮めるために出てきたギルドの職員さんも巻き込んで緊急性の高い人、深刻だが急がない人、仕事に持って行きたいだけの人などに別れてもらう。

嘘が出ないように、娘が大怪我、とかは確認すると言っておいたので多分大丈夫だろう。

その結果急がないと命に関わるって人は思ったよりは少なく、5人ほどだった。

その人達を優先して薬を売る。値段は昨日決めたとおり。大金を積んででも欲しいって人はいたが、値段は一定にする。

その次は傷が悪化して危ないが一日も待てないという段階ではない人。

この人達の数が多く、30人近くいた。

この人達にはマイナーヒーelpションを売ることにした。少し数が足りないのは自分用の予備があったことにしてこっそり補充しておく。

ノーマルの方を薄めるだけだがその分安いことと、傷が軽くなれば命の危険はなくなるので明日明日後もポーションを売るのでそれを使えばいいと説明した。

マイナーヒーelpション2個で治れば、ノーマル1個より安いというのも説明したので納得してもらえたようだ。

苦しみが長引くのは辛いだろうが、ないものはないのだから無理も言いがたいというのも大きかったようだが。

あとの欠損部位の再生やモンスターの討伐なんかに行くひとは申し訳ないけど待つてもらおう。

緊急性の高い人を優先するのはしかたないよな？

納得しない人もいたがレバタさんが睨むと黙っていた。

なにげにすごい人だな、レバタさん。実はかなり有名なのかも知れない。

ついでに作成方法も教えるつもりがあることも説明する。いつまでも作製者が一人では俺が死んだらポーションの販売がなくなる、とか不安になるだろうし。

供給が確定してれば討伐に行かなきゃいけないとしても数日くらいは待てるだろう。

これは一人一人に教えてるときりがないのでギルドの方で教室を開催してもらえることになった。

授業料を取るのでギルドも儲けるつもりらしいけど、情報が公平に行き渡るのはいいことだよな。

俺にも技術提供料として金貨一枚くれた。金貨なんてはじめて見たよ。

ちなみに日本円で言うと100万円。まさに見たこともない大金だ。こっちでも金貨は大金だからか、特別扱いで小銅貨 銅貨って風に普通の貨幣は小さいのがあるのに金貨にはなく、代わりに大金貨がある。金貨に「小」をつけるのはいやだったのだろうか？ 単純に滅多に使わないからって理由かも知れないけど。

あとは力人の手首くらいの欠損は再生するけどもつと大きな部位は不明なこと、人間の欠損は治るかが解らないことはきっちり説明しておく。

クレームつけられたくないしね。

そしてギルドに力人で腕なんかの大きな欠損部位がある人に対して、ポーションの効果判別の手伝いをしてくれるよう依頼を出す。

報酬は腕の再生です、もちろん。浴びるほど飲んでもらうことになるかも知れないけど治るなら問題ないだろう。

治らなかつた場合は日当で100ルトということにしておいた。

同時募集で人間で欠損を抱えてる人も出そうかと思つたけどどんなポーションにすればいいのか思いつかなかつたのでそっちはまた今度にする。

命がかかつてるせいかみんな必死で。

たくさんの人が救えるのは嬉しかつたけれど。

本当はポーションだつてもっとたくさん作れたし、魔法で直接癒すことも出来る。

でもそれをやらないのは利用されたり自由を奪われたくないからだ。ポーションを買えない貧しい人や、普及するまでに死んでしまうであろう人がいるのを解っているのに。

全員を救えるほど、俺は立派な人間じゃない。

そんなことは解っていたが、それでも少しだけ、辛かつた。



## 販売（後書き）

ポーション販売についてしか語ってないような気がします。地味すぎる。

それでもやっとヒロイン登場へ向けて進みました。次か、その次にはたどり着けそうです。

## 義肢

大騒ぎに巻き込んでしまったギルドの人に改めてお礼をお詫びを言  
ってヒールポーションの販売を頼む。

手数料も所定の2割と言うことですんなり決まった。

ポーションの作成方法を教える話なんかもあったので、今回の騒動  
の分は所定の手数料で考えると4240ルトという大金になるとこ  
ろだが銀貨3枚の3000ルトにまけてもらえた。

それでも露店とかで勝手に売らないと約束することになったので、  
レバタさん曰くギルド的にはかなりの大儲けらしい。

独占禁止法とかはなさそうだもんね！。

俺が個人的に使う分や他の村や都で売る分には干渉しないってこと  
なので、こちらも手間が省けて助かる。

持ちつ持たれつってやつだな。

「レバタさん、なんか食って帰ろうぜ」

そろそろ空腹が限界だ。朝から大騒ぎだったもんね。

懐も温かいことだし、うまいものが食べたい。

モンスターの肉の値段でも解るが、うまいものはその分値が張る。

安いものもそれなりにうまいんだが、なんというかレベルが違うん  
だよな。

娯楽に溢れる世界じゃないからか食べ物種類の多さはかなりのも  
のがある。

食堂もその分多く、屋台っぽい店も軒を連ねてる。

レバタさんならうまい店を知っていそうだし。

「うむ。そうだな」

鷹揚に頷く姿も頼もしい。

楽しみだ！

レバタさんが選んだのは路地裏の小さな店だった。

そんなに繁盛してる感じもなく、教えてもらわなければまず来なかったような店だ。

「おつ、骨斧のレバタじゃないか。連れは見ない顔だが、パーティーは解散か？」

常連らしく店のおっちゃんに話しかけられてる。

「骨斧？」

武器っぽいけど骨の斧ってなんか脆そうだ。斧ってのは重さも武器になるだろうに骨は軽くないか？

「知らないのか？ 骨斧のレバタっていやあキュルボを一人で倒す豪傑じゃないか！」

ごめん、俺はキュルボも知らない。草原に出ないことだけは知ってるけど。あとで思い出そう。

でもレバタさんは本当に有名人だったらしい。

「レイシャードには来たばかりなんだよ」

そもそもこの世界に来てまだ一ヶ月程度だったりする。

密度が濃すぎて何年もいるような気分になってたけど。

「そうなのか。この街に来てそうそうに骨斧とお近づきになれるなんて運のいい兄ちゃんだな！」

………そんなに恐れ多い人だったのか。見る目が変わりそうだ。

「おやじ。適当に見繕ってくれ。ハヤト、酒は」

渋いな、レバタさん。これが大人の貫禄だろうか。

「飲めないんで、水で」

レバタさんはビールっぽいものを頼んでた。

麦酒って言ってたから多分ビールなんだろう。真っ黒で飲むのに勇気がいりそうな色なんだが。

魔法で水が作れるからか？ 果汁を混ぜた味付きの水とかは豊富な

のに酒がまずそうなんだよなー。

レンが飲んだのはワインくらいだったがえらく水っぽかった。

外国ではワインは子供でも水代わりに飲むってのを納得した。あれだけ水っぽかったらジュースと同じだろう。

こつちで見る酒はワインと麦酒くらいだから飲酒の楽しみはなさそうだ。

まあ、年齢足りないから当分飲まないが。

……お屠蘇で2日酔いくらいになるくらい弱いからではない、決して。ないったらない。

普通の屠蘇器に一杯だったのになあ……。

出された食事は平べったいパンで煮込み肉を挟んである豪快なものだった。

ハンバーガーの巨大版って感じだったが、煮込み肉が美味しい。

獣臭さも血生臭さもなく、とろっとした舌触りなのに噛み応えもある。肉の繊維が軟骨を長時間煮込んだような質感になってるといっか。

味自体はそんなに付いてないのに肉汁のうまみと微かな塩味で十分美味しい。噛めば噛むほど味が出てくるのに溶けて消えるようなのもつたないくらいだ。

一緒に煮込んである野菜はさっぱりしてるから肉の味が染みこんでるのにあっさり食べれて肉とは違う食感がいい。

アルゴルウグの肉も煮込みがうまいっていったが、あれより遥かに美味しい。癖になりそうだ。

パン自体は素朴としか言えないが、煮込み肉の邪魔をしないのがポイントなのだろう。

「ハヤトはこれからどうするつもりだ」

うっかり食事に夢中になってたのでレバタさんの話を聞き逃すところだった。

食事を待つてる間ずっと無言だったんでちょっと沈黙が痛かったんだが。

「んー。人間とか翼人に使える四肢再生用ポジションを作りたいんだけど。どうもうまくいきそうになくて悩んでる。なんかヒントない？」

「力人の儂に無茶をいう。ルイに相談した方がなんぼかましだろう。そりゃそうか。」

「そうするよ、ありがと」

「儂はもういい年だ。落ち着けば田舎に戻ろうと思ってる」  
せつかく知り合いになったのに残念だ。

せいぜいが壮年ってところなのにもう引退か。体力気力共に辛そうな仕事ではあるが、まだまだやれそうなのにな。

「もうお別れか。残念だけど、いい余生になるといいな」

ちよつとムツとされた。余生はさすがに早すぎたか？

「えーっと、第2の人生？」

「もういい」

気難しいな。脱サラはもっと違うだろうし。

だが、この世界ではじめて親しくなった人ところも早く別れることになるとは思わなかった。

この人達にもいろいろあつたんだろうな。仲間を亡くしたとかもいつてたし。

すでに別れる気になつてたら続きがあつた。

「儂の田舎は森が近くてな。モンスターがこのあたりより多くでる。

力人の多い里だがそれだけに魔人や人間が身体を不自由にしたら生きづらい。再生薬が出来たらどれだけ助かるか。……頼む」

他人のために俺みたいな若造にも頭を下げられるのが格好いいな。

「努力する。出来るだけ早く、形にするよ」

これがかんばらなきや男じゃないよな。

まだ全然思いつかないが、やれば出来る！ たぶん、きっと。

宿に戻ったらルイさんがノーマルヒーリングポーションを完成させてた。

魔力は残り少ないようで少しくったりしてたが。

ルイさんは華奢だが表情が結構きつめで怖い印象があるのだが、好奇心が強く意外と話が合う。

再生用ポーションについて二人で盛り上がってたらいつの間にか力人二人はどっかにいった。

つきあいきれなかったらしい。

「傷は薬草が効くんだから再生ならトカゲの丸焼きとか効きそうな気がするんだけどな」

「やめてください。鱗が生えたらどうするんですか」

「鱗人になるな」

「そついう問題じゃありません」

鱗が生えても四肢が再生するならそれはそれでいいような気がする。鱗人でも差別はないし。

でも途中で種族が変わるのはさすがに嫌なものかな？ 女の子とかは特に自分の美醜の基準は変えにくかるう。

でも本当に思いつかないんだよな。ルイは否定するだけで提案してくれないし。

じとーつとみてたら一緒に悩んでくれた。やっぱり意外とお人好しだ。

「そうですね、力人の髪とか爪とかではどうでしょう」

力人なら再生するもんな。

「それだと力人になるんじゃない？」

「筋肉が付いて困ることはないでしょう」

女の子は困りそうだけど。と言うか、爪とか髪の毛飲むのはちょっと抵抗がある。成分の濃縮抽出だけ。

そもそも再生するってのが意外性抜群すぎてうまく抽出出来そうに

ないのが問題なんだよな。

四肢を失ったらそもそも義足とか義手つけるくらいしか思いつかないし。

義手とか義足が元の手足みたいに不自由なく自分の意志で動けば便利だなーとは思っけど。

「あれ？ ポーションにこだわらなくてもいいのか」

「何か思いつきましたか」

身を乗り出して聞いてくれる。わくわくしてる感じが分かりやすいなー。

「義手をさあ、魔力使って身体に馴染ませて自分の意志で動くようにしたら良くない？ 痛覚とかはないだろうし最初は見た目も微妙かも知れないけど、本人の魔力でじわじわと身体の一部として馴染ませていけば再生したのと同じように出来るかも」

ルイは首を捻ってる。解りにくいかな？

「生えてこないから、接ぎ木して見ようって感じ？」

「簡単にいいますね」

呆れられたが、何事もやって見なきゃ解らない！

材料は普通の木とかじゃ身体に悪そうだよなー。何がいいだろう。身体に近そうなのだと肉とかだがそれもなんか怖いよな。

魔力だけで腕の模型というか素が出来れば一番いいんだけど。

人間の身体の大部分は水だっていうし水最強論もあることだし、水に魔力を通して腕の素になるようがんばって見よう！

一人でテンションを上げてたらルイに見捨てられてた。

いろいろと素材になりそうなものを紙に列挙してくれてたが、その優しさがかえって辛いのは何でだろう。

生暖かい視線で見るのはやめてください……マジでへこむ。





## 義肢（後書き）

ヒロインまで辿り着きませんでした…。

## 対面

ルイが考えてくれたのは木や金属で普通の義肢を作るという案だった。

中には陶器とか粘土とか、無理やりつばいものも混ぜってたが。

「身体と違いすぎたら馴染みにくいんじゃないか？」

金属とか、アレルギーが出そうで心配だし。

「そういうものですか？ 魔力で変質させるなら素材はなんでもいいのでは？」

「作りやすさ重視ならそれでもいいけど。でも変質させるにしても身体に近い方が魔力も少なくていいから楽だろ？」

そのためにヒールポーションも薬草使ってるわけだし。

「そんな法則があるんですか。魔力で何かを変質させるなんてのもポーションで初めて知ったくらいですよ」

そもそも発想からしてかなり場違いだったのか。だから今までなかったんだろうが。

「アイデアの勝利ってわけだ」

実際は違う世界から来た分、知ってるものや考え方が違ったわけだけど、言うわけにもいかないしな。

ルイ達にはばれても大丈夫かも知れないけど、よそに漏れたら変な目で見えるやつもいそうだし。怪しまれたり忌避されたりしたくないもんな。

今まではどうであれ、俺はこの世界の人間になったのだから。

「だからやっぱり水か肉だよな。肉は腐りそうだし、気持ち悪いから却下。水で決定！」

生理食塩水って水に塩混ぜればいいんだよな。確か1%より少し少ないくらいだったはず。砂糖と塩入れたらポカリだっけ？

水は一回沸騰させて殺菌させれば大丈夫なはず。あ、でも魔法で出した水は普通に飲めるんだから殺菌いらすか。便利だな、さすが魔法だ。

「何がだからなのかは解りませんが、水では義肢にならないのでは？」

「……液体だからね。凍らせるわけにもいかないし。」

でもそもそも義肢ってその人にあつたものじゃないとダメだよな。

普通なら成長期とかの間は汎用サイズで無理矢理使うつてのもありかも知れないが、今から作る予定なのは将来的に自分の身体の一部になるようにするわけだし。」

「魔力込めるときに粘性つけて固めれないかな？」

味もつけられるくらいだしやれば出来ると思う。」

イメージ的には水に粉状の魔力を練り込んで混ぜていく感じで。」

「どっからそんな奇想天外な発想が来るんですか？」

電波な人を見るような目で見られてしまった。」

俺からすると固定観念にとらわれてるだけじゃないかと思うんだけどな。」

「じゃあ、塩買ってくるな。何かいるものある？」

「なんで塩がいるのかは解りませんが、市場に行くのでしたら花茶をお願ひします」

生理食塩水とか知るわけないか。人間塩がないと生きてけない、汗とか乾くと塩が残るだろってことで納得してもらおう。」

ルイがいてくれるとこっちの常識的なことか違う意見が聞けて助かるけど、ちよつと心臓に悪いな。」

せつかく仲良くなったが俺が秘密を抱え続ける限りは、どうしようもないのかも知れない。」

市場で花茶と岩塩、ついでに果物などを買って宿に戻ると。揃いの胸当てとお仕着せっぽいサーコートと纏った騎士っぽい人が3人ほどいた。

彼らはルイと話してたのだがどうやら俺を待っていたようだ。

こちらの気付くと一斉に立ち上がったあつという間に囲まれてしまった。

武器を向けるわけでもないし、ルイも平然としてるから悪いことではないのだろうが……。

「ハヤト様でしょうか」

騎士っぽい人に様付けで呼ばれる覚えはないぞ？

レイの件での追っ手でないのは確かっぽいので一安心だが。

「はぁ……」

反応に困るな。何事だろう。

「この度のポーションの件で領主様がお会いしたいとのことですが身内に怪我人でもいるのか？ 権力を笠に買い取るうにも明日にならないとギルドにも納品されないからなあ。

作製者から買い取るうってことか？ 午前中に売り出して、昼は回ったとはいえまだ夕方にもなっていないのになぜいぶん行動の早いお偉いさんだなあ。

権力があるから特別扱いというのは正直、あんまりいい気はしないが断るのも後々睨まれそうだしここは素直について行くしかないだろう。

「わかりました。ええっと。服とかはこのままでもいいんでしょうか」

「構いません。ご同行願います」

先導されて後ろも固められると連行されてるみたいで微妙だなー。周りの人にも注目されて悪目立しまくり。変な噂が立たないといいが。

ルイは一緒に来てくれないようなので花茶だけ渡しておく。

花茶つて精神を安定させる効果があるハーブテイみたいなものなんだが。飲んで1時間くらいの間はリラックスしてればって条件付きとはいえ、寝なくても魔力が少し回復するって素敵効果があるだけに結構高いんだよなー。  
今度ちよつと飲んでみよう。なんだか美味しそうだ。

そんなことを考えているうちに広場を抜けたところに用意されていた立派な馬車に乗せられていた。

貴族なんかが住む高級住宅地は東側の丘になってるところにあつてその中でも位が高いほど高い場所に住むようになる。

領主ともなると当然一番高いところに住むわけで、歩いてると日が暮れるのでわざわざ用意してくれたらしい。

そこで荷馬車とかじゃなくこんな立派な馬車を用意してくれるのだからよほどポーションが欲しいのかも知れないな。

でも丁寧に扱われて悪い気はしない。これで食事とかでたら最高なんだけどなー。

結局貴族様の食事つてのを見る機会はなかったわけだし。これからもなさそうだし。

連れて行かれたのは立派な城館だった。さすが領主の館。

庭も広くて公園ですか？つて聞きたくなるレベルだったし、館の中も床まで美しく磨かれている。汚れた靴で歩くのはかなり勇気がいるな。

空、飛べるように練習しておくべきだったか？

目立ちすぎるだろうから出来ないけどさー。

本当に場違いすぎて困る。その辺の使用人よりみすばらしい格好だつてのが良く分るんだよ。

破れたりつぎはぎがあるってわけじゃないし汚いわけでもないとは思うんだが、布の粗末さがここまで分りやすいものだとは知らなかった。

今は懐に余裕もあるし、早急にもっとマシな服を用意しよう。

別に高級な服を着たいわけではないんだが、今まで一般人として普通に生きてた身としては普通よりみすばらしい、つてのは結構辛い。一億総中流とかいう自覚を持つ国民性だ。成金っぽく着飾るのも貧民に見られるのも落ち着かないし、嫌だ。

内心かなり落ち込んできたが先導の騎士さんは平然と進んでいくし、逃げれそうにない。

このまま領主さんに会うのは遠慮したい気分なんだがそういうわけにもいかないだろうしなー。

謁見〜とかつて大広間にでも通されるのかと思っただが、そうではないらしく。

重厚感溢れる立派な扉の、だが周りのドアの間隔から言って普通サイズの部屋に案内された。

「エクタード様、ポーシヨンの作製者ハヤト殿をお連れしました」  
エクタードつてのが俺を呼んだ人らしい。領主さんでいいのかな？  
見事な青い髪で40代だろうか。若くはないがまだまだ現役っぽい。体格も風貌もいい。

これで有能だつていうんだから天は二物も三物も与えたのだろう。

「ああ。急に呼びたててすまない。楽にしてくれたまえ」  
手振りだけで騎士を下がらせてしまう。

あとは執事っぽい雰囲気の人がいるだけだ。緊張しなくてすむので俺としてはありがたい。

「はい。お呼びださそうですが、どのようなご用件でしょうか」  
あー。執事さんがびくってなってる。どうも俺の口の利き方が気に入らないらしい。

これでも精一杯がんばって丁寧に喋ってるのに。

美辞麗句とかは期待しないでくれ、レンなら言えるかも知れないが俺はそんなスキルは持ってない。

幸い領主さんの方は気にしてないみたいだ。最初から期待してないだけかも知れないが。

「君が作ったポーシヨンとか言う薬のおかげで明日をも知れぬ重傷者が立つて歩けるようになったと言うではないか。この地を治める者として偉大な薬の作製者に礼をしたい」

言葉の割りにその鋭い視線はなんなんだろうね？ 値踏みされてるとしか思えないぞ。

「薬代は頂いていますので」

正直関わり合いにならないでくれるのが一番助かる。

利用されるのは嫌なんだ。最悪この街からも逃亡かもなー。

「欲のないことだ。望むなら功績を称え貴族に取り立ててもいいがそんなに簡単に貴族になれるのか？ 興味ないけど。あ、食事内容にはちょっと未練があるが。でもそれも厄介ごとになりそうなら即あきらめれる程度だ。」

「まだまだ若輩者に過ぎないこの身には過ぎるお言葉です」

舌を噛みそうだ。これで断ってるって通じるか？

「力人でもそれなりに時間がかかるはずの手首の再生を者の数秒で成すほどの薬を作れる人間はそうはいまい」

どこまで調べてるんだろうな、この短時間で。有能だっていうのは掛け値なしに本当の話らしい。

来る街の選択を間違った気がしてきた。繁栄してるような場所じゃなくてももっとごたごたしてそうなところにするべきだったか？

それはそれで厄介ごとに巻き込まれそうだが。

「ギルドで売りに出された薬では力人以外では四肢の再生は叶わないという話だが、人間やその他の種族に効く薬はあるのかね？」

売りに出した時点では力人以外は不明って話だったのに無理って判明してるのか。作成者より情報が早いつてどういうことだ。有能すぎるだろう。

「現在開発中です。効果を試すことが出来ないのではなかなか難しいかと思えます」

成果を脅して手に入れようとかいうつもりはないようだが、薬が欲しいなら手伝ってくれてもいいんじゃないかな？

その方が早くできるし俺も助かる。

領民の為っていうのももちろんあるのだろうけど、どうも個人的にも再生薬が欲しそうな雰囲気だしな。

この人自身の為でないならやっぱり身内のためなのか？

「遠縁の娘が、事故で両足を失っている。薬の作成に対して私の名で援助しようではないか。期待している」

その娘さんが実験につきあってくれるわけじゃなくて、他の平民で実験するように援助してくれるってことか。

それがこの人達の当たり前なのだろうが、リスクは平民に負わせて成果だけ要求するってのはあんまりいい気分じゃないな。

「ありがたい話ですが成功するかも分らない段階の話ですので、援助は遠慮させていただきます。幸いヒーリングポジションのおかげで研究は可能ですから」

だから優先してその娘さんに成果を回すことはしない。

別に助けたくないわけじゃない。義肢がうまくできればそのうち手に入るだろう。

でも、一番最初に手に入れるのは実験につきあってでも四肢を取り戻したいと思うくらい、求めている人であるべきだろう。

完成してしまえばその娘さんは権力を使ってすぐにでも手に入れるんだし。

俺の気持ち伝わってしまったのだろう。執事さんはものすごい目で睨んでくる。

だが、領主さんは苦笑いしている。意外な反応だ。

「事故が元で人前に出ることを嫌がるのだよ。だが、君なら治せるかもしれないな。頼めるだろうか」

事情があつたらしい。勝手に勘違いして反発してれば執事さんの反



応も当然か。ごめんなさい。

うーん、権力者に過剰反応してる気がする。

これまでの人生で関わったお偉いさんって「あの女」くらいだもんな。色眼鏡で見てたのかも知れない。

先入観に捕らわれてたらろくなことにはならないだろう。気をつけないと。

「すみませんでした。治せるかは分かりませんが、出来る限り力になりたいと思います」

疑ったお詫びも込めて。娘さんが人前に出たくないっていうなら傷跡が残ってるのかか？

美容液強化バージョンとか作れば綺麗に出来そうだし。

今度は執事さんに案内して貰って移動する。

この執事さんはさつき睨んでた人なのでちょっと怖い。

謝ったんだが、怖い笑顔でスルーされた。

謝ることなんてないっていつてくれたんだけどね？

謝っても許さないって二重音声で聞こえた気がした。

何となくこのまま人気のない場所に案内されて闇に葬られそうだなーとか思ったのだが、そんなことはなく。

遠縁の娘さんとやらの病室まで案内してもらえた。

……娘さんが治るまでの命だつてことはない、よな？

執事さんは領主様至上主義っぱいからな！

領主さんが気にしてる娘さんを治したらさっきの無礼は相殺して忘れてくれるのを祈ろう。

病室らしく、白が目に付く部屋に着いた。

窓に掛かるカーテンはレースがたっぷり使われているしベッドは天蓋付き。

どこまでも少女趣味全開の部屋だな。それなのに色がどこまでも白いうえに、微かに残る奇妙な草の匂いが病室っぽさを助長させているけど。

広いベッド少女が横たわってるけど、健康的とはお世辞にも言えないな。

これが遠縁の娘さんなのだろう。

身体のサイズに比べて、掛布の下のふくらみは明らかに短い。

両足を失ってるっていつてたが、痛々しいなあ。

顔の右半分にも無残な火傷の跡が残ってるし。左は普通だから余計にひどく感じてしまう。

顔を見られるのが嫌なのだろうな、泣きそうな顔で俯いてしまった。これは辛いだろうな、早く治してあげたい。

でも現在めっちゃ睨まれています。。

ベッドの上の子を庇うみたいなの位置でこっちを睨んでるのは見たこともないくらい綺麗な子だ。

艶やかな栗色の髪に翡翠色の瞳。肌は雪のように白いが頬はバラ色で健康的。

俺の乏しい語彙では解説なんて出来ないくらい、本当に綺麗な。

人形みたいな綺麗さではなくて生きてる人間らしい生気に満ちた綺麗さなのが俺的にポイントだ。

睨まれてるのにまつげの長さに感心してじっくり眺めてしまう。

マッチ棒が乗りそうな長さで濃さって本当にあるんだな！。

3本くらいいけそうな気がする。

「あなたがセレスを治せるって人？ 本当なの？」

うわ、声も可愛らしいな。ちょっと高めだけど。

遠縁の娘さんはセレスか。

緑がかかった青色の髪と同じ色の瞳の娘さんだ。

二人とも俺とそう変わらない年に見える。

「やってみないと分らないけど顔の傷を消す薬は明日にでも試作品を作ってくるよ」

足も治してあげたいが、成功するかどうかが変わらないし。出来そうなところからやってみよう。

年頃の娘さんだから顔に傷があるのは辛いだろうし。

「俺は隼人。君は？」

「アナスタシア・レイシャードよ。本当にセレスを治してくれるの？」

いい名前だ。確かどっかの皇女にそんな名前の人がいた気がする。

高貴な名前なのか？

都の名前が名字ってことは領主の娘さんっぽいしな。

「きつと。約束するよ」

そういった俺にやっと思わせてくれた笑顔は。

花よりも可憐で、愛らしかった。

## 対面（後書き）

やっとヒロインの登場です。

生理食塩水の塩分は大体0.9%です。

ポカリスエットも塩と砂糖だけでは、当然ですが作れません。主人公はあまり詳しくありません。ご了承ください。

仲間（前書き）

なぜかいきなり読んでくださる方が増えて  
嬉しいやら恐れ多いやらでわたわたしています。  
足を運んでくださった皆様、ありがとうございます。

## 仲間

もう一度買い物をする必要が出来たので日が暮れるまえに帰らなければ。明日の昼頃に試作品を作って持ってくる約束し、城館をでる。

アナスタシアがそんな短時間で出来るのかと訝しんでいたが、実物を見れば納得するだろう。

セレスの方は俯いたまま何も言わなかったが、顔の傷が癒えれば話くらいは出来るかな？

帰りも馬車で送ってくれたし、明日も迎えに来てくれるようだ。

もつとも、馬車で露店の多い広場は抜けにくいので今日馬車が止まっていた場所での待ち合わせになったが。

広場の露店の品揃えは多彩で安いのが特徴だ。いろんなところから来る行商人が一時的に店を出すらしい。日用品の類は広場への道に連なる商店を利用することになる。食べ物や屋台も多いが、軽食がメインだ。座る席がほとんどないから本格的な食事には向いてない。

そして、ここで問題だ。

化粧品ってどこで売ってるんだ？

当たり前だが化粧なんてしたことがない。日本ならコンビニかデパートにでも行けば売ってるだろうと分るが、こちらでは思いつかない。

当然ではあるがレンの夢でも見た覚えがないしそこまで細かい話になると世界の記憶を探索しても思い出せないようだ。

その辺を歩く女性に聞く手もあるかも知れないが、突然見ず知らずの男が化粧品はどこで売ってるか、なんて聞いてきたら普通は驚く。そして女装趣味でもあるのかと思われそうだ。誤解されても困りはしないが、いい気はしない。

うーん、しばらく見て回って見つからなかったら水から製造しよう。どこまでも万能だな、水。このまま全部水ですましてもいい気がする。

結局化粧水も美容液も見つからなかった。美白とかには縁のなさそうな世界だしなあ。

代わりと言うわけではないが、ちょっと高級そうな瓶（実際に高かった）を買っておく。領主さんの遠縁の娘さんに薬瓶とはいえ最安値の素っ気ない瓶で渡すより綺麗なものに入れて渡す方がいいだろう。

さらに鏡が銅鏡っていうのかな？ 金属板を磨いただけの物だったので作ることにする。ガラス板に銀を塗ればいいはずなので銀の小さい固まりと、ガラス板の代わりにガラスっぽい小瓶を買っておく。

遠足で魔法瓶を壊した時の経験がこんなところで生きるとは思わなかった。

水筒の中になんで鏡が入ってるのか疑問に思って調べたんだよな。疑問ってか、水筒の中が割れてるのに気付かずに中身を含んで口の中大惨事になった恨みだった気もするが。

おかげで魔法瓶の仕組みも何となく分るので魔法と合わせると作れそうな気がする。使い道がなさそうだから作らないけど。

鏡は傷が綺麗に治ったことをはっきり見せてあげるのに必要だな。

自分の目ではっきり確認できれば人前に出るのを嫌がることもなくなるだろう。

顔の傷って女の子にとってはかなり重要なことだろうからな、できるだけ完璧に治してあげたい。心の傷も含めて。

あとは着替えや靴なども買い換えたかったが日が暮れてしまい、店じまいが始まったのでまた明日にする。約束は昼からだから間に合うだろう。

宿に戻るとルイ達が待つていた。食事をしながらだったが。

「ただいまー」

一緒にテーブルに着き、大皿の料理を分けて貰う。

「おう。どうだ、領主様は立派な方だったろう」

この都出身だというガルドさんは街の繁栄をとそれを導いた領主様を自慢にしているらしい。

確かに情報の早さや行動力はすごいな。災害時の対応とかもこの通りだったら領民からはありがたい領主様だ。

得體も知れない、この都に来たばかりの人間に会うのはかなり無謀な気がするけどな。

執事さんが護衛を兼ねてて、さらに領主さん自身も腕に覚えがあったのかも知れないが。

「そうだな。で、依頼で義肢頼まれたからしばらく通うことになったんだよ。ポーシヨンの件も落ち着いたし、護衛はもういいと思う。すぐ助かった。ありがとう」

短い間だったけど、よくしてもらった。ちょっと寂しいが、彼らにも彼らの生活があるんだ。いつまでも拘束できない。

「そうですね、私たちの方こそガルドの件やポーシヨンの作成方法などいろいろのお世話になりました」

「半年は働けないところだったんだ、本当に助かった。ありがとうよ」

「……ああ」  
レバタさんは相変わらず無口だ。昼に田舎に帰るって話を聞いて、寂しくなるなーってしんみりしてたのにその夜に別れを切り出すとか俺もなんか生き急いでる気がするな。あつという間に状況が変わっていく。

落ち着いたら、って話だったけどどうするんだろうな。



あ、でもレバタさんが抜けるってことはこの3人のパーティは解散なんだろうか。

レバタさんが田舎に帰るって話をすでに話してあるのかが分らないから聞かない方がいいか？ もしまだ話してなかったら余計な火種を作ることになりかねない。

それにしても、これでお別れだったの2人はにしんみりするどころか楽しそうだ。短いつきあいとはいえそれなりに仲良くなれたと思っただのは俺だけだったらしい。レバタさんは良く分らないし。

「依頼も終わったことですし、改めて。ハヤト、私たちと組みませんか？」

は？

「俺とレバタが前衛でルイとハヤトが後衛。バランスは悪くないだろう」

えーっと。

「レバタさん、落ち着いたら田舎に帰るんじゃないんですか？」

言わないつもりだったがこれは確認しなきゃいけないよな？

「落ち着いたらな」

依頼が終わったこの時点で落ち着いてないって言うならいつ落ち着くんか？

「ああ、レバタのそれはもう口癖みたいな物ですからね。気にしないでいいですよ」

あんなにシリアスな場面だったのに。さすがにあの態度とか想いは嘘ではないんだろうが、俺の感動を返してくれ。

でも誘ってくれるのは正直すごく嬉しい。だが、いろいろと作ったりしたいし、そうすると一緒に仕事を受けるのは難しそうだ。

「誘ってくれるのは嬉しいけど、義肢とかいろいろ作りたいから仕事は受けられそうにないんだ」

気の合う仲間と旅をするのは楽しいだうし、彼らが仕事に行ったらいくらポーションを持ってても怪我とか心配になりそうだ。でも薬を作ったり便利そうなアイテムを作るってのも捨てがたい。

何も無いときならそれでもきつと一緒にいったらうけど、今はセレスの治療も頼まれてるし。残念だけど……。

「ああ、説明が足りませんでしたね。一緒に仕事を受ける必要はあまりないです」

「じゃあなんでパーティなんだ？」

一緒に仕事をしないならただの友人ってことでいいと思うんだけど。「パーティを組んでいけば宿やギルドでも割引があります。何より、何かあったときにパーティメンバーが黙っていないってことでもありますからね。厄介ごとに巻き込まれにくくなりますよ」

それなりの知名度があるパーティなら、その一員に手を出す馬鹿は少ないってことらしい。

なんかやくざとかマフィアの一員っぽいな。

でもそれで利があるのって俺だけじゃないか？ 損になることは何もないようだし、助かることもあるだろうが助けてもらうばっかりじゃ申し訳ないぞ。

「俺も3人が何か困ってたら助けようとは思っけどさ。仕事も一緒に行けないのにそこまでよくしてもらうのはなあ」

そもそも利がなくても友人が困ってたら助けるし。

「あつて困る名前じゃないぞ、いいじゃないか！」

ガルドさんは酒が入ったせいか陽気だな。そう軽く言われると深く考えなくていい気がしてくる。

「こちらも有名なポーシオン作製者が仲間となれば信用度が違ってくる。お互い、助かることはあつても負になることはないでしょう」

昼の食堂の親父を見るに、レバタさんがいれば信用度はかなり高いだろうに。俺に気を遣わせないように言ってくれているのだろう。不利益はなくても、利益もない。それなのに誘ってくれる優しさが嬉しい。

「じゃあ、遠慮なく入れてもらおう。これからも、よろしく」

「おう！ 骨斧によろこそ！」

杯を合わせて乾杯する。俺は果汁水だけ。

これからは「骨斧」の一員だ。基本別行動なのがなんだが、所属があるというのはいいな！

ところで骨斧ってどういう意味なんだろう。ただのパーティ名なのか？ 地味に気になってるんだが、また聞きそびれてしまった。

思う存分飲み食いして部屋に戻る。

このまま寝てしまえば最高の気分なだけだなー。明日の約束もあるので薬を作ってみよう。

あ、ギルドで売る分のポーシオンも用意しないと。

ポーシオンはいつものだからいいとして、傷跡が綺麗さっぱり消えるってのは新陳代謝がめいっぱい活性化してれば大丈夫そうかなー？

コマーシャルとかでよくやってる化粧水とか乳液とか、パックとかその手のものを強力にすると効きそうな気がする。

色は化粧水のイメージで透明かな。あれ、白いつけ？ 良く分らないからクリーム状にして白でいっか。軟膏的なイメージもあるからその方が分かりやすい。

「皮膚の再生、シミ、そばかす、さらにはどんな傷跡でも綺麗に消える新世代のパックです」

なぜかパックになったが気にしない。塗って乾いて剥がしたらそこには綺麗な素肌が！ というイメージのせいだ。

幸いというかなんというか、ポーシオンを試してたときにうっかり深くやり過ぎた傷が残ってたのでそこに塗ってみる。すぐに治癒したせいかひどい傷跡ではないのだが、試すにはちょうどいいだろう。

塗ってみる。べたべた。乾いたら剥がせばいいのだが。

これ、気になるなー。じっと見ているとなかなか乾かない。端の方をつついてしまう。

少し剥がれたかと思ったら生乾きのせいで剥がれず切れてしまった。

うずうず。きーにーなーるー。

一人悶々としながら素数を数えてみたり九九を唱えてみたりして時間をやり過ごす。円周率は $3.14159$ までしか覚えてない。いつそ計算してみようかと思ったら計算式が思い出せなかったので悩んでたらその間に乾いたので結果オーライか？

無駄に疲れつつ、パツクを剥がしてみる。さんざんつついたが、傷は綺麗に消えてたので多分成功だろう。よかったよかった。

これ、呪文から考えるにシミそばかすにも効くだろうから女性には需要があるかも知れないな。

当分は傷跡とかの深刻な状態に使うの分を作るだけで精一杯だろうけど、傷跡消しの需要がなくなってお金に困ったら考えよう。

あとは鏡か。

こっちは作り方が分ってるので気楽だ。

ガラスっぽい瓶を魔力で適当に砕いて平面になるように並べて再連結。板ガラスにする。

そしてその上に魔力で溶かした銀を薄く塗る。スティック糊みたいなイメージで筒状にした銀を持って塗りつけるだけ。ガラスに触れた面が溶けて、塗れるようになっている。

あつという間に完成。カップラーメンより手軽だ。

出来を確かめるために手に取ったら側面のガラス部分で指をざっくり切った。

……そうだな、枠に入っていないとそうなるな。

遠い目をしつつ、残ってた銀で枠を作ってくつつける。蔦のよう

にして縁取ってみた。美的センスはあまりないがそれなりにうまくできたと思う。

もうポジションを作るのも面倒だったのでさっさと魔法で怪我を治して寝ることにする。

最近一日が濃いよなあ。

## 仲間（後書き）

魔法瓶の話は実話です。

破片でざりざりいってたのに、氷を入れてたので氷が砕けただけだ  
と、思って口に入れた馬鹿です。  
飲み込まなくて良かった……。

## 治癒（前書き）

どんどんアクセス数が増えて驚いています。  
つたない話ではありますが、どうぞよろしくお願いします。

## 治癒

そういえば、昨夜は警報をかけ忘れて寝たな。

気持ちよく寝てたのに、誰かにたたき起こされて。起きて最初に思ったのはそんなことだった。

現在、首に剣を突きつけられた上で脅されてる。見知らぬ覆面の2人組に。

「おい、ぼけつとしてないで答えろ！ 二目と見られない顔になりたいのか！？」

小声で怒鳴るといふなかなか器用な芸を見せてくれる。

お金は細かいのが多くなり意外と重かったので収納袋に入れておいたのだが、そのせいで発見できないようだ。

収納袋はどうみても何も入ってないもんなー。開けても使い方も分らないだろうし。取り出したいものを思いながら手をつ込むだけなんだけど。

「おまえを殺してから家捜ししてもいいんだぞ！」

寝起きでぼーっとしてた頭が覚醒してきた。もしかしなくてもやばいな、これ。

今更ながらに恐怖が襲ってくる。強盗にはいられたのか。しかも俺の反応があまりに鈍いからだろう、かなりキレてる。

魔法で迎撃するにもやり過ぎたら人殺しだ。かといって多少の傷だと逆上して俺がやられるだろう。

モンスター相手では感じなかった死の恐怖。

そして、人を傷つけることへの抵抗。

仕方ない、か。相手がいらいらしてるのが分る。そろそろ限界だろう。

「スタンガン」

電流を流すイメージで魔法を使う。スタンガンなんてみたこともないが気絶するレベルを思い浮かべて二人いっぺんに撃つ。



「ぎゃあああ！」

あれ？ スタンガンって撃つものだったっけ？

銃の弾丸が気絶させる電流の固まりってイメージで使ってしまったが、よく考えたらスタンガンって人に押しつけて使うものだった気がしてきた。

さすが魔法、イメージさえあれば間違っても発動するのな。助かった。

うまく気絶してくれたようだが、いつ起き出すか分からないので縛っておくべきだろう。

でもさすがに縄もないし、そもそも縛るとかいう特殊技能っぽい技は持っていない。ぐるぐる巻きくらいは出来るだろうけど。

縄跳びの紐で縛ったり縛られた経験もあるが、縛ってもすぐ外せるんだよな。外しにくく縛れるやつがいつもケイドロの警察役で、そいつに捕まると大変だったっけ。あいつならうまく縛ってくれるかも知れないが、俺は下手だったのでやるだけ無駄だろう。

悩んだが魔法で水を出し、それで両足両手をひとまとめに固めておく。凍傷になったら可哀想なので、氷漬けではなくコンクリートをイメージして固めてやったけど。強度もコンクリ並みのはずなので壊せまい。

「ハヤト、大丈夫か!？」

ドアを蹴破るようにしてレバタさんとルイが駆け込んでくる。

さっきの強盗の叫び声で気付いてくれたのか？

「ああ、俺は大丈夫。騒がしてごめん」

夜中に、近所迷惑だったな。

「無事ならいいが、賊か？」

転がってる二人の処遇に悩んでたのでちょうどいいところに来てくれた。

「ああ。これ、どうすればいい？ どっかに突き出すのか？」

「衛視の詰め所に連れて行くのが普通ですが、ハヤトの国では違っ

たんですか？」

それが普通か。こっちの警察みたいなもん？

「あー、小さい村だったからさ。強盗とかはじめて見た」  
「なるほど」

「こつちの犯罪って大都市特有だよな。田舎のよそ者の少なさとよそ者に対する警戒は半端じゃない。」

「そもそも襲つても実入りがないから襲わないってのも大きいだろうけど。」

「それにしても、どんな魔法ですか、これ」

「ルイがコンクリを眺めてる。いきなりこんなもんが出てきてたらびっくりだよな。」

「うーん、説明に困る。正直に説明してもいいか？」

「暴れないように固定しようと思っただけ」

「どつちの発想でこつちがなかったのか詳しく聞きたいですが、聞くだけ無駄っぽいですね」

「根本的な発想が違うもんなー。なんか俺の評価が電波で奇想天外な変人になってそう怖い。」

「呆れてはいるみたいけど、化け物扱いじゃないからいつか。」

「ところでガルドさんはどうしてるんだろう？ あれだけ飲んでたから起きられなかったのかな。」

「その後気絶したままの2人を監視のところに運ぶのに無駄に苦労した。」

「変な固定の仕方だったんで引きずるに引きずれないから台車借りて乗せてったんだが、途中で固定方法変えればいいことに気付いてさらに疲れた。」

「監視にもいろいろ聞かれるので、散々だった。レバタさんがいてくれた分簡単な聞き取りですんだみたいだからマシなんだろうけど。ポーシヨンの件で稼いでるのに普通の宿にいるから狙われたらしい。もつと警備のしつかりした宿に移れて紹介までされたよ。」

そういう店って高いんだろーな。ここに長居するならいつそ家借りた方が安いかも知れない。ちよつと考えてみよう。

「レバタさん、夜中につきあってくれてありがとう」

「気にするな」

いや、普通気にしますつて。今度晩飯くらい奢ろう。あ、でも。

「宿変えたら顔合わせなくなりそうだよな。どうしたもんか」

まあ、レバタさん達が仕事にでたらどっちみち会わなくなりそうだけど。

「仕方あるまい。なに、ギルドに伝言を入れておけばどこにいても分る」

パーティ向けのサービスなのか。拠点借りるならギルドを通せば多少割引してもらえらつてことだし、借りようかなー。

荷物も増えるだろうし……でもいつまで滞在するか決まつてないからな。すぐ出て行く気はないけど。

考えには入れておこうか。値段次第つて気もするし。

結局その後ほとんど寝られないまま、夜が明けてしまった。

朝食にパンとスープを軽く食べてギルドにポジションを納め、昨日買いそびれた服と靴を買いに行く。

露店では今の服より良さそうな物がなかったので、服屋を探す。

総合店なんてないから欲しい物を扱つてる店を探すのが大変だ。

今までで一番品揃えが良かったのが雑貨店つて時点で大変さが分ると思う。

専門で売るほどでもない小物は雑貨店で何とか見つかるんだが、それ以外になるといちいち専門の店がある。

靴屋に服屋。この辺はまだ分るけど下着屋も別で手袋の専門店まであった。果物屋と八百屋まで別で、肉屋に干物メインだったけど魚屋、乾物屋と言つべきなのかも知れないけどドライフルーツ専門

店まで発見したよ……。

さらに武器屋があるのに包丁屋があった。研ぎ直しもやってたけど。刃渡り30センチ以上はありそうな包丁とか、武器屋で扱ってもいいんじゃないかと問い詰めたかった。聞かなかったけど。

そんなわけでやっと服を扱ってる店を見つけたころにはだいぶ時間が出た。

大体、服屋自体も本当は布を買って仕立てて貰うものらしい。

服の形で売ってるのは古着だからぼろくなってる物が多い。

今着てる麻っぽい素材の服は丈夫そうだし、厚みの割りに涼しくて気に入ってたんだがやっぱり着古してる感があるし、こっちは安物の服としてみられるのが残念だ。実際、服の中では格段に安いんだけどな。

一般家庭では綿、それ以上なら絹というのが一般で冒険者なら皮素材、それもモンスターの皮素材を使うのが当然らしい。革ジャンとかか？

そういえばガルドさんやレバタさんも革ジャンだったな。力人が革好きなのかと思ってたよ。ルイは綿メインだったし。

そんなわけで、魔術師っぽさを追求して綿の上下と絹のローブっぽいものを羽織ってみた。仕立ててもらうのはまた今度にするとして、今はまた古着だけどイメージにある物があった良かった。

魔術師っぽさといっても冒険者と一般人の違い自体が革素材多めってのと武装くらいだから、魔法使いとの違いはほとんどないとは思っ。

でも、俺は魔術師って名乗ろうかと思うんだよ。使う魔法が普通の魔法使いとは違う理由に出来そうだから。

魔法はまれに触媒を必要とすることもあるが、基本は明確なイメージとそれを作るための長い呪文、精神統一で発動する。あ、魔力も消費するけど。

だから素になる品が必要な俺が作るポーションとかの物は魔法で作り出すのではなく、全部魔術ですと言っておけば新しい術として

認識してもらえらるだろう。

そうすれば新しい魔法として認識されて、今までの常識を壊すと思われるより多少はマシなはず。

魔法じゃなく、別の触媒を多用する別の術。そういっておけば今までの魔法使いのプライドも刺激しないと思うし。

詭弁っぽいけど「規格外の魔法使い」よりはレアスキル「魔術師」のほうが納得されやすいだろう。

何もなくても巨大な魔法が使えます、って言うより巨大な魔法っぽい物が使えますが、触媒がいります。の方がまだ怖がられにくいと思う。

どっちにしる名乗るのが俺だけとかなり寒いことになるが……ポーション作りとか普及していけば既存の魔法使いと物作りの魔術師とでやっていけるんじゃないかな？ 同じ部で違うことをやってれば争いごとが多くなるけど別々ならそんなに気にならない。そういうもんだし。

そんなわけで今日から「魔術師・ハヤト」……あう。自分で名乗るはかなり恥ずかしいな。

使ってる魔法について聞かれたりしたら魔法じゃなく、魔術って訂正するくらいにしておこう……。

着替えて待ち合わせのところにいくと、すでに馬車が待っていた。待たせるつもりはなかったのだが時間区分が2時間おきに鳴る鐘くらいしかないからなあ。細かい時間が分らないから早めに来てくれてたのだろう。昼の鐘がなっていないから遅刻ではない、うん。

相変わらず豪華な馬車で騎士っぽい人もいてVIP待遇っぽさが醸し出されている。

歩くのは辛そうな距離だからいいんだけど、馬車の中で騎士っぽい人に囲まれてると結構気詰まりだ。

無駄話の一切もないとか、見上げた真面目さだけど俺的にはフレ

ンドリーに接して欲しい。

話しかけるきっかけもないので黙ってるヘタレですけどね。

いっそ人間以外の種族なら鱗とか翼が観察できて良かったのに。

毛皮も一度触ってみたい。

翼が抜けないかとか鱗は生え替わるのだろうかとかかどうでもいい疑問を考えてるうちに城館に着いた。

帰り道はいっそポーションでも作ってようか。時間がもったいない。

昨日の病室には今日も女の子2人がいた。

執事さんはいなかったが、迎えに来てくれた騎士がそのまま部屋の隅に立っている。

微妙に信用されてないらしい。まあ、いいけど。

「取りあえず、顔の傷跡から消そうと思って用意したんだけど」

昨日作ったパック入りの瓶と鏡を傷のある女の子、セレスだった

っけ？ その子に渡す。

「これは……？ ……っ」

鏡を見て辛そうに俯かれました。傷跡を直視してしまつてショックなのだろう。

アナスタシアが慌てて慰めてる。傷が消えてから渡すべきだったか？

「大丈夫よ、治すための薬を作ってくれたんだから！ 元通りになるわ」

「でも、こんな酷い傷なのに……」

「昨日試してみたけど、大丈夫だと思う。な、試してみてくださいませんか？」

傷が消えれば悲しむ必要もないんだし、さっさと治してしまおう。泣いてるわけではないが、悲しそうな顔をされる方がよほど心に痛

い。

セレスを慰めてるアナスタシアが美人なだけに対比で余計に傷が酷く思えるし。

「そっちの瓶のクリームを塗って、乾いたら剥がせばいいだけだから」

ほつとくといつまでも進まない気がしたので瓶を取り、塗っている。勝手に女の子の顔に触るのはちよつと躊躇ったが、医者に触られるような物だと思って我慢してもらおう。

「乾くまでちよつと時間がかかるけど」

どれくらいか厚みで塗ればいいのか分らなかったのでちよつと厚めに塗ったしな。

「でもこんなにはつきり映る鏡なんてはじめて見たわ。どこで手に入るの？」

乾くまでの時間をもてあましたのか、アナスタシアが鏡に興味を持ったらしい。

美的センスがないなりに装飾もしてあるし、どこかの特産品だと思ってるのか？

「傷跡がなくなったのを確認しやすいようにと思って作ってみたんだよ。セレスにプレゼント」

2人とも目を丸くしてる。なんか変なことをいったか？

「作ったって、ご自分ですか？ でも……こんな高価な物を頂くわけにはいきません……」

安いわけではないけど、そこまで高いわけでもない。自作だからな。

「気にしなくていい」

「でも……」

困ったように俯かれました。俯いてるとか悲しんでる顔しか見てないな。悪いことをしてるみたいだ。

「綺麗ね、私も欲しいな」

女の子2人のところにひとつだけってのはまずかったか？ 今度

から気をつけよう。

「ああ、すまない。明日にでも同じのをプレゼントするよ」

「ありがとうございます」

嬉しそうな笑顔が綺麗で、まぶしい。本当に可愛いし、セレスは大人しいのでアナスタシアがいらないと間が持たなかっただろう。いてくれて良かった。

病室の雰囲気的にも華やかなピンクのドレスっぽいワンピースのアナスタシアがいるとだいぶ明るく感じるしな。

「あ、そろそろ剥がせるんじゃないか？」

さすがに剥がすのは任せよう。さすがにこれ以上女の子に顔に無断で触れたくない。

怯えたようなセレスをなだめ、アナスタシアがパックを剥がしていく。

今度は乾いたら色が変わるようにしようかな、いつまで待ったらいいのか分りにくい。

幸い乾いてたようで、パックは抵抗なくすると剥がれていく。セレスは見られたくないみたいだが、ここは諦めてもらおう、じっくりと見つめてみるが、傷跡はどこにあったのか全く分らないくらい綺麗に消えていた。

「成功だな」

女の子2人もびっくりしたように何度も確認しているが、すぐに傷が消えたと納得してくれた。

「ありがとうございます……」

セレスの方はとうとう泣き出してしまい、アナスタシアが肩を抱いて慰めてる。なぜか後ろの方では騎士が1人走っていった。今まで気配さえ感じさせなかったのに何かあったのだろうか。

「ハヤト、セレスを治してくれてありがとう」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

やっと泣き止んだセレスは目元が少し赤くなってたが、傷跡はど



ここにもなくなっていた。

傷の酷さで解らなかったが、セレスもそれなりに可愛らしい子だった。領主さんの遠いとはいえ血縁なだけある。アナスタシアの美貌とは比べようがないが、大人しそうな雰囲気とすぐに俯くところが深窓の令嬢っぽい感じだ。か弱そうで守ってあげたい感じってのか？ 笑ってくれるならなんでもしてあげたくなる、そんな子だな。

治療のためとはいえこんな子の側にいられるのはかなりの役得だな！

義肢がどれくらいかかるかは分らないが、この子のためと思えばがんばれそう。いや、がんばる。

正直レバタさんに頼まれたとき遙かにやる気になってるあたり、我ながら現金なものだが仕方ない。きつと世の中の男性の8割くらいは納得してくれるだろう。あとの2割は特殊な性癖の可能性が高い。

と言うか、足の義肢だから足に触るところになるのか？

かなり役得：いや違う。触っていいのか？ 年頃の娘さんだし、嫌がられそうだよな。顔の時は我慢してもらったがさすがに足を見せてもらったり触るのは、どうなんだ？

治るなら多少のことは我慢してくれるだろうが、泣きそうな顔をされると辛い。

かといって他の人に実験につきあってもらうのも、会う回数が減ることになるから言いたくない。

どうするべきなのか……。

意外と足くらい見られてもどうと言うことはないって可能性もあるが、服の裾の長さとか的に足を見せるのは嫌がる文化の可能性が高いよなー。

見た感じの長さでは膝あたりで切断されてるっぽいし。

本当にどうしよっ？

## 治癒（後書き）

貨幣の話で金貨の話が半金貨がないとなっていたり（正しくは小金貨がないのですが）半銀貨がでてたりと間違っていたので訂正しました。

正しくは小銅貨 銅貨 小銀貨 銀貨 金貨 大金貨です。

申し訳ありません。

## 屋敷

なぜか現在、美味しいお茶を頂いたりする。お茶だけだけど。どうもお茶菓子の文化はないようだ。そもそも砂糖がないようだけど。でもサトウキビっぽい植物は売ってたんだよ。かじって食べると甘いのでおやつに大人気。俺も何本か収納袋の中に入れてる。甘い物って他には果物しかなかったし、精製して味付けに使うって発想がないようだ。

女の子なら甘いものは多分好きだろうし、珍しさで受けそうだし。今度は何か甘い物でもお土産にしようかな？　もし嫌いでも物珍しさはあるだろうし。

お菓子とかはさすがに作ったことがないが、材料揃えて魔法を使えば完成しそうな気がするし。材料がなくても出来るような気はするが原材料：魔力だと、なんだか身体に悪いような気がする。得体が知れないと言うか、栄養にならない気がするというか。栄養にならない方が体重を気にする女性にはいいのかも知れないけどな。

このお茶ならやっぱリクッキーとか合いそうだなー。

さくさくつとした歯ごたえで甘めがいい。ちよつと渋みのあるお茶にはよく合うだろう。形は女の子が好きそうな花形がいいかな。可愛い女の子2人とお茶なんて役得だよなー。

セレスもだいぶ打ち解けてくれたのか、よく笑ってくれる。まあ、傷がなくなっただけで顔を見られるのを嫌がらなくなっただけかも知れないが。

彼女はまだベッドからでられないのでお茶も当然ベッドの上で飲むことになる。

俺たちはすぐ近くにおかれたテーブルで。

早く一緒のテーブルでお茶を楽しみたい。その時はもっと幸せそうな笑顔が見れるだろう。

そうなるように、早く義肢の試作品を作らないとなー。

試作用に塩を買ったところで中断したままだったんだよな。傷跡を消す方に集中しちゃったんで後回しにしてしまった。

本当はもつという話をしたところなんだが。

「あ、そういえば。聞きにくいんだけど……怪我の原因ってなに？他に傷跡が残ってるのかはあるのか？」

傷によってと言うか、断面の状態によっては義肢をつけたら痛む可能性がある。それだと魔力で徐々に馴染ませて身体の一部にしていくのは難しいかもしれない。火傷とか皮膚が壊死してそうな傷だったら一回ポーション飲んでもらって完治させた方がいいかもしれないし。

あいにく傷の状態とか病気に詳しいわけじゃないからな。判断が付かない可能性も高いけど、一応聞いておきたい。

が、聞いたとたん今まで笑顔だったのがとたんに曇ってしまった。トラウマを刺激してしまったのか！？って、普通両足失って顔に酷い跡が残るような怪我をしたらトラウマか。聞くんじゃないか。た、せつかく和やかな雰囲気だったのに。

アナスタシアも眉根を寄せて俺を睨んでる。無神経なことを聞くなど、責められてるみたいだ。

失敗したなあ。本人に聞かなくてもあとでアナスタシアや騎士にこっそり聞くとかすれば良かった。

「ご、ごめん！ 言いにくいよな、話さなくていいから！ ほんとうごめん！」

だからその泣きそうな顔をやめてください。泣いてはないんだけど、その一歩手前といった風情は罪悪感が刺激されまくりだ。

「いいえ、大丈夫…です。傷は、ハヤト様が癒してくれましたから……」

全然大丈夫そうじゃない。俺の罪悪感も限界だ。そしてなぜ様付け。アナスタシアは普通に呼び捨てだったのに。

「傷が残ってるなら残りのパック使ってくれれば、それは大丈夫だと思う。足に義足つけたとき、痛まないか心配になっただけだから

原因の方はいいよ。余計なことを聞いてごめん」

だからそんな風に無理してます！って感じに微笑むのはやめてくれ。

「はい……。ありがとうございます」

今度の微笑みは穏やかだ。……よかった。

「ねえ。義足ってなんのこと？ 治せないから作り物で誤魔化すつもり？」

アナスタシアの関心はそっちにいったらしい。足は治せないのかと、険しい表情だ。

友達思いなのはいいけど、もし失敗したらあとが怖そうだな。

「前例がないことだからな。いろいろ試すことになるんだ」

傷跡を消すくらいならポーションの前例があるからうまく行くだろうと思っただが、再生は当分実験の繰り返しになりそうだし。

ルイと話してた試作品とか、ちよつと自信はあるけどぬか喜びさせるのは嫌だ。そもそも最初っから実験につきあってもらって約束だし。

そういうと、まだかなり険しい表情だったが他に頼るものがないのだろう。黙ってしまった。

「一生消えないであろう傷も消してくださいだったので、ハヤト様ならきつと治してくれると思います。ハヤト様に無理でしたら、他の誰にも無理でしょうから……そのときは、諦められます」

「俺に出来る限りのことはするよ」

こつもまつすぐ信頼されると面はゆい。そしてますます失敗できなくなつた感が。

さっきまで足の傷を見せてくれるのか悩んでたのが馬鹿らしくなってくるな。ここまで信頼してくれてるのだから、傷は見せてくれるだろう。

俺は最善を尽くす。それだけだ。

ささやかなお茶会も終わり、次は3日後に会うことを約束した。いろいろ試作品を作りたいし、お菓子も出来れば作ってみよう。義肢だけに集中した方がいいのかも知れないが、気分転換は大事だ。甘い物は疲れを癒すしな。思い出したら無性に食べたくなくなって食べないと落ち着かない気分だったのもあるが。芋類はあるし塩はちよつと高いが今の財布事情なら余裕で買えるし。まずはポテチを食べていったん落ち着こう。そのあとで試行錯誤していけばいいか。

お菓子に思いをはせながら騎士の先導で歩いていると、昨日の領主さんの部屋に案内された。

帰るっていったはずなのだが、呼び出されてたらしい。全く気付かなかつた。ポテチに夢中になってたせいかな？

「セレスティアの傷を治してくれたそうだな。礼を言う、ありがとう」

さつき傷が消えたとき走ってった騎士さんの報告かな？ 相変わらず情報が早いな！。そしてセレスの名前はセレスティアだったのか。セレスは愛称かな？勝手に呼んでしまったが何も言っただけなので良いのだろう、多分。

「いえ。効果がありまして何よりです」

「昨夜は無法者に襲われたそうだが、怪我がなくて何よりだ。もし良ければ今回の報酬代わりにこちらで住居を用意するが」

「どんだけ情報が早いんだ？ むしろこれは、監視されてるのか。いきなり見たことも聞いたこともないような効果の薬を作る、街に来たばかりの人間。」

「……怪しまないって可能性の方がいいか。監視されて当然って気がしてきた。」

「仕方ないとはいえ、いい気はしないが……。」

「家まで用意してくれるってことは監視強化もあるんだろうけど便利な人材として取り込む気もあるのかな？」

利用されるのも自由を奪われるのも嫌なんだが……あんまり断つても怪しまれるだろうけど、家なんてもらって永住が確定しても困るしなあ。昨日貴族について話を速攻で断ったばかりだから刺激したくなんだけど、仕方ないか。

「いつまでこの街に滞在させて頂くか解りませんので、せつかくのご厚意ですが無駄にになってしまう方が失礼でしょうし遠慮させて頂きます」

こんな感じでいいのかね？　そもそも口答えしてる時点で礼儀に反してるって視線を執事さんから感じるんだけど一応がんばって敬語を使ってるんだ、努力は評価してくれ。

「それなら問題ないな。この街での滞在に使うと良い。不在時の維持管理くらいは任せたまえ」

相手の方が上手だった。俺なんて足元にも及ばないな。

がんばって考えた断り文句も速攻で潰された。

「……………ありがとうございます」

こう答えるしか道はないよな？

宿代が浮いて良かったと思おう。拠点もちよつと欲しかったし。

こうなったら荷物たっぶりおいてせいぜい有意義に使い潰させてもらおう。

いつもの馬車で案内されたのは立派な屋敷でした。

……………  
どう見ても黒の風見鶏亭くらいのサイズはある。

左右の家と間違えてないかなーと見回すが、そつちも勝るとも劣らぬ豪華さだったので諦めて正面の屋敷を見る。

貴族街のある丘の下とはいえまだまだ十分に裕福な者しか住めな

いあたりだ。

こんなに立派な家を貰って良いものか。悩んだが、3日後に迎えに来ると言い残して騎士さんはさっさと帰って行ってしまおう。

いや、もうちょっと説明していいこうぜ。途方に暮れてる人間をあっさり見放していくな。

昨日の今日でよくもこんな立派な屋敷を用意したもんだ。

庭にも荒れてる様子がない。ここから見える窓にもちゃんとカーテンが掛かってるし。

でも一人で住んで掃除とかどうしろって言うんだ？ 人を雇うってのが当たり前のサイズに思えるんだが。

悩みはつきないが、貰ってしまったものだしいつまでも見てるわけにもいかないの、とりあえあず寝室だけでも使えるようにしておこう。

飲み食いは適当な食堂で済ませれば多少安上がりになるだろうしな！。

立派な鉄の門をくぐり、屋敷のドアを開ける。

自分の家になるわけだし、と思ってノックもしなかったのだが。

ドアを開けた先に人がいてびびった。

「あれ？」

間違えたのか？ 普通にメイドっぽいお仕着せを着た女性が掃除してた。

「どちらさまでしょう？」

ノックもせずに入ってこようとした俺に向ける視線はかなり厳しい。不法侵入だもんな。

「すみません。今日このあたりに家をもらいまして。案内されたんですが間違いだったようです」

苦情は是非案内した騎士さんをお願いしたい。俺のせいじゃないと思うし。

深々と頭を下げて、撤退。長居すると不審者として通報されそう



だ。すでに遅いかも知らないけど。

「え、家を貰ったって。あの、ハヤト様でしょうか」  
慌てた声で呼び止められた。あれ？

執事っぽい青年が出てきたり、メイドっぽい女性の一人がはじめて見る鱗付きの人でちょっとテンションが上がったりしつつ説明を受けた。

どうやらこの屋敷が俺の貰った屋敷であってるらしい。

執事1名、下男兼庭師1名、メイドさん3名。総勢5名つきで。

彼らの給金は領主さんが出すそうなので維持管理は任せて良いよ  
うだ。

むしろ家を貰ったというか、領主さんの別荘を借りた状態だな。

その方が楽で助かるが。

こっちのそいう気分まで把握した上だとしたら、用意周到すぎる。

本格的に囲い込まれてる気がしてならない。

セレスの治療が完了したら逃げるべきかなー。

今のところ悪用されるようなものは作ってないし、普及して欲しいものばかりだから困りはしないが。

ポーシヨンやパックなんかはこの街の特産品として売りに出してくれても構わないしな。むしろその方が世のため人のためになるから歓迎したいくらいだし。

その二つのために屋敷まで与えて囲い込もうとするのはちょっと買いかぶりって気もするが。

俺が他に何を作るかは解らないが、これまでのを鑑みて役に立つって判断したのかも知れないな。

下手なものを作らないように気をつけよう。武器は絶対禁止だな。元々あんまり作る気はなかったが。

取りあえず食事の心配もなくなったことだし、宿に置きっぱなし

の荷物をとってこよう。

あとは、レバタさん達にここを教えておかないと。

……街に到着して数日で家まで出来てしまった。しかも使用人付き。

意外すぎて自分でもびっくりだ。

うまくいきすぎだよな。何かどんでん返しがありそうで怖い。

## 屋敷（後書き）

日間ランキングがなんと3位にはいつていました。  
読んでくださった皆様、ありがとうございました。

## 料理

黒の風見鶏亭まで荷物を取りに行った帰り道。

市場でジャガイモや小麦粉、卵など思いつく限りの食材を買っていく。

ちなみに名前は全然違うのだが、俺の中ではジャガイモはジャガイモなので正しい翻訳して考えてしまう。

だから店の料理が名前から理解できないのだが、こればかりは仕方ないと思う。

ガトウーザとか言われるとジャガイモだって分つても食べるのを躊躇うんだよな！。

ガトウーザの串焼きとかがつて言われて八つ切りで串に刺さつてたりすると、得体の知れない虫に見えてきたりするし。

そんなわけでジャガイモはジャガイモだ。「ジャガイモどこで売ってる？」とか聞けないので買物はとて面倒だが、見た目が俺の知ってるものと同じなので気長に探し回ってる。

これで見えた目はジャガイモ、味はピーマン。とかだったらそうそうに諦めてただらうけど。

……ピーマン嫌いなんだよ。そんな目にあわなくて本当に良かった。

両手一杯の食材を買い込んでから気付いた。収納袋に入れて帰ったら、驚かれるよな。

まだ知られたくないし、使うわけにはいかない。

このまま持って歩くのは結構辛い量なんだが。

がんばって持って歩くしかないか。

自業自得とはいえ家までの道のりがとても長かった……。

根菜類の重さに挫けそうになりながらもやっと家に辿り着く。

正直「家」ってサイズじゃないのだが、自宅を屋敷とか館とか言うのも違和感が付きまとうので無理矢理家つてことにする。

もつと手頃な1LDK……はないか。せめて普通の一軒家が良かったんだけどな。

領主さんともなるとこのサイズが最低レベルなんだろうか。

下手なものを与えたりしたら自分の名折れになるとか、そういう事情でもあるのかな？

大は小を兼ねるって言うが、大きすぎて持て余す気がする。

そもそも玄関から入って良いのか悩むんだよ。俺が貧乏性なせいだけじゃないと思う。無駄に扉が大きくて立派だから普段使いは勝手口なんじゃないか気になるんだ。今度聞いておこう。

取りあえず今回は玄関から入ることにして、扉というかノッカーっていうのかな？ ドアについてる輪っかを叩く。

意外と大きな音が出て驚いたのは秘密だ。

そうだよな、インターフォン代わりなんだからそれなりの音量がでないと感じかないか。

でも奥の方にいたら聞こえないとかありそうだ。

だからこういうお屋敷には何人も使用人が必要なのかもな。ちよつと無駄な気がするけど。

待つこと数分。聞こえなかったかなーとか悩み出した頃に扉が開いた。

「お帰りなさいませ、ハヤト様」

執事さん。ええつと、名前は確かクリストファー。

執事さんなんだからセバスチャンだと思ってたが、そんなわけないか。ちよつと残念だが。

俺が着てるものよりかなり上質っぽい服をきっちり着こなしてる。

こんな人に出迎えられて頭を下げられると無性に申し訳なくなるなあ。

俺はえらい人間じゃないし、そもそも自分の稼ぎで雇ってるわけでもないし。

でもやめてくれっていうわけにもいかない。クリストファーさんはそれが仕事なんだ。言われても困るだけだろう。

お互いに慣れたらもう少し砕けた態度をとってくれるように頼むとしよう。

「ただいま。食材買ってきたんだけど、台所ってどこ？」

「ご自身でわざわざ買ってこられたのですか？」

驚かれてしまった。

一応自分の食べるものくらい自分で作れるよ？

「晩飯作るのに足りない材料があったら困るだろ？」

「食事は当面の間サリユーが用意いたしますし、買い出しはリリイが行います。ハヤト様にご心労をおかけして申し訳ありません」

サリユーにリリイってメイドさんのことで良いのかな？

買い出しに行ってくれるのは助かるな。ポーション用の薬草とか瓶とかもついでに頼めるのだろうか。でも距離もそこそこあるし大変か。

「そうか？ ありがとう。でも女の子には大変じゃないか？ いろいろ必要なものもあるしついでだから買ってくるけど？」

微妙な表情をされてしまった。普通は買い出しは頼むものなんだろう。

でも気になるものは気になるんだよ、特に俺はただの居候状態だし。

「店側に配達を頼みますので心配はいりません。ご入り用のものがありましたら、お申し付けください」

金持ちは自分で買い物には行かないのか。

リリイさんの買い出しも注文だけしてあとは届けて貰うようだ。

つまり今日がんばって運んだ努力は無駄な努力だった、と。

重かったのに……。

ま、まあ……今日食べたかったものを今から届けて貰うのは間に合わなかっただろうからいいよな！

ポテチも食べたいし。

それにしても屋敷の維持管理は領主さんが受け持つって話だったけど、それ以外にも食材や細かい消耗品なんかに結構金がかかるよな？

全員住み込みだっただけだし、彼らの衣食も満たすとなると結構物いりだ。まとまった金額が必要になるだろう。

当面は手持ちの金で足りそうだが、これからどうするかなー。

現在の収入源であるポーションは他の人もそのうち売り出すだろう。

もちろん普及が目的なので売り出してもらわないと困るのだが、売り出されれば収入が減ってしまう。

今までは一人だから割と気楽だったがこうなってくると真面目に稼がないとやばいよな。

義肢はもちろん急ぐとして他に売れそうなものを考えないと。

鏡とかもちよつとした需要はありそうだからいくつか作ってみようか。

あとはポーションの病気を癒すのと毒消し。この辺を早く形にしたい。

「じゃあ、一応金渡しておくから足りなくなったら言ってくれ。金銭管理はセバ、じゃない。クリストファーさんで良いんだよな？」

やばいやばい、うっかりセバスチャンって言いそうになった。間違えないようにしないと。

「いえ、旦那様……エクター様から支給されますので。ご存じありませんでしたか？」

エクターって領主さんか。至れり尽くせりだが本当になんてそこまでするんだろう？

今度あつたら聞いてみよう。

「それはありがたいけど、自分の生活費くらいは自分で払うよ。出して貰つてると思うとあれが欲しいとかこれが欲しいとか、わがまま言えないし。俺の稼ぎじゃクリストファーさん達を雇えないから生活費だけ出すつて言うのは滑稽かも知れないけど、せめてね」

領主さんが一番期待してるのは義肢だろうが、他にもいろいろ作りたいからな。

いや、もちろん一番優先するのは義肢だけだな。

「……かしこまりました」

一礼して了解するクリストファーさん。動作がいちいち格好いいのは執事つて仕事柄だろうか。

これがイギリスだったら新聞にアイロンを掛けてくれそうだな。なんかの映画で見たのが印象的で一回生で見てみたかったんだが、こつちには新聞なんてない。残念だ。

とりあえず食材を台所に運んでサリユーさんに託す。サリユーさんは鱗のある魚人だ。といっても魚が直立歩行してるとかいうような斬新な姿ではない。

それはそれでちよつと見てみたかったけど。

残念ながら普通の人に鱗が少しいている、と言う程度だ。頬とか手足に数カ所見える程度。服で隠れてる部分は分らないが。

あとは耳の部分が魚のエラっぽい感じになつてる。水中でも短時間息が出来るというから不思議だ。

そして料理が得意なので料理人が見つかるまでは彼女が食事を作ってくれるという。

魚人なのに火を使うのか、とか一瞬思ってしまった。ごめんなさい。



台所はサイズの的に台所じゃなく厨房って呼ぶべき場所だった。

土間になってて、竈がでーんと鎮座してる。パン窯や水瓶もある。真ん中にあるテーブルは俺が寝られそうなサイズだ。でも籠に入れられた野菜が何種類も置かれてるので作業スペースはそんなに大きくないか。

壁際にある棚には調味料っぽいものが置いてあり、香辛料は高価だからあまりない。ハーブとかの香草が中心になってる。

岩があるのが見えてちよつと驚いたが、あれは岩塩か。黒いから一瞬なんかの呪いまじないかと思った。

物珍しさであちこち見てたが、邪険にせずにごにこしてるあたりサリユーさんは優しい人っぽい。

早速ポテチを作るう。作り方は簡単だからこれは魔法を使わない。普通に作る方法を覚えてもらっておやつに出してもらえるようにしたいからな。

クッキーなんかも普通に作る方法を教えたいところではあるんだが、お菓子はさすがに作れない。

一回作って見せて、試行錯誤して貰うのが良いか。

さすがに毎回毎回魔法使って作っていると本題の義肢なんかを作る暇がなくなりそうだからな。

でも実は結構甘党なんだ。たまには甘いものも食べたいんだよ。お菓子も多少普及してくれると良いんだが。

そろそろ夕食の準備を始めなきゃいけないというサリユーさんに頼み込んでポテチ作りの開始だ。

「あとは油でからつと揚げて塩を振るだけ！」

ジャガイモを薄切りにして水に晒して、拭く。下ごしらえなんてそんなものだから簡単にできる。

「こんなに薄いと食べ応えなんてないと思うんですけど……」

おやつだからなー。軽くさくさく食べられるのがポイントだと思う。

「いいからいいから」

一般的な油はザーガンってモンスター肉からとれるんだが、これが獣から取れるとは信じられないくらい臭いも癖もない。

肉のほとんどが脂肪なのに見た目は象と水牛の中間っぽい見た目ってのが謎だけど。

ちなみにキュルボってのはまん丸いスライムのようなモンスターなんだが、素晴らしい硬さを誇ってる。肉も硬く食べられないほどだ。

でも移動方法はぶよんぶよんって弾んで転がる。どこにそんな柔軟性があるのかは誰にも分らない。

こつちから油が取れる方が納得なんだが、世界は不思議に満ちてる。

いつか見てみたいものだ。

ザーガン油で揚げられた薄切りジャガイモに細かく砕いた岩塩をかける。

早速一つ摘んで口に入れる。

うん。ぱりぱりした食感も味もまさしくポテチ！

「やったー！」

うん、うまいうまい。これでコーラーがあれば完璧なんだが。さすがに魔法なしだと炭酸は作れない。とりあえずはレモン水で我慢しよう。

俺が夢中で食べてるとサリユーさんがじっと見つめていた。

あ、うつかり独り占めしてたよ。

「ごめんごめん。うまいよ？ どうぞ」

皿をサリユーさんの方に押しやるが、なぜかちよつと悩んだあとやっと食べてくれた。

作り方も、俺が食べてるのも見てるだろうに。怪しいものじゃな

いってば。

「はじめて食べる食感です。でも、美味しいです」

「癖になるよな。時々無性に食べたくなる」

ぱりぱり。ぱりぱり。

あつという間に食べ尽くしてしまった。主に俺が。

サリユーさんも気に入ってくれたみたいではあるのだが、俺の勢いに負けたのかあまり食べてない。

人に勧めておきながら自分で食べ尽くすとか。ちょっと恥ずかしい。

「時々作ってくれたら嬉しいんだけど、頼めるかな？」

それでもしつかり頼んでおくが。

笑って頷いてくれた。いい人だ。

## 料理（後書き）

ちよつと短めですが。

長さのばらつきが酷くてしめんなさい。

## 自室

晩ご飯はサラダにスープ、何かの肉に甘いソースがかかったものとパンだった。

量は十分あったし味も可もなく不可もなくってところだったが、一人で食べる食事は寂しい。

そこそこ広い食堂なのに一人つきりつてのはなあ。

給仕してくれるアリスさんに一緒に食べてくれるように頼んだが、一秒たりとも考えずに即断で拒否された。

アリスさんはメイドの中で一番年上なので臨機応変に対応してくれるのを期待したのだが無駄だった。

食堂の広さが心の寒さと比例してる気がするので次からは自室で食べることにしよう。

その方がまだマシっばい。

監視してるんだらうなーってしみじみ思うほど露骨な態度ってわけじゃないんだが、警戒してるような距離を置いた態度でいられるのは地味にキツイ。

自室には防犯ベル・防音・のぞき見防止策が必須かな。

自宅のはずなのになんでこうも心が安まらないんだらう？

生まれてからずっと貴族として生きてたレンと違って俺は一般市民だからなー。

人目があると落ち着かないだけなんだろうか。

もうちょっと癒しが欲しい、切実に。

この家で一番広く、一番立派な部屋が俺の部屋だ。

それは当たり前のことなのかも知れないがやっぱりどうも落ち着

かない。

カーテン一つとっても光沢といい、厚みといいかなりの値段がしそうだ。

服を買うときに散々思い知ったが、この世界の布は結構高い。それがドレープもたっぷりと惜しみなく使っているのだ。俺には値段の見当もつかない。

置いてある机も大きな一枚板で出来ていて磨き抜かれてるのだから、飴色の光沢が美しい。

今座っているソファさえもふかふかしてる上に手触りがよく、このまま眠ってしまいたいくらいだ。

でも自力で手に入れたものではなく、貰ったものだろうか。

単純に立派すぎるのと広すぎるのとで落ち着かないってのもあるかも知れないが。

日本の自分の部屋が恋しくなってくる。

お気に入りの音楽も映画も、二度と見ることが出来ない。

何一つ、持ってくることはできなかった。

おそらくは、似ているだけのものすら手に入ることはない。

魔法で作り出そうにもDVDやCDなんてものは不可能だろう。

形だけは何とかなるかも知れないが、再生できるとは思えないし。

これがホームシックってやつだろうか？

取り戻せないものを思っつて、少しだけ悲しくなる。

そこまで親しくしてたわけではないとはいえ、人並みにはいた友人達にももちろん二度と会えない。

こちらの世界で新しい生活を謳歌しようとは思っていたが。

日本での生活も、簡単に捨てれるようなものではなかったのだと今になってようやく理解できた。

今更、だよなー。

やること、やりたいことを列挙して振り返らないようにしてきて、ずっと前しか見ないでやってきたのに、ここに来て振り返ってしまった。

「家」というものを手に入れてしまったから家を思い出したのか？  
この世界で生きていくと決めたのに、実はずっと未練を抱えてたらしい。

「世界」の願いを叶えたいと思ったのも本当の気持ちではあるのだが。

やりたかったことはたくさんあった。

見たい映画も、やりかけのゲームも、シリーズ小説の新作も気になる。

次の週末……とづくに過ぎてしまったが、遊ぶ約束もあった。

もう、何もかも取り戻すことは出来ないのだと。

全部、ちゃんと諦めよう。

この世界で生きていくために。

少しだけ、涙がこぼれたが。おかげでだいぶ落ち着いた気がする。こっちで生きていく覚悟なんてとづくに決めてたはずなのに、まだ甘かったのだろう。

家中の人に監視されてるのかもって状況が精神的にきついのもあるが。

一回領主さんと腹を割って話すしかないのかもな！。

こっちはごく普通の高校生でしかなかったんだ、いきなり海千山千の大人とやり合えるとは思えない。

どこまで聞き出せるかは分らないが、俺を利用したいなら多少は協力してもいいから代わりに落ち着ける環境を保証して貰いたい。

全部疑ってる俺の精神が持たない、マジで。

取りあえず、この部屋で安心して過ごせるように警備体制を整え

よう。

「いつそガードマン的なものを作ればいいのだが、ロボット……ゴレムって言うのかな？ そんなのは作れる気が……あれ、なんかできそうな気もする。」

ぬいぐるみとか人形とかかかってきて魔力で動くようにして、武器を持たせればいいのかも。

でもあんまり強くはなさそうだな。不意打ち程度にはなるか？

「一体くらい用意しておいても良いかもしれない。あんまりたくさん置いとくと怪しい趣味があるみたいだから自重は必要だが。」

人形的なものは明日買ってくるとして、今必要なのは防犯設備だよな。

「防犯はもちろぬ盗聴・覗きにも万全のホームセキュリティ。魔法バリエーションであなたのお部屋を完全防御！」

警備会社のコマージュナルを思い出しながらドアと窓を俺自身が、俺の許可がない限り開けられないようにする。盗聴と覗き見はネットセキュリティのイメージでやろうとした段階でシャットアウト。近寄れないようにした。

でも毎日これをやるのは忘れそうな気がするな。実際宿の時も2日目はすっかり忘れてたし。

魔法に魔力を必要以上に込めて持続時間を延ばすことは出来るが、それだといつ切れるかが分りにくい。

収納鞆とかのように必要な機能を書いておけば大丈夫かな？

でも壁にでかかど書くのは見た目的に微妙か。

それに借り物の家なんだ。返すときに困るか。

スイッチ一つでON・OFF出来れば便利だしな。必要な機能を書いておいて、そこに魔力を込めたら発動するようにできないだろうか。

発動時は発光するようにしておけば魔法が持続してるかも分かりやすいし、魔法のかけ忘れもないだろう。

よし、それで行こう。



なんか結界用のアイテムっぽいし、水晶球とかそれっぽいよな？  
水晶を買ってきて、珠にしよう。で、中に「侵入者防止」「盗聴防止」とか欲しい機能を書いた紙を入れてそこに魔力を通すことで効果が発動。

うん、いい感じだ。

でも見た目的に水晶球の中に紙が浮いてるのってどうだろう？

水晶球の表面に書き込んで、字が消えないように上からコーティングするほうがいいか。

見た目的にもそれっぽいよな！

そうなると字を書くのもペンとか絵の具とかじゃなくて銀とかを鉛筆状にして書く方がいいか？

ちようど鏡に使った銀が余ってるし、ここは有効に使おう。

こつ立派な部屋に置くんだ、見た目的にもその方が馴染みそうだし。

うまくできたら、セレスにもあげたい。

もう怪我なんてしないように、「攻撃無効・シールド展開」的な機能のお守りみたいに持ち歩けるサイズで作ろう。

……俺も持つておくべきだな。

環境も落ち着いたことだし、日課となりつつあるポーションを作つてから義肢の作成に移ろう。

取りあえず生理食塩水を作るのだが。

ここでまた躓いてしまった。

生理食塩水って水の1%弱塩を混ぜるはずなんだが…。

うん、魔法で出した水球の1%がどれくらいかが分らない。

まずはたらいと秤がいるな！。

幸い天秤と分銅は市場やギルドでも使われていたから、入手は可

能だろう。

それにしてもなかなか進まないなあ。

塩を買いに行ったときに秤の必要性に気付いていれば良かったのだが。

もうちよつと計画を立てて行動しよう。

紙を引つ張り出して買い出しリストを作る。

- ・水晶
- ・瓶（ポーション用）
- ・秤・分銅
- ・たらい

他には何が必要だろう？

義肢と言つても細かく作り上げる必要はないんだよな。

最初は適当に作った足の形をしたものが自在に動けばそれで良いかと思つてたのだが、やっぱり見た目にもこだわりたい。

女の子の足が見るからに作り物では可哀想だ。

大きく作りたい部分を覆つてその中で本人の魔力と義肢の魔力で失つた部分を再生させていくようにしたい。

繭の養分で中のものが成長するイメージだな。

養分を使い尽くして再生が完了したら繭がパキパキ割れて中から新しい足が！

想像するとちよつと怖いような気がしたが気のせいだろう。こっちの人はエイリアンとか知らないだろうから、この微妙な恐怖は伝わらないだろうし。

義肢じゃなく、繭として作るう。

繭だから細かい造形は必要ないし、他に必要そうなものはないよな？

繭の原型は明日にでも出来そうだが約束が3日後だからそれまでの時間で他のものも作るう。

お菓子の材料はあるし、あとはキュアデイズポーションとキュアポイズンポーションか。

病気に効く薬草と毒消しを数種類かな。

とりあえず一回水から作ってみよう。

味はキュアデイズポーションが白だから牛乳味、キュアポイズンポーションが緑で、青汁？　なんか飲みにくそうだが、身体に良さそうな気がするからいいや。

他に思いつかないし。

作成はポーションで慣れて来てたので特に問題なく成功。多分。病気とか毒はさすがに試せないしな！。

あ、毒は試せるか。弱い毒を買ってこよう。下剤とかなら便秘薬として売ってそうだし、解毒できなくてもそこまで大惨事にはならないよな。

ちよつと気分が悪くなる程度のが理想だが、そこまで都合の良いのは思いつかないし。

解毒できなくてトイレに引きこもる羽目にならないことを祈ろう。あとは、アナスタシアに渡す鏡の材料と菓子を入れる籠くらいあれば大丈夫かな？

あ、お守りの形状考えとかなないと。字を書き込むんだし金属板の方がいいかな？

ドツグタグみたいにしても。それなら首から提げられるし。

見た目的に微妙なのは……気にしない方向で？

ま、まあ、小さい板ならポケットにでも入れとけるし、大丈夫だろう。

警備用水晶球と違ってON・OFF機能はいらないんだから常動型として作れるし。

お守りは効果が永続するように収納鞆と同じく文字自体に魔力を込めて書いておこう。

ちなみに文字だけだといつか魔力が尽きそうだから周囲からも魔力を補充させてる。

周囲っていつても大気とか身体から人体に影響はないけどな。

出来ることは終わったし、そろそろ寝よう。

明日はギルドにいつて今度は病氣の人を募集しよう。前の依頼にもまだ応募がないけど。

あ、普通に考えたらギルドに仕事が出来ないくらいの怪我を抱えた人はいかないか。

病氣の人もいないだろうし……募集取り下げて病院に行こうかな。実験段階だつていつて、家まで来てもらつてから飲んで貰えば効果があつたときに欲しい人に囲まれることもないだろう。

ポーションの販売の時のように騒動になるのはごめんだ。

効果が判明したらすぐに量産するようにするから、ちよつとだけ猶予が欲しい。

今までに作り置きしてた分、つて言えば数を出しても大丈夫だろうし。

ヒーリングポーションの時は在庫がないつて先に言つちやつたから数が出せなくなつちやつたしなあ。

あれも先に樽一杯分くらい作つておくべきだった。

そうすれば欲しい人に潤滑に行き渡つたのに。

いろいろ考えてるつもりなのに、どうも抜けてるよな。

まだ致命的なことになつてはいないが、これからもそうだとは限らない。

気をつけよう……。

## 自室（後書き）

ちよつとホームシック。  
そんなに未練はないのですが、それでも少しだけ。

## 病院

今日もギルドへポジションを預けてから市場へ。

今日はいろいろ用事があるから自分で行くが、明日からはメイドのリリイさんが行ってくれるという。

そのことも言付けておかないとな。

それにしても探求者として登録したのに依頼を受けたことがない。毎日来てるのにやっつてるのは商品の納入と依頼の提出。

何か間違ってる気がする。

「おはようございます。今日の分をお願いします」

販売の担当者は黒髪に黒い目の人で何となく親近感が湧く。

カラフルな色もだいぶ慣れたんだが。

彼から昨日卸したポジションの代金を受け取り、今日の分を渡す。手数料を引いて16000ルト。大金だ。

「ありがとうございます。あの、すみませんが出来れば半数くらいをマイナーヒーリングポジションで納入してもらえませんか？」

あれ？ 16000ルトってことは昨日のノーマルヒーリングポジション全部売れてるはずだが、どうしたのだろう。

「それは構いませんけど、どうしてでしょう？」

「ノーマルヒーリングポジションまで使わなくても完治する傷の場合がありますし、マイナーヒーリングポジションで構わないという人がいるのですが、どうもこちらでやると濃度が一定にならず困ってしまっています」

単純に5倍に薄めればいいんだけどなあ。

こっちでやってもたいした手間じゃないが渡した数よりも需要が多いときはどうするのだろう。

「えーっと。じゃあ、納品は今まで通りとして、倍率を計るための

容器と空き瓶を用意して渡しでしょうか。その方が数の過不足に融通が利きますから」

それとも薄める手間自体が問題なのだろうか。

「ありがとうございます。そうしてもらえると助かります。何しろ買う方は少しでも濃い方が得だからうるさいんですよ」

なるほど。作製者が決めた倍率なら文句は言えないだろうってことかな？

「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

「いえいえ！ ギルドが賑やかになって他の品も売れてるのでありがたいです」

「忙しくなりすぎて恨まれなきやいいんですが」

笑って、明日から使いの人に頼むことになったことだけ告げておく。

この分で稼げば家で働いてくれる人全員自分で雇えそうだな。

今いる人を解雇するのはさすがに心苦しいが。

俺自身が給料を払って他にも人を雇えば多少は監視の目もゆるむと思いたい。

まあ、給料を払ってるからってすぐに元の雇い主と縁が切れるわけではないだろうが。多少でもマシになると思いたい。

一端表に回り受付の人に依頼への応募がないかを確認したが、やっぱりないようだ。依頼を受けるときは直接出向くものだから、俺が会っていない以上応募があるわけないんだけどな。宿から家が変わったので行き違いがあるんじゃないかと、ちょっとだけ期待してたんだが。

無駄足を踏ませなかっただけ良かったと思おう。

まずは病院に行って、その帰りに市場かな？ 荷物抱えて動きたくないし。

位置関係も病院が一番遠いから帰りに買い物にしよう。

軽い気持ちで訪れた病院は、酷い有様だった。

受付で話をしたら、患者に直接交渉するように言われたんでざっと見て回ったんだが。

別に不潔だとか、野戦病院みたいになってるとかではない。

俺の感覚からすれば怪我の手当をしているように見えないレベルなんだよ。

傷を縫うって治療法はなく、薬草を当てて上から包帯を巻くだけ。それがこの世界の普通だとは分るが、個人的にはどうも落ち着かない。

もちろん医療知識があるわけじゃないので口は出せないが、死亡率が高いのを実感してしまった。

一瞬ポーションを配りたい衝動に駆られたが、原価がある以上ずっと配り続けることは出来ないし、買った人にも恨まれるだろう。

なんとか自重するが、辛いものがある。  
来るんじゃないかった……。

せめて一番重病っぽい人を探そう。

再生確認の怪我の方は力人限定だけど、そっちも出来るだけ重体の人を優先したい。

「すみません」

病氣の人って誰が重体なんて分りにくいなあ。

とりあえず一番やつれてて顔色の悪い人を選んで、声をかける。

やつれて骨と皮になってるような感じのおばさんだ。

着てるものも粗末だし……重病って言うより生活に疲れてるムードだが。

多少の病氣なら家で療養するだろうから病氣のせいなんだろうな。



「はい……？ どなた？」

掠れた弱々しい声。

返事のあと、咳き込む姿が辛そうで思わず背をさすってしまっ

「だ、大丈夫ですか？」

げほっとか血を吐きそうで怖い。

昔のドラマでよくある結核とかそういうのを連想してしまっ

治せるといいのだが……。

しばらくして収まったようなので改めて自己紹介をする。

「はじめまして。ハヤトと言います」

「はあ。ハヤトさんですか。私はマリイと申します。私に何かご用

でしょうか？」

どこか不安そうに問いかけてくる。いくら見知らぬ人間とはいえ、  
そこまで警戒しなくてもいいだろうに。

「うあ！？」

いきなり足元を何かに蹴られた。

たいした衝撃ではなかったが、あたりどころが悪かったのかちよ  
つと痛い。

そして続け様に2度3度と蹴られる衝撃。

「いたた、なんだ？ やめろって！」

いつの間にか足元にいた子供に全力で攻撃されていた。

「まあ。サファト、やめなさい」

俺の奇声にびっくりしてたマリイさんが慌てて止めてくれるが子  
供はなかなか止まらない。

取り押さえるにも小さな子供を乱暴に扱うわけにもいかず、なか  
なか取り押さえられない。

魔法なんか使ったら潰すだろうし。

しかもこの子供細っこいんだよな！

腕も俺が全力で握れば碎けるんじゃないかと思うくらいだ。

服とかから鑑みても、単純に栄養が足りてない感じだ。

「お母さんをいじめるやつはやつつけてやるんだ！」

どうやら子供は母親のところにいる見られない人間「敵」という認識らしい。

どんな環境なんだ？

そして意外と言葉がはっきりしてるので思ったよりは大きいようだ。

5歳児くらいかと思ってたんだが。

やっと疲れたのか蹴るのをやめた子供を母親の手に押しつけ身の安全を確保する。

子供とはいえ手加減なしだと結構痛かった。

体力は尽きたようだが、敵意は残ってるらしくこっちを睨んでる子供と真っ青になっておるおるしてる母親。

まるで悪者になった気分だ。

「あの、マクベスさんに借りたお金は必ずお返ししますから……子供はやったことです、許してください」

ペこぺこと頭を下げる母親。

どうやら借金取りと間違えられているらしい。

貧しそうに見えるのは間違いではないようだ。

「俺はマクベスつてのが誰か知りませんし、子供のやったことですからそんなに怒ってないですよ」

母親を守るうというのは立派な心がけだ。多少の痛みくらいは大目に見るぞ。

「え……。まあ、本当にごめんなさい。ほら、サファトも謝ってっさらに謝られてしまった。

借金取りの使いなら多少いい気味だって気分でもあったのかな？ さっきより必死だ。

「かまいませんよ。母親を守ろうとするなんて、いい子じゃないですか」

ちよつと痛かったけどな。

「ごめんなさい……」

子供も俺が敵じゃないと理解出来たのか謝ってくる。

この年頃って生意気盛りって気がするんだが意外なほど素直だ。  
「俺も突然押しかけて驚かせましたから仕方ないですよ。実は今、新しい薬を作ってます。実験につきあってくれる病人を探してるんです」

マリイさんの罪悪感につけ込むように悪いが、これなら断りにくいだろう。怪しい実験じゃないので許して欲しい。

「実験、ですか……」

「最近売り出したヒーリングポーションを知りませんか？ あれの病気版です」

死にかけてる娘さんに使った人とかいるはずだし、病院にも噂くらはい流れてるだろう。

病気と怪我では違うが、一応の実績と信頼になるといいのだが。

「あなたが、あの奇跡の薬の作製者なんですか!？」

奇跡つて。そして大声出してその反動で咳き込んで死にそうにならないでくれ。子供が涙目になって小さい手で母親を撫でてるとか、こっちの罪悪感を刺激しまくるんだから。

「奇跡とかいう話は知りませんが、ポーションを最初に売り出したのは確かに俺です」

目を丸くして驚かれると微妙だな。

異世界知識と世界の加護の結果の産物だしなあ。俺個人の力じゃない。

「それで、次は病気を治せる薬を作ってみましたのですが病気の方に知り合いがいなくて。それで重そうな病の方に手伝って頂けないかと」  
さすがにちよつと不安そうだな。何を飲まされるかわからないしな  
い。

「俺の家で経過観察含めて数日は過ごしてもらおうことになりましたが、一日に銀貨1枚出しましょう。お子さんが心配なら一緒に来てもらっても構わないですし、治らなかつたり万が一にも悪化したりした場合は治るまで責任を持ちます」

可能な限り誠意を尽くしてみたが、どうだろう？ これでダメな

ら諦めるしかないが。

出来れば受けて欲しいな。早く良くならないと借金とか大変だろうし、もし病死とかしたら遣される子供が不憫だ。

報酬はもうちよつと考えてもいいのだが：日本円で一日10万。

これ以上は辛い。収入的にはまだ余裕っぽいけど、俺の気分が限界だ。治験のバイトとか高額報酬っていう噂もあつたのでがんばってみただけど、元が小市民だからなあ。

「ぎ、銀貨ですか？ あの、ほんとうに？」

「やっぱり大金だよな。よかった。」

「ええ。治す自信はあるんですが、やっぱり心配でしょうし。万が一にも悪化したり治らない可能性もあることを考えての金額です」  
ヒーリングポジションみたいに俺自身で試せてればもっと安く持ちかけただろうが。

……境遇に同情してしまったというのも否定出来ないけど。

病気が治っても借金を返すために無理をして働けばすぐに身体を壊しそうだもんな。

そして次に病になったときキュアデイズポジションを買う蓄えがあるかは分らない。無ければ借金スパイラルまっしぐらだ。

そういう境遇の人は多分たくさんいるのだろう。

全員救えない以上、マリイさんを助けたいと思うのは偽善だといふのは良く分ってるが……。

目の前で手が届く人を放置する強さは俺にはない。

「ぜひつ。ぜひ、お願いします」

だからそんな風に心底嬉しそうにされると辛い。

声をかけたのは偶然だった。サファト君が来なければ、きっともつと安い値段で提案して、それでもマリイさんは受けただろうから。「じゃあ、早速移動してもらおう……あ。動けますか？」

無理っぽいな。というか、動けるくらいなら入院してないか。

結局貸し馬車と人を頼んで運んでもらうことになったのでマリイさんには支度をしてもらい、夕方に迎えに来ると約束する。

そしてその間に四肢に欠損を抱えてる人を探すことにした。

繭はまだ全く出来ていないがキュアデイジーズポジションと同じように自分で実験できないのが心配になってきた。

セレスにいきなり使うより、リスクを承知の上でつきあってくれる人を探した方がいいだろう。

もし万が一にも失敗したら困るしな。

自信はあるつもりだったが、キュアデイジーズポジションで失敗のリスクを説明してたらなんだか不安になった。

病院にはいないようだが、看護師さんに聞けばすぐに紹介してもらえるだろう。

近所に住むマードックという中年のおじさんを紹介してもらった。

元は細工師だそうだが仕事中の怪我が元で手を失い、妻子が働いて何とか生きていたといった有様だった。

手先とか繊細な動きをする場所の再生が一番大変そうだし、手で成功すれば足も心配ないだろう。

早速失敗の可能性も説明した上で協力を求めた。日当はマリイさんと同じく銀貨1枚。

繭なんて得体の知れない物体での治療をそれでも了解してくれたのはもう一度手が治る奇跡に賭けてるからだろう。

ポジションの実績を信用してくれたというのもあるのだろうか。

マードックさんはもともとは腕のいい職人さんだったようだし手が治ったらドッグググ風お守りのチェーンとか、水晶球の装飾なんかもお願いできるかもしれない。

そんな仕事元通り出来るくらい完璧に治るようがんばらないとな。

マードックさんには直接夕方に家に来てくれるよう頼み、急いで

市場に向かう。

夕方まではまだ時間があるが、目当てのものがすぐ見つかるとは限らないからな！。

これで材料がそろわなくて協力者はいるのに繭が出来ませんでした、とかつてのは悲しい。

明日には完成して試せるようにしないと。

病院（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

1 / 3 0 2 3 時

指摘を頂き、最後の方を追記いたしました。

先に読んでくださった方、申し訳ありません。

けー様、ご指摘ありがとうございました。

## 甲冑（前書き）

前話の「病院」ですが、指摘を頂いたため

1 / 3 0 2 3 時頃、加筆・修正させていただきました。

作中の最後の方になります。

先に読んでくださった方、申し訳ありませんがご確認ください。

けー様、ご指摘ありがとうございました。



すぐに買い物に行こうと思ったのだが、急に人が来て泊まるとなると食事とか部屋で困りそうだったので一端家に戻り、クリストフアーさんに説明しておく。

さすがに執事というだけあって、部屋の手配から食事まで全部手配してくれると心強い返事がもらえた。

そのうえ貸し馬車の方も手配して、下男兼庭師のサムさんが夕方病院まで来てくれることになった。

宿だったらこうはいかないよな！。細かいことに手を取られない分、空いた時間で再生薬を作れってことなんだろうけど、とても助かる。

このまま上げ膳据え膳の生活になれてしまったら宿屋暮らしにはもちろん、一人暮らしなんて出来ないだろうな！。

権力に執着したあの女の気持ちがちよっと理解できてしまった気がする。

あんな風にならないよう気をつけよう。

自力で手に入るものだけでなく、それ以上を求めて人を利用したり傷つけたりするような人間にはなりたくないからな。

市場で秤と分銅、たらいに瓶。鏡の素材に籠。必要なものをどんどん買い込んでいく。

大体の小物は見つかったのだが、ガードマン用の人形で良いものが見つからない。

市松人形的なものがあれば、一番良かったんだけどな！。

動いて襲ってくる市松人形。この恐怖は日本人なら誰でも納得してくれると思う。

たとえ物理的な攻撃力が皆無だとしても、俺は泣いて逃げる自信があるね！

全然威張れないが。

同じ意味でビスクドールとかもいいと思うんだが、残念ながら全然見つからない。

百歩譲って土偶とかもいいかもしれないと思い始めたころ、甲冑をマネキンみたいなのに着せてディスプレイしてる防具屋さんに出会った。

胸当てとか腕当てとか籠手とかパーツで売ってる店は多いのだが、全身揃えて売ってる店を見るのは初めてだ。

セツト売りが少ないのは多分部分ごとに消耗が違うからなんだろうな。

頭と胸とか、一番守りたい部分には金をかける人間も多いだろうが、籠手なんかは動きにくくなるって使わない人もいるだろうし。

はじめは珍しいなー、くらいにしか思わなかったのだが。この甲冑が動いて襲ってきたら、きつとかなり怖いよな。

動く鎧ってゲームとかでは定番だし、武器を持たせて飾っておけるし。

何より人形より飾りやすいよな。

うん、ガードマンはこれにしよう。玄関に一体、部屋に一体、食堂にっでっどんどん増やしても怪しくないのもいい。

取りあえず一体買って明日にでも配達してもらおう。

ついでに洋館なんかでよく見るような剣の飾りも用意しよう。剣を2本クロスさせて飾ってあるやつ。

装飾性の高いものになるから丈夫さにはかけるだろうが、踊る剣とかちよつと格好いいし。

甲冑と合わせて不意打ちすればそうそう回避できないと思う。

これで警備は万全だな。

買うものを昨日のうちに決めておいて良かった。変更もあつたけど、予定があるとだいぶ違う。市場も何度か見て回ってだいぶ目当

てのものがどこにあるか、見当が付くようになってきたし。

ただ、困ったのが薬草だ。

毒消しの方は、どんな毒でも中和できるっていう便利な薬はないようだ。

そもそもあつたらわざわざポーションにしくてもいいのだが。麻痺毒に対応した薬草とか、しびれをとる薬とかいろいろと多彩すぎて困る。

一応代表的なものはあつたので、数種類の薬草を混ぜて作ってみようかな？

でも必要なのは毒消しというか「身体に異常を起こす物質の無害化」だよな。

薬草を使ってそれぞれの効能を強化する方向で作ると、対応してない毒は消せないってことになるよなあ。

魔法でその辺をカバーするわけだが、それならむしろ最初から薬草なしでもいいような気がする。

水から作ればいいんだよな！

でもそうすると必要な魔力が増えまくって俺以外が作るのがものすごく大変になるし。

一応数種類使って作って、対応してない成分は魔法でカバー。

それが一番魔力を節約できるかな？

うん、その方向で行こう。

そして同じように病気を治すための薬草のほうだが。これがまた種類が多すぎてどうしようもないのだ。

日本の薬局でもそうだよな！。鎮痛剤だけでも頭痛用、腹痛用、歯痛、筋肉痛用。腰痛用とか生理痛用くらいの種類が出てた気がする。

胃薬も食べ過ぎ用に胸焼け用、胃酸の出過ぎに食べ過ぎとかもあ

つたっけ？

とにかく多すぎる……。

試作品は水から作ったが、薬草からはどうやっても出来そうにない。

毒消しのように代表的な薬草を使って作るのも数があまりに多いので無理がある。

やろうと思っただらお伽噺の魔女のようにでっかい鍋でぐつぐつ煮込むことになりそうだ。

一瞬楽しそうだか思ったが、笑いごとではないのでやめておく。もう諦めて病気用は水から作るしかないかな。普及しなさそうだが、不治の病以外はこれまで通り療養と薬草でがんばって治してもらおう。

そして難病だけは高価なポーションで治す。……だめか。

そうなるとお金持ちだけは些細な病でもすぐ治せるが貧しい人は死を待つのみってことになりそうだな。

どうするべきか。

取りあえず今出来てる分が効くかどうかだけ確かめて、普及させるための方法はまた考えよう。

うっかり道ばたで考え込んでたので地味に注目的になってた……。

気を取り直して宝石店で小さな水晶をいっぱい買ってみたい、ノリと勢いで宝石もいくつか買ってしまった。

お守りにする金属板に宝石で字を書けば見た目にも綺麗で贈り物にはよさそうじゃないか。

俺用は普通にドッグタグみたいな見た目で十分だが、女の子にいかにもドッグタグっぽいのはどうかと思うし。

セレスみたいな子にドッグタグは似合わないよな。

ドッグタグが何かって分るのが俺くらいだとしても、それでも気になるものは気になる。

せつかく贈るなら良いものを贈りたいしな。

センスには自信が無いが、それなりにがんばってみよう。

その後は特に何もなく、すでに待ってたサムさんとマリイさん母子と合流し家に帰る。

家ではマードックさんが待っていてくれたのだが、繭も完成していないことだし今日はゆっくり休んでもらうことにする。

マリイさんには先にポーシオンを飲んでもらうことも考えたのだが、万が一にも容態が急変したりしたら繭の作成が遅れそうなのでやめておく。

来てもらうのが早すぎたかな？　とも思ったが、薬を飲む前の状態を記録してもらえば飲んだあとの改善状況が分かりやすくなるので3日間ほど記録をつけてもらうことにした。

病気状態のまま3日も記録するは長すぎるかとは思ったのだが、病気は外からでは良く分らないからなあ。

きちんと記録して確実に治ったか判断できるようにしたい。

マリイさんが治ったら、もう数人に協力を要請した方がいいかもしれないな。

その間に他の人でも作れるような方法を考えないと。

とりあえず今夜中に繭を作って、明日一日は繭の効果と調整かな。明日時間が空いたら、お菓子と結界風味な水晶球を作ろう。

で、明後日セレスに会って。

……繭が完成して足が治れば会えなくなるのか。

一瞬もつと時間をかけて作ろうかとか思ってしまったが……。治るものを長引かせるなんて酷いことは出来ないよな。

足が治れば、きっと嬉しそうに笑ってくれるだろうし。悲しげに俯かれるのはもう嫌だ。

会えなくても、身体が元通りになって幸せに過ごしてくれるなら……いいよな。

うん、さつさと食事を済ませて繭作りに入ろう。

今夜の食事は平べったいパンとサラダにジャガイモぼいポタージュスープ。それに白身の魚に赤いソースが掛かったものがでた。だが失敗したのか、全体的にもさもさとして味が無かった。

マリイさん親子はマリイさんがベッドから動けないので部屋で食べるし、マードックさんも利き手が使えないのでみつともない食べ方になるからといって部屋で食べるから、結局また一人で食事だし。

せめて美味しいものが食べたかったな！。

味気ない食事をそうそうに切り上げ、繭を作るために現在水の計量に勤しんでる。

1%弱の塩分を小さな秤で計算するのは思った以上に大変だった。何せ水を計るのも計量カップがないし。重さで計算するしかないわけだ。

買ってきたカップに入る水の量から塩の量を計算して一杯、二杯を数えつつたらいに注いでいく。

魔法がある世界なのに妙に地道な作業だ。

さすがに生理食塩水は魔法では出来なかったので仕方ないけど。

そんなこんなでたらい一杯の生理食塩水の完成。

がんばった。途中で数が分らなくなつてやりなおしたのもいい思い出だ。

思い出したくないけど。

あとは魔力を注ぎながら水をかき混ぜていくだけ。

「異世界特製・魔力による肉体回復。魔力によって記憶の中の四肢を再生！ 本人の魔力よって最適化を実行いたします」

別にテレビ通販のファンだったとかじゃないんだけどなー。

でもひとつの商品相手に30分くらい延々と絶賛されるとすごくいい品のような気がするあのアピールはすごいと思う。

だからかな、胡散臭いCM風呪文が一番イメージしやすいのは、失敗するよりマシだし、このままでいいか。

数回呪文を繰り返し、たらいの中で白い粘土状の物体が完成した。最後の方はかなりの重さになったのでかき混ぜるのが大変だったが、これで大丈夫だろう。

明日マードックさんに使ってもらって性能を確認しなきゃな。

さすがに今からってのは迷惑だろうし、俺も疲れた。主に腕。

あとはポーシオンだけ作って今日は休もう。

おやすみなさい。

甲冑（後書き）

ガーディアンには甲冑がいいのではないかという意見を頂きましたので使わせていただきました。

これで人形やぬいぐるみを飾るのが趣味にならないですみませう。ライ様、東雲様、ありがとうございました。



## 結界

目が覚めのは、まだ薄暗い時間だった。

どうも夢見が良くなかったようだ。どんな夢かは覚えてないけど、嫌な気分が目覚めた。

二度寝する気にもならないので気を取り直して朝食までに鏡と、出来れば水晶球なんかを作っておこう。

鏡は一回作ってるので簡単だが、水晶球はどうしようかな。

いくつもの水晶を結合させ、大きくしていく。

片手位のサイズになったところで買ってきた水晶がなくなった。

ちよつと小さいかな？

結晶の中央あたりで円形に切り出したが、出来た水晶球は直径5センチくらいの可愛らしいサイズだ。

これにいろいろ字を書くのは難しそうな気がする。

でもこれくらいのサイズに細かい字で書き込む方が、模様っぽく見えていいかもしれない。

細かい装飾がされてるように見れば置いておいても違和感がないだろうし。

まあ、あまり見た目に微妙なら紫水晶とかでコーティングして字を隠せばいいだけか。

一応盗難対策に自爆装置を仕込もうかなー。

自爆は浪漫だよな！

とはいっても誤作動とかで爆発されても困るか。

俺が30日間触らなかつたら消滅、くらいかな？

うっかり放置して消えた時は諦めて作り直そう。一ヶ月も使わないようなら、なくてもいいくらいだろうし。

機能は「許可のない者は侵入禁止」「防音強化」「覗き見防止」

「攻撃魔法への耐性」「壁の物理的強化」

これだけあれば大丈夫かな？

銀を鉛筆状にして水晶に触れた部分が溶けて癒着。字を書けるようにする。

そうして水晶に細かく書き込んでいく。スペース的な問題で球の全体に細々と書くことになったが、何とか書けた。途中から鉛筆状じゃなくて爪楊枝状にしたのが良かったのかもしれない。

ぱっと見、字を知らなければ銀で装飾されるように見えるだろう。読める俺から見ると、なんだか微妙な出来なので紫水晶でコーティングしよう。

水晶の残りを使って、紫色をイメージしながら球を覆うようにして、完成。

これに魔力を通せば発光して効果発動。

魔力が減るにつれて光が弱くなり、消えたら効果消滅。

途中で効果を切る場合は停止、再起動は再起動と言えば良いだけ。これで安心して過ごせるな。

野宿用にも効果を改造して結界アイテムを作れば一人旅も安心だ。当分旅はしれないと思うが、一応作っておこう。

探索者にも売れるだろうし。パーティで旅をしても、夜間の見張りが楽になるのは歓迎されるだろう。

野宿用結界アイテムを考えてるうちに朝食が出来たらしくアリスさんが呼びに来た。

結構早起きしてたようだが、時間がたつのが早いなあ。

食堂に行く途中にリリイにポーションを渡してギルドに届けてくれるように頼んでおく。

食後はマードックさんに繭の実験をしてもらって。

マリイさんは病状の経過記録をつけてもらうように話してあるからそのままでもいいだろう。

サファトの方はマリイさんの看病をしてるだろうし、ほっといていいかな？

お菓子を作る時間が出来たら、味見役に呼んでやろう。

ちなみに朝ご飯はオートミールっていうのか？

どろどろの粥っぽいにかだった。味も薄味の粥っぽい。

つまり、美味しくない。

せめてドライフルーツとかがはいってればグラノーラっぽいとか思えたかもしれないのになあ。

いろいろと残念だった。

残念な朝食を終えてマードックさんのところへ。

繭はうまくできてるか？

自分で一回も試してないのは初めてなので少し緊張する。

はじめに繭の効果と考えられる失敗を説明する。

俺が考えてるのは再生自体が出来ないと、繭の魔力が足りなくて指が足りないとか手のひらまでしか再生できないとか、そういう問題だ。あとは再生したけど動かないとか。

十分以上の量の魔力を込めたつもりだが、俺の主観だからな。全然足りないという可能性は否定できない。

あと、予想外の展開もあるかも知れないということも説明しておく。

それでも協力してくれるという意思の確認後、実験を始めることになった。

「マードックさん、少しでも異常を感じたら言ってくださいね」

大丈夫だとは思いますが失敗の方向によっては酷いことになる可能性

もあるのでちよつと怖い。

マードックさんの手は手首の部分から失われている。

傷は手のひらをざっくり切ったもので、それほど大きな傷ではなかったそうだが経過が良くなかったのだろう。

どンドン化膿して手がつけれなくなり、切断に至ってしまったらしい。

日本でなら消毒薬や抗生物質、化膿止めといった薬を使って治せたのかも知れない。

だが、この世界ではちよつとした傷でも命取りになる。

それをまざまざと思い知らされた。

ポーシヨンが売れる理由も分った気がする。

手首の部分に繭を取り付けていく。

手首＋ギブスくらいの量をつけてからそのままでは外れそうなのに気づいたので、シーツを包帯のようにくるぐると巻いて固定しておく。

破いてしまったので怒られそうだ。

マードックさんの目があるから元に戻すのも無理っぽいし。

あとで謝ろう……。

しばらく待ったが、マードックさんは繭に穴が空きそうなくらい注視してるだけで痛みなんかの訴えはない。

手が完成したら繭が割れるはずだが、その気配もないしそろそろ待ちくたびれてきた。

どれくらい掛かるんだろう、これ？

狭い室内で男2人固唾をのんでぐるぐる巻きの手を眺めるという微妙な空間ができあがってしまった。

所在ないといふかなんというか。

「なにかかわったことはないですか？」

「いえ、なにも……」

話を振ってみたが、一言で終わってしまう。

俺にここでいきなり世間話を切り出すほどのスキルはない。

かといって、放置してお菓子でも作って来ようってわけにはいかないしなあ。

居心地の悪い沈黙のせいで時間がなかなか過ぎないし悪循環だ。

これ、もし数日かかるとかだったらどうしよう？

そんなことまで悩みはじめたころ、ようやく動きがあつた。

「え？ すみません、ハヤト様。魔力が減っていくのですが……」

あ、ちよつと顔色も悪くなってる。

「大丈夫ですか？ 再生した部分の調整に本人の魔力を使うのは説明しましたよね。そのせいだと思つんですが」

調節用の魔力が足りなかつたらどうなるんだろう？

マードックさんの様子を見る限り大量に消費するわけではないよ  
うだが、腕や脚なんかは関節ごとに数回に分けて再生する方がいい  
かもしれない。

「はい、もう大丈夫です」

「魔力はどれくらい消費しました？」

人によつては手首からくらいでも数回に分ける方がいいかもしれ  
ない。

「1/5くらいでしょうか。すみません、魔力が多い方ではないの  
で……」

つてことはよほど少ない人じゃない限り関節ごとに再生すれば大  
丈夫かな。

魔力が余つてたら続けて再生すればいいし、残存魔力が心配なら  
次の日にする。

それで安全に出来そうだ。

足りなかつた場合どうなるかも気になるが、試すわけにはいかな  
いだろうしなあ。

そして、包帯の隙間からゆっくりと繭が割れていくのが伺えた。

本人の魔力で最終調整だからな、それが終わったのだろう。

大体2時間くらいか？ 主観では一日くらい掛かった気がするが、昼食もまだだしそれくらいだろう。

マードックさんが信じられないものを見たような表情で慌てて包帯を剥いで、現れた手に触れている。

「動かせますか？」

見たところ指は5本揃ってるし産毛や爪まで再現性はばっちりだ。ここまでは問題ないだろう。

「は、はいっ」

手を確かめて呆然としてたマードックさんだが、声をかけると手を動かそうとがんばってくれた。

が、どうもぎこちない。

ゆっくりと閉じて、開く。

かなり遅い、そして多分力も入ってない。

動くだけマシだとは思うが状態は良くなさそうだ。

「動きますっ、ああ、俺の、俺の手が………っ！」

感極まったように手を抱えて泣き出すマードックさん。

失った手が戻ったことを喜んでくれるのは嬉しい。

嬉しいが、出来れば完璧なものを再生したかった。

高望みだとは思う。本来なら二度と戻らないものが戻ったのだ。

多少不自由だろうが、喜ぶところだろう。

でも、満足に動かない手では仕事は出来ないだろう。そう思うとどうしても残念に感じてしまう。

「どれくらい動きますか？」

多少落ち着いたところを見計らって確認してもらおう。

数回握ってたがだんだんと動きは良くなってるようだ。

長いこと使ってなかったからリハビリが必要とか、そんな感じだろうか。

「動かすにつれて慣れて来ました。魔力は大体8割消費しましたが」  
魔力使ってるのか。

最終調整って現在進行形か？

馴染むまでは魔力を消費していくんだろっな。

魔力が足りないとか動かない、と。

魔力が多ければ一日でリハビリ完了。少なくとも数日あれば大丈夫か。

ちよつと意外だったが、成功して良かった。

「じゃあ、完全に動くようになるまでもう少し滞在してもらえますか？ 一晚寝て、明日になればもっと馴染むでしょうし」

「わかりました。あの、もう諦めていたのに……こんな素晴らしい魔法を使って治していただいて、お礼の言葉もありません。この恩はいつか必ずお返しします。ありがとうございます！」

床につきそうなくらい深々と頭を下げられた。俺の親くらいの年の人にそこまでされると逆に申し訳ない。

「気にしないでください。俺も協力してもらえて助かりましたからぱたぱたと意味もなく手を振ってしまう。」

どうもこういふ場面は落ち着かない。

「何かあったら教えてください」

それだけ言っただけで部屋を出てきたが、マードックさんは俺を拝みそうな勢いで礼を繰り返してた。

ちよつと気恥ずかしかつたが、成功してよかった。

昼食を簡単に済ませてから念願のお菓子作りのに挑む。

とはいってもレシピなんて知らないから魔法頼りだが。

一応言い訳は考えてある。

「遠方から駆け落ちしてきた母親が作ってくれたおやつ」だ。

俺が小さいときに亡くなってしまったので詳しいことは分らないが、何となくの材料は覚えてるし、味も覚えてる。

これで作り方も材料も知らないのに完成型は知ってる理由になる

だろう。

旅の途中で食べた、とかいう言い訳も考えたがそれだとこの料理なのか、って聞かれそうだし。

母親が遠くから駆け落ちしてきたってことにすれば追跡はまず不可能だろう。

俺自身は遠方のカールネって半年ほど前にモンスターの襲撃で壊滅した村の生き残りという設定だ。

カールネの生き残りは多くないし比較的新しい開拓村で、出身も様々な人間が集まって出来た村のことだ。たまたま知らないだけだと言い張れる。

ポーシヨンの研究をしてて引きこもりがちだったと言う設定もつけられるし。

ポーシヨンを長年究したのに傷跡を消す薬なんかはすぐ完成してのがおかしいが、原型はその頃に作ってあったと言おう。実際、キュアディーズポーシヨンやキュアポイズンポーシヨンはヒールポーシヨンとほぼ同じ製法だし。

半年の足取りが追えないのが問題かな。大きな街なら一介の旅人なんて忘れられて当然だが、通過したであろう村に痕跡がないし。

過去の話は話したくないって押し通すかなー。

話したくない、思い出さたくないと言っておいて、それでも追求されたらカールネの生き残りってことを漏らせばそれ以上追求しにくいだろう。

まあ、半年くらいなら金がなかったので野宿を繰り返して移動してたと言えれば何とか誤魔化せるかも知れないが。

……無理かな？

嘘を積み重ねるとばれたときに困る。話したくないで通せる限りはそうしよう。



今から作るのはクッキー。これくらいなら魔法抜きでも作れそんな気がするが、どうも粉とバター分量とかが思い出せないので結局魔法便り。

「これが完成形。小麦粉とバターと砂糖で作れるはずなんだけど。試してみてくれるか？」

サリユーさんに頼んでおく。ちなみに砂糖は例のサトウキビっぽい植物から魔法で精製。

味の方は俺の記憶通りさくさくしてバターの風味が効いてる。そして当然甘い。

サリユーさんもサファトも夢中で食べてくれた。

「はい。ポテチといい、こんなに美味しいものがあるんですね。がんばりますっ」

うんうん。クッキーは簡単だって聞いた気もするから完成を楽しみにしてるよ。

そしてサファト。クッキーかすだらけだ。

甘党だったのか？ 飲み物もなしでかなりの量を食べてる。

口にあったようで何よりだが。

取り上げないから、落ち着いて食べる。

追加で作ったのを与えておく。

明日はセレスに会いに行く日だからクッキーも持って行こう。気に入ってくれるといいのだが。

さて、あとはお守りか。

怪我をしそうになったら魔力でシールドを作る感じか。

指先をちよつと切るとかの日常の怪我には反応しない方が便利かな？ 家事なんかをしているときにシールドが出てきたりしたら二次災害が起きそうだし。

でもどれくらいか怪我をするか判断するのは難しいか。悠長に判断してたら間に合わないとか、思わぬ大怪我になるってこともありそうだし。

うーん、「害意のある攻撃に対してシールド展開」かな。これだと日常生活上での怪我は防げないか。

交通事故なんかは少ないと思うが、それでも意外な事故はありそうだしなー。

本人が危ないと判断したら発動……だめか。気付かなかったらアウトだ。

いつそ常時展開……いいかもしれないと思ったが、盾が周りを囲んでると一可動型引きこもり ヤドカリ っばい。見た目的にアウト。

仕方ないので本人の判断で発動出来るようにしておく。気付かなかったときのために怪我の治癒もつけておいた。

本人が気付く前に即死した場合はどうしようもないが……これは今後改良しよう。

取りあえずこれで暫定バージョンだが完成。

あとは別に致死ダメージを肩代わりしてくれる宝石とか作れないかな？ 宝石じゃなくてただの石でもいいような気もするが間違っ  
て捨てたりしたら困るしな。

でも実験が果てしなく難しそうだが。

動物実験しかないよなあ。ちよつと気が進まないが、人間で試すなんてできないし。失敗したときは食用になってもらい、尊い犠牲に感謝しよう。

また材料含めて調達してこないと。

## 結界（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。



## 魔法陣

今日は昼からセレスのところへ行く日だ。

朝のうちにマードックさんの様子を確認。何事もなければセレスの足を治せるだろう。

関節ごとに小分けするとして、今日は足首までか。魔力量が多ければ足全体でも良いかもしれないが用心に越したことはない。

そう考えると出来れば魔力量の多さごとに何人が試しておきたいくらいだが。

一応の安全性は確認したが、万全の態勢かは疑問が残る状態だと話して確認をとってみよう。

魔力量の方などを考えて試した上で、となったらもう少し実験を手伝ってくれる人を探さないと。

最初はリスクは平民に負わせるのかって反発したが……。

こうして考えると領主さんは援助と引き替えに完成した技術を得られるし、平民でお金のない人でもリスクと引き換えに怪我が治る。そう思えば悪いことではないのかも知れない。もちろん同意の上でなら、だが。

うん、もし実験を続けることになったら、出来るだけ貧しい人に協力を頼んでみよう。繭が普及しても購うのが大変そうだし。

今日の予定を考えながらお土産なんかを確認してたのだが。

一晩たって冷静になってみるとお守りが微妙すぎる。なんかこう、鑑札のような無骨さだ。ドッグタグってそういうものだけど。

いくら装飾性を高めても金属板の上ではどうしても見た目に難があるな。

機能を詰め込みすぎてでっかくなってるし。

自分用なら別に構わないんだけど。基本ローブだから服の下にいてもいいし。

でも女の子に贈る勇氣はないな。ドレスとか合わないどころじゃないし、隠しようもないし。

そもそもセレスの首に掛けたら……折れないよな？ テンションが上がりがまくってたようで、作ってるときは気にならなかったがこうしてみると怖くなる重さだった。

折れることはないにしろ、鎖で首に吊してたら痣くらい出来そうだな。装飾を凝らしたセレスの分と違って、俺の分は字を彫り込んだだけだからそんなに重くないが。

もうちょっと考えよう……。

性能の確認もしておきたいから、またの機会にするか。

すぐに足の再生を開始する場合でも関節ごとなら最低でも4日はかかるし、経過観察を考えればもっと時間があるよな。

それまでに良いものを考えておこう。

せっかく作った今回は……収納鞆に放り込んでおこう。壊すのはもったいないし。

様子を見に行くとマードックさんは食事中だった。

オートミールっぽいものを食べていたようだが、俺を迎え入れるとかしこまって食べるのをやめてしまった。

「おはようございます。食事にすみません。俺に構わず食べてください。経過はどうですか？ 痛みとか、魔力量とか」

直立不動で迎え入れられても困る。昨日から様子がおかしいんだよな。

「は、はいっ。朝起きたときには以前と全く変わらず動くようになりました！ 魔力量は半分程度までしか回復してませんが、痛みは全くありませんっ」

なんでそんなに緊張してるんだろう？ 俺に向ける視線もなんか居心地悪い感じだしなあ。

でも魔力が半分か。昨日より完璧に動くようになったってことは、回復しなかったというよりは寝て回復した分また使って調整したんだろう。

支障がないなら大丈夫か？ もっと魔力が少ない場合どうなるんだろうなあ。魔力量は個人差があるから分りにくいな。

いっそ魔力回復ポーションでも造って飲みながら再生させればすぐ動かせるといえるかも知れない。

っと、そういえばルイに頼まれて買った花茶って魔力回復促進効果があるんだっけ。あれでいいのか。

お茶にしては結構高かったが、魔力回復ポーションの値段よりは安いだろうし。

わざわざ作る必要はないか。寝たら回復するんだし、睡眠薬とかでも良いかもしれないし。

「よかったです。念のため今日は留まってもらえますか？ 明日には報酬を渡すので帰ってもらって構いません。何かあったらまた連絡をください」

「は、はい！」

勢いよく頭を下げしてくれるマードックさん。腰の低い人だなあ。

せっかくだし、このまま手が治ったら細工師としての仕事を頼もう。顧客を取り戻すまでは時間が掛かるだろうし、それまでは助け

てもらえるだろう。

俺のセンスの無さはちょっと深刻だが、細工師ならデザイン力も期待できそうだし。

マードックさん作成の装飾品に俺が仕掛けをするのが一番見た目的にマシかも知れない。

いい人にコネが出来たかな？

「じゃあ、食事中にお邪魔しました」

俺がいると落ち着いて食べられないようだし、あんまり邪魔しないようにしよう。

なんだか妙に畏まれてるのは命の恩人的な意味なんだろうか。実験を手伝ってもらって俺も助かったのだが、再生の衝撃はそれどころではないようだ。

改めてこの世界にはない治療法を作ってしまったことを実感するが……。

覚悟の上だ。このまま進めるしかない。

でも一応身の回りの安全と警戒はキチンとしよう。表に出してるのは治療用品ばかりだから、悪用は難しいだろうが。

でもお守りを奪われたりして悪人が無敵モードになったらしゃれにならない。使用者に限定をかけるべきかな？ 付け加えておこう。

あとは収納鞆も俺以外は開けられないようにしておこう。

とりあえずはこれくらいで大丈夫かな？

セレスのところへ行くまでにはまだ時間があるのでマリィさんの病状を聞きに行こうかと思ってる、クリストファーさんに呼び止



められた。

配達を頼んでた甲冑と剣が届いたそうだ。

クリストファーさんの先導で玄関ホールに行くときと店で見たときより遙かに磨かれた甲冑があった。

昨日届くと思ったのに遅いと思ったら、磨いてくれてたのか。別によかったんだが。

剣も一緒に届いたので部屋に置くことにする。

「飾られるのですか？」

「ああ。あんまり広いからさ、なんか飾ろうと思ったんだけど、絵とか分らないし」

甲冑の善し悪しも分らないけど、これは実用品だし。取りあえず使えればいいんだ。そう言うわけにはいかないが。

「それでしたら彫刻などを用意いたしましょうか？」

とても婉曲だがこれには飾る価値がないって意味なのかなー？

実用品だとは言えないし、どうしよう。

彫刻が歩き出して襲ってくるのはちょっと面白いかも知れないが、きつと高価な品だろうから字を書き込むのはやめた方がいいだろう。

「いいよ、これが気に入ったんだ。俺も一応冒険者だし、こういうのに心惹かれるんだよ」

ちょっと苦しいわけだが、大丈夫かな？

「そうですか。差し出がましいことを申しました。申し訳ありません」

「いや、そんな気にしなくても。解らないことが多いからさ、教え

てくれると助かるよ。よろしくな？」

今回ののは教えてもらってもどうしようもないわけだが。その他のことは教えてもらわないと解らないわけだし。変に遠慮なんかせずに、いろいろ教えて欲しい。

そういうと微笑んで一礼してくれたので気を悪くしたわけではないよな？

取りあえず甲冑と剣は部屋に運ぶだけにしておいて。マリイさんの様子を見て、セレスのところへ行かないと。

ちよつと忙しいな。今夜はゆつくりしよう。

昼食後に迎える馬車が来たので、使うかどうかは解らなかったが一応繭を持って行く。

馬車には騎士さんも付属。連行されてるみたいで苦手なんだが、護衛のつもりなんだろうか。

しかも服が全員お揃いのせいかな？ 区別もつかないんだよな！。話しかけても沈黙か単語一言しか返ってこないのが気まずい。

セレスの怪我の原因を聞いてみたかったんだが、この空気の中で問う勇氣は俺にはない。

人目があるわけじゃないんだし、もう少し砕けてもいいだろうに。それが仕事なんだろうが。

でもこの人たちも任務とかで怪我をすることがあるだろし、今度ポーシオンでも渡しておこうかな？

それでちよつとは取っつきやすくなると嬉しいし。

あ、でも、賄賂とか思われたらまずいな。

いつそ領主さんに渡して騎士とか兵士が怪我をしたら使えるようにしてもらおう方がいいか？

数がないから無理か。

樽に水を入れて熟成一ヶ月で中身がポーションに！的なものでも作ろうかな？

樽は使い捨ててことにすれば、値崩れもおきないだろうし。

よし、ちよつと考えよう。

あ。

キュアデイズポーションはそれでいいような気がするな。

紙か何かに魔法陣つぼく希望効果を書いて、その上に水入りの瓶を設置。あとは魔法陣に魔力が行き渡るまで毎日がんばれば、完成。これで俺以外にも作れそうだ。

医者の仕事は多少減るだろうが、キュアデイズポーションで生計を立てる人も出てくるだろうから就業率的には変わらないと思うし。

ポーションは魔力込める時間が掛かる分、軽い病気なら今まで通り医者の出番だし。

魔法陣は回数制限と、複製出来ないように細かい模様をつけて漢字で書いておけばいいだろう。俺は魔法で原本をコピーすればいいわけだし。それで、ギルドを通して買ってもらおう。

本当なら無料で流して普及を優先するべきだろうと思うが。誰でも魔力を込める時間だけで病気が治せるってなると医者の仕事が激減する。

医者は今までの人生かなりの勉強をしてやつとなつたんだろうし、いきなり職を失わせるわけにも行かない。ポーションでかなり仕事を減らしてしまったとは思いますが……。完全失業はまずい。

普及につれて失業する人も増えるだろうが、急激に職を失うよりは転職の時間がある方がマシだろう。医者兼ポーション作成者って道もあるだろうし。

それでも恨まれるとは思うが、助かる人は増えるだろうし覚悟す

るしかないか？

失業率とか日本でも問題だったし、先に領主さんの意見を聞くべきかも知れない。

今まで以上に警戒されるとは思うが……仕方ないか。

敵ではないってくらいでいいから信用してほしいが、俺も向こうを信用してない以上無理だろう。

いきなり監禁して馬車馬のように働かそう、とか頭ごなしに命令してこないわけだし、悪い人じゃないのは確かなんだよな。

抱え込みたいのだろうが、監視してるにしろ立派な家をくれて行動を制限しないって方法をとるくらいだから尊重してくれてるようだし。

向こうにも利益はあるし、キュアデイズポジションの件くらいなら協力してもらえるかな？

なんなら魔法陣の取り扱いは領主さんに一任するってことにして利益ごと渡せばいいか。

そこまで考えたところで、城館についてしまった。

静かな馬車も考え事には最適だなー。

あとは帰り道で考えよう。帰りもどうせ静かだろう。

3日振りだが、前と同じように病室にはセレスとアナスタシアが待っていた。もちろん壁際には騎士が3名。

「いらっしやいませ。ハヤト様」

最初に比べたらかなりの歓迎ムードだ。セレスは傷がなくなったからか表情が明るい。今までは割と地味な服だったのがちょっと華やかになってる気がするし。

アナスタシアのほうは今日もピンク系の服で花のようだ。眼福眼福。

「元気そうよかった。あ、これ約束の鏡と、土産」

アナスタシアに鏡を渡してセレスにはクッキー入りの籠を渡す。

「気を遣っていただいて、申し訳ありません」

「やっぱり綺麗ね、この鏡！　こんなにはつきり映るなんて魔法みたい！」

どっちがどっちの台詞かすぐ解るな。顔も似てないけど、性格も全然似てない。

籠を見て不思議そうにしながらもまず礼を言うセレスに母親が昔作ってくれたお菓子を再現してみた、と教えておく。

「甘くて美味しいと思うけど。あ、甘いもの嫌いじゃないよな？」

「はい。じゃあ、お茶にしましょうか」

見慣れないお菓子を不思議そうにしながらも早速食べてくれるらしい。

今更気付いたが、セレスは良く分らないにしてもアナスタシアなんかは領主の娘だし毒物とかを警戒する立場だろう。

普通なら大して親しくもない人間の持ってきた見慣れない食べ物など食べそうにないが、食べてくれるってことはそれなりに信用されてるのかな？

何も考えずに持ってきてしまったが、無駄にならなくてよかった。

紅茶と一緒に摘んだクッキーは俺からすると普通の味だが、食感と甘さは女の子2人に気に入ってもらえたようだ。

サリーさんが製法を再現してくれたら城館の料理人に作り方を教える約束をした。

2人とも自分で作る気はないらしい。セレスは現在身動きが取れないからかな？ とは思ったが、アナスタシアも作る気はないようだから身分的なものか。

別に手作りクッキーが食べたかったわけじゃないんだが、少し残念だ。

「で、足の治療方法なんだけど。一応手首から先の再生は成功してる」

落ち着いたところを見計らって本題に入る。

ゆっくりお茶を楽しみたい気持ちもあるがセレスには一番大事なことだろうし早く話してあげないとな。

「ええっ！？ もうできたの!？」

「数日で完成するなんて……」

あ、騎士さんもなんか驚いてる。いつも彫刻状態で微動だにしないからうつかり存在を忘れるんだが、ここまで音を立てるなんて珍しいな。

普通ならもつと時間が掛かりそうなものを数日で一応の完成まで持ってきたと聞けば驚いて当たり前か。

どれくらい時間が掛かると思われてたのかは知らないが、急ぎすぎたか？

一応、経過観察する時間が足りないので数日後の様子も確認した方が安全だと思うこと。あと魔力量の多さによっては問題が出るかも知れないのでもう少し確認してからの方が安全だとは言っておく。

「ハヤト様の判断にお任せします。私の魔力量はあまり多くありませんし……」

一任されてしまった。

まあ、万全じゃない状態でやってくれとは言いにいくか。

「出来るだけ急ぐよ。待っててくれ」

「はい」

嬉しそうだなー。セレスは癒し系だな、この笑顔を見てるとがんばろう！って気分になる。

アナスタシアも嬉しそうだし。

繭の進展状況は3日に1度経過報告することになった。

3日に1度つてのは多いような気がしたが、アナスタシアの希望だ。はじめは7日に1度の予定だったのがお菓子が食べたい！という理由で変更になった。

俺的には頻繁に会えて嬉しいので文句はないが。

今度はなんにしよう？ クッキーの次だからケーキかな？ 材料に自信がないから再現は無理っぽいけど。

チーズケーキならわかるな。うん、チーズケーキにしよう。

そんなことを考えつつ多分こっから本番。

領主さんにも報告だ。



## 魔法陣（後書き）

間が空いてしまいました。

次回も少し遅くなりそうです。

最低週一更新は守れると思いますが、  
申し訳ありません

## 領主

領主さんのところにいるのは執事っぽい人だけだった。

内密の話だとは思わないのだが、毎回人払いするのは何でだろうな？

まあ、俺的には助かるからいいのだが。

「よくきてくれた。四肢の再生薬も順調なようだなによりだ」

「はい、ありがとうございます」

えーっと。話さなきゃならないのは再生薬のその後とキュアディジーズポーションの件か。あとはポーション樽も。

どっちも完成したらでいいといえいいが、準備というか計画を考えてもらっておく方がいいだろう。

完成品の配置なんかは計画的に行う方がいいだろうしな。ヒールポーションの時のように場当たりの対応は混乱になるだけだし。

作るのに失敗する可能性もあるから今すぐって話じゃなく、将来的に出来るようにしたいって話だが。

「セレス嬢には話しましたが、再生薬の方は協力者のマードックさんで一応の効果の確認は出来ましたが、対象の魔力によって効果に差が出そうなのでもう少し安全確認をしたいと思ってます」

鷹揚に頷くあたりすでに経過は知ってそうだな。

「この短期間で成果を出すとはたいしたものだ。納得いく仕上がりになるまでどれくらいかかる？」

ちょっと急ぎすぎてる自覚はあるんだが、悠長にしてると取り返しのつかなくなる人もいるだろうし仕方ない。

目立ちすぎて捕まったり、利用されそうなら姿を変えて逃げるしかないか……。

出来ればやりたくはないか、それも選択に入れておく方がいいだろうな。

「一ヶ月もあれば後遺症の有無も分ると思います。もちろん数十年後にならないと分らない問題はありますが」

「そうか。あまりに先のことまで心配しても始まるまい。問題がなければ、その頃には販売も可能か？」

販売もか。繭の方は俺以外が作る方法を考えてなかったな。うっかりしてた。

一回で作れる量はそれなりにあるし、しばらくは一カ所で提供して追々他の人でも作れる方法を考えよう。それこそ魔法陣を流用できるかもしれないし。

「可能ではありますが、量産は難しいかも知れません。努力はしてみますが」

「期待している。研究資金や、人手が必要な時はクリストファーに言えば可能な限り用意させよう」

思いつきり繋がりがああるし隠す気すらないようだ。逆に言えば俺に知られて困るようなことはないってことだろうか。

監視と言うより単純な連絡調整員って感じだな。そう思わせたいのかもしれないけど。

「それにしても、本当に早いな」

「ずっと研究していましたから」

何気なく、と言うふうに言われたので一応用意してある言い訳をいう。

たくさん作ってるから研究してたってのもどんだけ研究だけして形にしてなかったんだって感じたが。

実験に伴う資金がなかったってことで納得してくれるといいんだが。実際謝礼とかでかなり金が掛かるし。

「病床で研究してたのか？ レンフォード・グルテルグ殿」

え？

その名前に思いつきり反応してしまった。

うん、誤魔化しようもなくはつきりと。

ここまであからさまに驚いておいて他人ですって言うのも空々しいよな、どうしよう。

というか、なんでその名前が出てくるんだ？

俺が不審で調べたとしても王都まで往復出来る時間はないはずだし、調査なんかを含めればもっと時間が掛かるはず。

「以前あったときはずいぶん雰囲気が違うが、やはりか」

会ってたのかよ！

夢で見た記憶はないし、初対面の時そんな様子はおくびにも出さなかったよな、この人。

「前にその名の方に間違えられたことがあります、他人のそら似ですよ」

こんな陳腐な言い訳で通用するとは思えないが……うう、他に思いつかない。

マジで逃げるしかないか？

「似てるとは言っていないが」

……そうですね。

間違いなく詰んだな、これは。

逃げ道を求めて窓を見る。ガラスのはまった大きな窓だ。いつそ飛んで逃げるつてもありかも知れない。

問題はまだ飛んでみたことがないので飛べなかったり落ちたらどうしようってことか？

セレスの足のことなんかもあるし、いきなり捕らえられるってことはないだろうし焦って逃げ出す必要はないのかもしれないが、あの女には関わりたくないし、関わりがある人間として扱われたくない。

あの女 コンスタンシアに悪評がいくならいい。だが、有用な薬を作る人間の母親として、評価されたりするのは耐え難い。

あいつは俺の仇であり、レンの仇なのだから。

とはいえ、この状況を誤魔化すのはかなり難しいよな。

全部はとも言えないが、ある程度事実を話してでもあの女と二度と関わらないようにしたい。

ため息をひとつ。

覚悟を決めよう。

「俺は、レンフォードではありません。別人です。……彼は、死に

ました」

これは本当のことだが、どこまで信じるだろう？

この身体はレンのものだ。領主が前にあったことがあるというのだから間違えようがないだろう。

「確かに病死されたという噂は聞いた。だが、王都中に私兵を放ち探索した末の報としてはおかしくないかね？」

あの女、俺が逃げ出したのを捕まえて利用するのは無理だと諦めたのか？

長期にわたって死亡を隠してたからそれが限界に来たのかも知れないが、家出とか誘拐として探索は続けるかと思ってた。

「あの女……いえ。コンスタンシアは召喚魔法が使えました。レンフォードの死によって自らの権勢が衰えるのを忌避し、彼の遺体に俺を呼び入れたのです」

「……ほう？」

ちょっと興味を持ってくれたようだ。俺が別人だと言い張るのを聞いてかなり剣呑な視線になってたのがちょっと落ち着いた。

執事さんの無表情っぷりが逆に怖いが。

このまま俺があの人に気にならないことを主張して。薬屋兼道具屋をやっけていきたい。

「俺はこの国より遙かに遠い国で生まれ育ちましたからポーションなんかも国では普及していません。こちらにはないものを知っている、それは俺がレンフォードではないことの証明になりませんか？  
本来の俺の身体がどうなったかは、分かりませんがおそらくは生き

てはいないでしょう。だから、俺はコンスタンシアに関わりたくないのです。恨んでないと言えば、嘘になります。子爵家と正面切つて事を構える気にはなれませんでしたから」

一気に言い切る。嘘はほとんど言っていない。言っていないことはあるけど。

ポーションは普及してないが、ゲームなんかでよく見るから概念として普及してると言えば普及してると言えるだろう。ちょっと苦しいが。

「国に帰ることも考えましたが、流通してるものの違いなどを見てもとうてい交流があるようには思えません。帰路を探索するつもりですが帰ることが叶わないなら、こちらで薬などを売って生きようかと思っっています」

これであの女に引き渡すとか、捕らえて国のことやらこつちにない品の情報を引き出そうとされたらどうしようもないのだが。

でもこの領主さんなら無理矢理より穏便に協力関係を作る方を選んでくれるような気がする。今までのやり方もそうだったしな。

ここで俺を捕らえたらセレスの足を治す人間がいなくなるというのも考慮してくれるんじゃないかと思うし。もちろん敵対しそうな容赦はしないだろうが。

どきどきしながら見ていると少し考えた末に、ゆっくり頷いて。

「確かに作る薬や食物は全く知られてないものだ。遠い国の産物と言われれば納得もいくな。君はグルテルグ家とはなんら関わりのない者として扱おう。これからもよろしく頼む」

何とかこれまで通り生活出来るようだ。

単純に身元確認で聞いてきたってわけじゃないだろうし、これで信用されるとは露ほども思えないが。

「こちらこそ、よろしく願います」

「ところで、薬などで他には何が作れる？ 遠い国の有り様にも興味があるのだが」

素直に全部いうわけにもいかないよな。科学なんて理解出来ないだろうし。

「いろいろなものがありますが、領主様はその窓ガラスを作る方法をご存じでしょうか？ 私は知りません。そのように、身近にあったものでもすべてを作ることは困難で再現するにも時間が掛かります」

民主主義とか侯爵のこの人に語る勇氣もないし、そもそも語れるほど詳しくない。

経済学とかは初歩の初歩すら無理だ。農業その他も全滅。高校生に期待しないでくれ。

「そうか、それは残念だ。だが、有用なもので再現できるものは是非再現してほしい。そのための援助は惜しまない」

「ありがとうございます。次は病を癒すための薬を考えていますので、再生薬の実験の合間にも試していこうかと思えます」

魔法陣は取りあえず時間を見て試そう。今ここで交渉する気力はない。マリィさんを待たせてるからそっちは取りかからなきゃいけないが。



「病を癒すか。それが完成すれば大勢が救えるな」

言葉では歓迎してるようだが、少し思案げだ。やっぱり医者の方とかいろいろあるんだろう。

「試して見ないと分りませんが、ヒールポーションとは違い、数回で使い捨てのアイテムを使って作るようになりますので、その流通方法などはお任せします」

失業率とかを考えて流通量を制限するとかは素人には無理だ。

任せてしまえば俺は厄介ごとを丸投げできるし、領主さんは薬の販売利益と名声が手に入って文句はないだろう。

「善処しよう、任せたまえ」

取りあえずこれで一段落、かな？

何とか無事に家に帰れることになった。

この短時間でどつと疲れてしまったよ。

帰ったら何か甘いものでも食べよう。

領主さんの無言のプレッシャーに比べたら騎士数名の沈黙の重さなんて羽毛のようだね！

可愛いくらいだ。出来ればこんな事態は二度とないようにしたい。

でも本当になんでこんな短期間で王都の話が伝わるんだ？

病死の噂態は届いてもおかしくない。俺が歩いて来て、この街に滞在した時間があつたんだから。

だが、領主さんが王都に連絡を取って状況を調べる時間はなかったはずだ。

俺がこの街に来てからではたとえ馬を使って全力で往復しても間に合わないはず。

今のところ致命的なことにはならなかったとはいえ、この情報の早さは怖い。

他に知られて困る情報はないから考えても仕方ないが……。

なんか、この街は実は鬼門だったんじゃないか？

もっとダメダメな領主の治める小さい街の方がよかったかもしらない。

でもそこで目立ったらもっとまずいことになってたか？

後から悔やむから後悔とはよくいったもんだ。

可能な限りいろいろ考えて努力してるつもりだが、振り返ると穴が多すぎる。

どつすればいいのやら。

## 領主（後書き）

かなり短いですが領主様無双の回です。

情報の早さには一応ちゃんとした理由があります。

とても単純というか、よくある手段なのですが、主人公が気付かないのでかけませんでした。

いつかばらせるといいのですが。

次回の更新もぎりぎり週一を守れるかどうかになりそうです。

お待たせしてる上にクオリティが低くて申し訳ありません。

## 経過

一ヶ月がたった。

いろいろなことを一気に片付けたのだが、おかげで目が回るほど忙しくなってしまった。

最初にやったのはヒールポーションの増産。

樽に文字を彫り中の液体がポーションになるというものだが、使用期限は3ヶ月。

それを過ぎるとただの水になる。

中身のポーションも樽から出して1日で水になるように作ってみた。

理由は簡単で、ギルドで売ってるポーションとの差別化の為だ。

騎士や兵士の為に怪我を瞬く間に治すポーションは是非ほしいところだが、安易に使えるほど安くない。

だから街で売ってるものより使い勝手は悪いものを作って、街の治安維持のための名誉の負傷に限り無料で使えるポーションを配ることになったのだ。

もちろん費用は領主負担。

最初はそんなに急いで作る気はなかったのだが、街の巡回担当の衛視が犯罪者に大怪我をさせられたんだ。

衛視はそんなに高給取りじゃないからヒールポーションを買うのは難しい。

だが、犯罪者の方は盗んだ金でいくらでも買える。

となると、衛視に追われても多小の怪我は顧みず捨て身でかかる酷いになると手傷を負わせて捕まえかけたとき、ポーションを

飲んで元気に反撃。衛視に重傷を負わせて逃走していったという話もあつたらしい。

幸い作成者にまで苦情が来ることはなかったが、ギルドの方には犯罪者に売るなど言う警告がでた。

このままほつとくわけにもいかないのでヒールポーション樽を作成したわけだ。

実はなんの解決にもなっていないが、これで恨まれることはないだろう。

……たぶん。

同時進行で普通のヒールポーション用の樽も作って屋敷に置いてある。

ここからリレイさんが毎日ポーションを出してギルドまで持つて行ってくれることになってるので、全面的に任せた。

はいってくる金銭はそのまま屋敷の生活費に充てられてるはず。はず、というのは忙しすぎて収支の計算が出来てないせいだ。

本気でがんばればそれくらいの計算の時間が取れないわけでもないんだが、任せておいても普通に生活が出来てしまうので任せてしまった。

何も考えなくても美味しい食事がでて、清潔な服が着られる。

困り込まれてる気がしなくもなかったが、これが楽でついつい頼ってしまつてる現状だ。

まあ、この街にいる間は頼らせてもらおう。向こうにも見返りはきつと十分あるだろうし。

他にも庭の一角で温室もどきを作つて香辛料の栽培に勤しんだ。

……サムが。

俺がやる時間は致命的に足りなかったので丸投げだったが、今のところうまくいってるらしい。

香辛料を作ってる理由は簡単で、お菓子に使うバニラとかが高かったせいだ。

辛いものはそんなに好きじゃないが、胡椒とかはほしいところだしカレーも食べたい。米がないけど。

まあ、香辛料が高いといっても俺が食べる程度なら問題がないのだが。今のところ魔法で作るしかない日本の食べ物をサリユーさんに再現してもらうには試行錯誤が必要になる。

その分材料費も掛かるのでいつそ栽培からやってみることになった。

温室が成功したらこの辺では育たない薬草なんかも栽培できることになるので完全に娯楽のためというわけじゃないし。

実際現在も一区画は薬草が植えてある。庭師の腕の見せ所といながらサムがずいぶん張り切って世話をしてくれている。

庭師って薬草の栽培までするんだろうか、とちょっと不思議だったが本人がやる気なのでいいのだろう。

そのうち逆バージョンで密閉室内で気温を下げて寒冷地の植物を育てるのも試してみようかと思う。

高山植物なんかは無理だろうが、思いついたらこっちも試してみたい。

そしてサリユーさんは現在クッキーとコンポート、チーズケーキとカステラ、スポンジケーキなんかを再現してくれた。

クッキーははじめ岩のように硬かったりしたが。

試行錯誤の末サブレッっぽいものやビスケットっぽいものなんかのレパートリーと共に完成した。

力才なんかも手に入ったのでチョコレート風味も完成。

ただ、チョコレートへの道は限りなく遠そうだ。俺も作り方なんて知らないし。

カカオ99%とか一時期流行ったから、カカオだけでは苦いってことくらいは知ってるが。

それまでは調整ココアがココア本来の味だと思ってたし、ココアとカカオは全く別物だと思ってたくらいのレベルだったりする。

ちなみに砂糖も魔力なしでは精製できていない。サトウキビを煮出すと黒くなるんだよな。白くする方法が分らないのでこれも研究中らしい。がんばれ、サリーさんといいでに助手状態のサファト。

サファトは今まで下町で掃除やゴミ集めなんかで小銭を稼いでたらしいが、いまは俺が雇う形になってる。

はじめは自主的にマリイさんの看病の傍らサムの手伝いやサリーさんの助手をしてくれてたのだが、これが働き者でみんなに可愛がられてる。

これなら、ということでも本格的に雇ってみたのだが。

物覚えもいいし、骨身を惜しまず働く。それでいて甘いものに目がないところとか子供らしいところもあって可愛い。

ちょうど人手も足りなくなってきたのでマリイさんの病が癒えたら親子共々ここで働くことになりそうだ。

打診したとき、なぜか泣いて喜ばれたのでちょっと驚いたが。病で職場を失って生活に困ってたらしいので渡りに船だったのだろう。俺としても監視役じゃない働き手が増えるのはありがたい。

マリイさんの病状はほぼ完璧に全快。

咳も出ないし、胸痛もない。熱が出ることもなければめまいもないようだ。

これまでにあった症状はすべてなくなり、日常生活に全く問題が出ていない。

経過観察の期間だし、寝ててくれてもいいとはいったのだが日常

動作に支障がないか見るのにいいでしょう、といって洗濯、掃除などかいがいしく働いてくれる。

母子揃って働き者で頭が下がる思いだ。

とりあえずキュアデイズポーション一瓶飲んでそれ以後全く症状が出てないので効いたと思っただろう。

だが、あまりにあっけなく効いてしまったのでサンプルとしてはもう少し大勢に試したほうがいいだろうということで領主さん経由で被験者を募り試している。

今のところ経過は良好だ。

キュアデイズポーション自体も魔法陣を使った作成方法で俺以外の魔人や人間に作ってもらったりもしているが、これには時間が掛かりそうだ。

10日掛けてやっと必要な魔力量の半分を満たせたものが数名というところらしい。

花茶を使った魔力回復も併用しているそうなので普通に作るにはもっと掛かるようだ。

おかげで俺の魔力量の異常が知れ渡ってしまった。

今のところ問題は起きてないが、ちよつと遠巻きにされてる気がする。

攻撃系統には全く適正がないと言っているが、信じてくれるかは謎だ。

とりあえず、キュアデイズポーションは作成の困難さに方針を変えてみた。

今できてるキュアデイズポーションは万能の品として不治の病や難病に使う。

ほかはこれまで使われてきた薬草の効果を押し上げ、人体に悪影響が出ないように調節することにしたのだ。

最初はそれぞれの薬草でキュアデイズポーション（廉価版）



を作ろうかと思ったのだが、見た目が同じだと混乱の元なのでやめた。

俺も覚え切れそうになかったし。

薬草自体に効果上昇の魔法を使うのは元の薬草との区別がつきにくかったので却下。

悩んだ末に薄い青色のポーションを作り、薬草と一緒に飲むことで飲んだ薬草の効果上昇と悪影響の除去が出来るようにしてみた。今のところ問題がないようなのでこれも結果待ちの状態だ。

何より、これだと医者の仕事もなくならないですむのがいい。

必要魔力もだいたいぶ押さえられて最短3日、平均で5日ほどで完成させることが出来る。

簡単に作れるわけではないので風邪や腹下しなんかの病はこれまで通り普通の処置になるだろう。

重い病に使われることになるだろうが医師の処方する薬草との併用が前提なので医師の仕事もなくなるならない。

回復が早くなるのは問題かもしれないが……。

その辺の収入の低下は空いた時間で副業がてらポーション作成などに当てることで解決してもらおうしかないと思う。

あまりに問題になったら領主さんの方で助成金なんかも考えてくれるようだし。

病関連の魔法陣は管理販売共に領主さんに一任してあるので悪いようにはならないだろう。

助成金も売り上げから出すことで財源には問題がないしな。

うまくいくを願うばかりだ。

そして一番大事な義肢の方だが。

一週間たってもマードックさんに後遺症が出ないのを確認してから数人に試してみた。

魔力がほとんどない人間と豊富な魔人に協力してもらえたので助かった。

おかげで一度に大きな部位を再生させた場合、繭にある魔力で再生自体は行われることがわかった。

そして調整用の魔力が行き渡った時点で動くようになるらしい。

魔人などの魔力が豊富な人間ならすぐに動けるようになる。

少ない人間でも、花茶を使ったりして魔力を回復させ続ければその分早く動くようになる。

さらに回復を促すために魔力補充用にポーションまで作ってみたが、問題なく作用した。

ちなみに色はオレンジでそのままオレンジ味。理由は特にならない。

再生した四肢も痛覚触覚共に問題がないのは確認済み。

繭の生産の目処が立ってない以外に問題はない。

四肢の再生が繭の魔力で行われるので、必要な魔力量が半端じゃないせいだ。

一応魔法陣を作って試してもらったが、10日掛けても1割程度。生産は遠い。

時間さえ掛ければ何とかなる問題なので安価での供給は無理としてもそれなりに普及するだろう。

十分効果を確認したので、明日はセレスに使うことになる。

ここまで気をつけて確認したのだから失敗することはないだろうが、さすがに緊張する。

最近やっと信用されたのか、アナスタシアも騎士さんも席を外して二人きりになることが増えてきたので、二人で出かける約束をしたのだ。

とはいっても、リハビリに庭を散歩して十分歩けるようになったら一緒に街を散歩しようってただけだが。

でも十分立派なデートだよな。

領主さんの許可もちゃんと取ってあるので準備は万端だ。

名目上はリハビリだが、案外あっさり許可されたので驚いた。庭で十分だろうっていわれるかと思っただが、石畳とか人混みの中で歩けるかどうか試すって苦しい言い訳が通ったようだ。

これで怪我でもさせたら洒落にならないので密かにプレッシャーがキツイが、それ以上に一緒に出かけたいと思ってしまったので仕方ない。全力で守ろう。

会いに行くたびに本当に嬉しそうにしてくれるしな。

ポーシヨンとかの進展状況とか、そんなに楽しい話でもないだろうにここに聞いてくれる。

前に話したことも覚えてくれてて、聞き流してるわけじゃないのが良く分るし。

セレスが話してくれるのはもっぱら本の話やアナスタシアの話だが、俺が聞いても楽しいような話を聞かせてくれる。

このままずっと一緒にいたい。

多分、嫌われてはいないだろう。

自惚れかもしれないが婚約が持ち上がれば断られることはないと思う。

ただ、身分が違いすぎる。

遠縁とはいえ領主の身内で両親も伯爵だったというセレスにとっては政略結婚が当たり前だという。

足のことで婚約を破棄されたそうだが、治れば誰かと婚約させられるのだろう。

それまでに釣り合う身分を手に入れば、付き合うことも可能になるのだろうか……。

現在でもポーシヨン作成者としてそれなりの名声はあると思うが、まだ微妙っぽい。

他に俺に出来そうなことといえばモンスター退治くらいか？

それでも諦めたくない。

どうしよう？



## 経過（後書き）

当分更新はこのページになりそうです。  
申し訳ありません。

## 自由

とうとうセレスの足を治す日が来た。

彼女の魔力量は多くないので関節ごとに分けて再生していくのも検討していたのだが。

これまでの研究で関節ごとに分けなくても再生には問題がないことが確認されたので、今日で右足を治してしまう。

再生後に花茶で魔力回復させて行く予定だ。

あとは様子を見て、何事もなければ3日後に左足も治す予定。

リハビリは普通の医者に任せるべきなのかもしれないが、作成者権限で付き添いを許可してもらった。

何かあつたら困るからな。越権行為じゃないはず、うん。

今日城館に出かけるのは言っているもので、準備されていた上質な服を着る。

アリスさんが用意してくれた服は装飾はそれほどないものの、手触りがよく縫い目も細やかでいい品だというのが分るものだった。

……今まで見たことがないデザインだけど。いつの間に用意されたんだろう？

この一ヶ月ちよつとの間にすっかり身の回りのことをやってもらうのに慣れてしまったんだよな！。

忙しかったのもあるが、俺がやるうとする前に準備万端にしてくれているのでついつい甘えてしまったのがはじまり。

食事は前からだが、今では着る服や靴もいつの間にか用意されている。普段着から外出着までばっちりだ。

先日は作業部屋まで用意されて、貴金属や宝石、果ては鉱石なん

かも一通り揃えてあった。

もちろん大量に用意してあったわけじゃないが、あの時は本当にびっくりしたよ。

セレスに贈るためのお守りを作ろうと思ってネックレスとかをいろいろ弄ってたから気を回してくれたらしい。

花の形にしようと思って小さい宝石を買ってきたりいろいろ悩んでたからなあ。

今のところ全滅中だが。

どうもデザインがうまくいかない。誰かセンスを分けてください。

そして今乗ってる馬車だが。これもわざわざ屋敷に用意されてしまった。

自家用車（馬車だけ）ってわけだ。

病院に出かけて様子を見たり、城館で話し合ったりといろいろ移動しなきゃならないから、あった方が楽なんだけどな。

でもさすがに馬2頭は維持費も高くつきそうだ。

執事のクリストファーには一応訴えたのだが、逆に徒歩の道中の危険を訴えられた上に収入から判断すれば全然贅沢じゃないと主張されてそのままになってしまった。

確かに便利だし。人目をはばからなくていいから、揺れ軽減のためにクッションを山のように持ち込んだんだので居住性もアップしている。

そして城館に向かうのにもいちいち騎士さん達が迎えに来ることがなくなったので精神的にかなり楽になった。

御者がサムなのでうっかり寝てしまっても大丈夫だし。

何もかも俺が過ごしやすいように手配してくれるから居心地がよすぎてちよっと困る。

このままここでずっと暮らしたくなってきた。

面倒なことに巻き込まれたり、利用されるようなら逃げればいいや、って軽く考えてたのになあ。

なによりセレスもいるし。

彼女の足が完全に治ったら告白するつもりだ。

治す前だと俺にその来はなくても、足を人質にした脅迫っぽく思われそうだし。

ちゃんと治してからなら大丈夫だろう。恩を着せて、って気もしたさすがにそれはどうしようもないし。

彼女の気持ちを確認してから身分を手に入れるためにがんばるところになるが。

最初にポーシヨンを作ったときにも領主さんは貴族に取り立ててもいいって言うってたんだよな。

義肢の件も含めれば多分身分は手に入るんじゃないかと思う。

釣り合うかどうかは疑問だが。

平民と貴族って身分差よりはマシだと思っしかない。

追々身分をあげられるようがんばればいいことだ。

そんなに簡単に身分なんてあげられるものじゃない気もするが。

クリストファーさん情報によると、恩を売って養子縁組で身分だけ手に入れて分家をたてるとか言う裏技もあると言うし何とかなるだろう。

いや、何とかして見せよう。

……………振られなければ。

なにげにそれが一番問題なんだが、大丈夫だよな？

「いらっしやいませ、ハヤト様」



「ああ、こんにちは。体調はどうだ？」

場所はいつもの病室だが、今日はさすがに緊張する。繭を使うのは俺じゃなくてこの医者なんだけどな。

さすがに医者でもない男に足を見せるのは、ってことで使い方をきっちりみっちり覚えた医者がやることになった。

俺は責任者として立ち会うだけだ。衝立の向こうに立ってるだけなので意味があるかどうかは謎だが。

何かあったときにすぐ側にいた方がいいのは確かだろう。

これまで医者の練習に付き合ってた患者にはなんの問題も出なかったけどな。

「夕べは緊張してなかなか眠れませんでしたけど、大丈夫です」

「そっか。無理しないでくれよ」

隈とかは出来てないし、大丈夫かな？

顔色も悪くはない。よくもないけど。

「終わったらアイスクリーム作って来たからさ、一緒に食べよう」

アイスクリームはセレスが今のところ一番気に入ってるお菓子だ。今回ののはバニラとストロベリーのマーブルという力作だったりする。

両方とも好きだから、きつと喜んでくれるだろう。

「ありがとうございます」

早速治療が始まり、衝立の裏で暇になってしまった。

向こうも再生するまで暇だろうが、こっちも暇だ。

護衛の騎士さん達も衝立のこっち側で所在なさげだし。

この時間は苦手だ。大丈夫だと思っても心配になるし、他のことをするわけにもいかないので手持ちぶさたになる。

さすがに骨やら肉やら再生してるわけだから時間短縮ってのは無理だろうしなあ。

衝立の向こうは取りあえず落ち着いたみたいで、様子観察っぽい雰囲気だ。

落ち着いたらなら布団でも掛けてしまえばこうやって衝立の向こうに隔離する必要なんかはないと思うのだが、そこまで気が回らないようだ。

こっちから声を掛けて言うのも考えたが、向かい合っても気まずい時間が過ぎそうなので大人しく待つことにする。

足一本だと結構時間掛かるんだよなあ……。

途中で落ち着いた医師やメイドさんの計らいでお茶を飲んだりして過ごし。

5時間近く経過してようやく足に変化が出た。

衝立の裏に追い出されたが、無事に足が再生したようだ。

「お嬢様！ 足が、足が………っ」

「これで……旦那様も……浮かばれるでしょう……」

「領主様に報告を！」

「痛みはありますか？」

泣いてるのはセレスのメイドさんか。

旦那様ってセレスの父親か？ 何があったんだろう…。

一人冷静な医者が浮いてるが、セレスが泣いてて返事できないみたいだしなあ。

大丈夫なんだろうか。

「セレス、足の調子はどうだ？ どれくらい動く？ 痛みは？」

どうにか俺の存在を思い出してくれたメイドさんに衝立の裏から  
でる許可をもらい。

泣いてるセレスのところへ行く。

悲しくて泣いてるんじゃないとは思うのだが、足はすっかり掛け  
物に覆われてて見る事が出来ない。

あんまり泣き崩れてるので肩を抱くようにしてのぞき込む。

「なあ、どうなんだ？ 教えてくれ。もし何か問題があるなら、俺  
が絶対治すからさ」

俺が作ったものが失敗してて泣かせてたとして。それを俺が治す  
なんて約束しても滑稽かもしれないが。

セレスに泣かれるのは辛い。

大声で泣きわめいて罵るとかだとさっくり見捨てられるのだが、  
セレスは消え入りそうな雰囲気ですんなりに静かに泣くから。

このまま消えてしまいそうな怖さがある。

その分、笑ってくれると春の日だまりみたいで。

泣かせたくない、笑ってほしいと心底思う。

「だ、いじょうぶ、です。 足が…うごくの、うれ、しくて」

やっとそれだけ言って泣きながらだけど、微笑んでくれる。  
そしてそのまま俺の胸に凭れるようにしてしがみついていた。  
うれし泣きでも俺的には居たたまれないんだが、それでも悲しく  
て泣いてるわけじゃないなら我慢しよう。

「そっか」

長い髪をゆっくり撫でる。

緑が掛かった青色の髪。

日本では、まずあり得ない色だ。せいぜい茶髪程度。金とか赤に  
染めてるような人とは関わりがなかったし。

正直に言えば、見慣れない派手な色彩の髪には違和感を感じる。

それでも俺はこの髪を綺麗だと思う。

セレスによく似合う、と。

多分惚れた欲目なんだろうけど。

ずっと、こうして抱きしめていられるなら。

そのためならなんでも出来ると。

そう、思った。

落ち着いたセレスを駆け込んできたアナスタシアに任せ。

俺は今、領主さんと対峙してる。

「セレス嬢の足は現在片足だけです治りました。3日後には左も

治す予定です」

「そうか。君には感謝している。望みのものがあつたら言ってくれたまえ。可能な限り叶えよう」

鷹揚に頷き、俺に話を促す。

多分、俺が何を望むかなんてお見通しなんだろうな。

最近セレスと二人きりになる機会を与えてたのもそのせいなんだろう。

身内に取り込んで利用する、って気ならそれに乗らせてもらう。

この人は俺が使える限り味方であるだろうから。

「では、遠慮なく。……セレス嬢に見合つ、身分をください」

俺の言葉に薄く笑う領主。思いつきり予想内の言葉だったんだらうな。

手のひらの上で踊らされてる気がするが、仕方ない。

セレスを口説いて駆け落ち、とかもちょっと考えたのだが。

彼女を親しい人すべてから引き離すような真似などしたくないし。

セレスは生活に苦労なんてしたこともないだらう。そんな彼女に逃亡生活をさせたくない。

情けないが、そもそも駆け落ちに賛同してくれそうにないなって思ったのは秘密だ。

そこまで好かれてる自信はない。

これからだ、これから。

「身分でいいのかね？ セレスをくれと言われるかと思っていたのだが」

それももちろん考えたが、品物のようにつれと言つのは抵抗がある。

「彼女に釣り合う人間になって、正面から求婚します」

「そうか」

くつくつと笑う領主さん。初めて見た。

「ならば、王家に功績をたてた冒険者として紹介しよう。これだけの実績があるのだ、根回しなどなくとも叙勲されるだろうが、その辺は任せたまえ」

「王家、ですか」

王家で叙勲されたらグルテルグ家に顔を合わせそうなんだが。まさか髪の色とかを変えていくわけにも行かないだろう。

他人のそら似で押し通すにもコンスタンシアに会ってしまったえば面倒なことになりそうだ。

「グルテルグ家は私の縁者としての経歴があれば手出しは出来まい」

俺が敵意を持つてゐることは分つてゐるだろうしな。

レイシャード家の後ろ盾があると思えばちょっとかいは掛けられないか？

厄介ごとは起きそうだが……領主さんも身分もない相手にセレスとの結婚を許すことはないだろう。

そう思えば、全面的に協力してもらえるこの機会を逃すわけにはいかないか。

「よろしくお願いします」

なんだかどんだん墓穴を掘ってる気がするが……。  
望んで掘ってるのだ、諦めよう。

限られた自由しかなくても、利用されてたとしても。  
それでも彼女がいれば幸せだと思えるのだから。

自由（後書き）

セレスの髪の色は浅黄色です。緑味のやや薄い青。  
結構派手な色だと思います。



## 婚約（前書き）

打ち切りEND的な。

俺たちの冒険はここからだ！的ENDです。

言い訳というか理由は後書きで……。

## 婚約

右足に異常はせず、続けて左足の再生を終えてセレスの足は無事完治した。

リハビリも順調で、庭先程度なら歩くことも可能だ。今日は快気祝いということで城館でパーティがある。

もちろん俺も呼ばれている。

一応薬の作成者だしなあ。

まだ身分もないしあまり目立ちたくはないのだが、仕方ないだろう。

セレスのエスコート役という大任を任されてしまったので、ここ数日クリストファーさんに礼儀作法を仕込まれてる。

彼女がまだ激しい動きが出来ないためダンスがないのだけが救いだろう。

それでも着慣れない礼服は装飾過剰で動きにくいことこの上ないが。

そしてそれ以外にも。

パーティが始まるまえにセレスに結婚を前提に付き合っしてほしいと申し込む予定だ。

まだ爵位もないのに気が早いとは思うのだが、パーティ会場で打診してくる輩がないとも限らない。

領主さんには話を通してあるが、セレスにも言っておきたい。

セレスが嫌がればそれはそれで領主さんに話を通さないと良縁を逃す可能性があるわけだし。

……ちよつとそれもいいかな、と思ったが。

振られたからといって幸せを妨害するような人間にはなりたくない

いしな。

肯の返事を期待しながら作成途中で投げ出しかけてたお守りの完成を急ぐ。

今回は婚約出来た場合の贈り物なので指輪バージョンでがんばってる。

最初に銀でごく薄いリングを作成。そこに、細い針で「物理攻撃無効」「魔法攻撃無効」「毒無効」を書き込み魔力を込める。

そして上から銀で覆い文字を隠す。これで、シンプルな銀の指輪の完成。

さすがにこのままではいくら何でも素っ気ないので、マードックさんに頼んで細かいモチーフを彫り込んでもらった。

うっかり何度か文字を破損して効果がなくなったのだが、それはそれで。

完成の確認の為、部屋に置いた甲冑に斬りかかったり攻撃魔法を使ったりしたのだが。

部屋のセキュリティの万全さもついでに確認できてよかったと思う、うん。

4回目でようやく完成したのだが、そのあとになって最初から装飾したリングを半分削いで、魔法を込めてからくつつければ良かったような気がした。

……俺の分もお揃いで作るので、そっちが出来てから気付くよりはマシだったと思う。

パーティを明日に控えて。

俺は今セレスと共に庭の散歩中。

一応今は監視兼護衛の騎士もいないし、メイドさんは四阿で控えている。

セレスはまだ長時間歩くのは辛いので、早く告白しなきゃならぬのだが……。

実は告白なんて生まれて初めての経験だ。

かなり緊張する。

しかもこの年で結婚を前提に、ってのは難易度が高いよな。

でも遊びで付き合い合おうってんじゃないから当たり前なんだが。

俺の態度があんまり不審なのか、セレスも困惑している。

まあ、何度も何度も話を切り出し掛けては「なんでもない」で逃げたからなあ。

ちよつと情けない。

まだ嫌な顔をせずに付き合い合ってくれてるが、いい加減にしないと情けなさで告白するまえに振られそうだな。

「あのお、セレス」

「はい、なんでしょう?」

俺を見上げて控えめに微笑む仕草。3回目くらいだが、それでも付き合ってくれる。心の広さが半端ない。俺だったら2回目で問い詰めそうだな。

「……好きだ。俺と、結婚を前提に付き合ってくれないか？」

「えっ……」

びっくりしたように目を見開いて固まってる。

単刀直入すぎたか？ いや、基本はそう言う話なんだが。

「急な話でごめん。俺はまだ身分もないし、年もそんなに違わないし頼りないとは思っけど。でも、セレスを守るように強くなる。身分もそれなりに釣り合うように成り上がってみせる。だから、予約させてくれないか？」

誠心誠意を込めていったつもりなんだが、セレスは俺の言葉を聞いて俯き、泣き出してしまっ。

泣くほど嫌われてたとは思わないのだが、それでも泣くほど喜んでくれたって可能性の方がいいよな。一応顔と足の恩人だし断るに断れずに困って泣いた、という線か？

「ごめん、他に好きな相手がいるとかなら遠慮なく言ってくれて良  
いから……」

「ち、ちがいます。あの、ハヤト様はアナスタシアが好きなんだと……そう思ってたので、びっくりして……。で、でも、うれしい、です。私もハヤト様が……」

最近アナスタシアにはあんまり会ってないし、ここに来たらまっすぐセレスにだけ会ってたのにそんな誤解をされてとは思わなかったな。

「俺はセレスが好きだよ」

控えめなところや、優しいところ。穏やかな雰囲気が一番いい。癒されるというか。側にいて安心できるんだよな。

確かに美貌というならアナスタシアだろうとは思うが、俺はセレスの方が好きだ。

美人は3日で飽きるというがセレスの可愛さは全然飽きない。

「……………ありがとうございます」

うあ。涙目のまま、上目遣いに見上げて微笑まれた。

やばいくらい可愛い。精神的にクリティカル攻撃を食らったくらいのダメージが。

衝動が抑えられず、抱き寄せてキスをしたのは許させれるだろうか。

誰にも見つからなかったようだし、大丈夫だよな？

「俺の故郷では婚約の印に指輪を贈るんだ。……………着けててくれるか？」

頷くセレスの左手を取り、薬指に指輪を通す。

サイズはちよつと大きめに作ってあるのだが、それは填めた指にぴったり合うように魔力で微調整する。

最初からぴったりに作った方がいいとは思ったのだが、細工の都合上難しかったので仕方ない。

「ありがとうございます。一生大事にします」

嬉しそうに微笑むセレスを見て。

俺も、彼女を一生大事にしよう。そう、思った。

これからもいろいろあるだろう。

明日のパーティもだが、叙勲を受けに行かなきゃならないし。

まだまだ作りたいものや、あった方が生活が楽になるような品も作って普及させたいし。

稀とはいえモンスターの襲撃があるのだから、その対策もしたい。

それらすべてをひっくるめて。

セレスと一緒にこの世界で生きて行こう。

ずっと異世界だと思ってたこの世界だが。

ここに大切な人がいて、家が出来て。

俺はこの世界に根を降ろせる。そう、思った。

## 婚約（後書き）

言い訳コーナーです。

再登場予定だった骨斧の皆さんとか。

空気になってる戦闘とかモンスターとか。

ついでに番外編の別視点とか。

本当はまだまだ続く予定だったのですが、限界を感じました。

アイテム開発や道具を通した国の発展などをぬるく書きたいと思っ  
てたのですが、

後ろ盾や権力のために中途半端に貴族などを出してしまつたため  
でしょうか。

政争や主人公の立ち位置などにいろいろ指摘いただいたのですが、  
貴族社会のごたごたも兵器開発も

さらには国家間の戦争なども書くことが出来そうにありません。

当初の予定のまま書き進めようかとも思つたのですが、指摘を無視  
し続けるのは私の精神的に不可能と判断しました。

婚約の段階でかろうじて一区切りがつくので、無理に続けて途中で  
投げ出すよりは、ここで終わらせることにしました。

無理矢理な打ち切りENDっぽさが漂い、申し訳ありません。

また、感想は毎回とても楽しみにしていたのですが

辛く感じるようになってしまい、お返事を書ききれなくなっていま  
す。

申し訳ありませんが、ご了承ください。



落ち着いたら懲りずに何か投稿することもあるかもしれません。  
そのときはどうぞ、よろしくお願いします。

今まで、読んでくださった皆様。  
本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9274p/>

---

ある魔術師の話

2011年3月4日14時52分発行